
総合セッション第2部

総合討論

コーディネーター



佐藤元彦
愛知大学

川井伸一
愛知大学

2007年12月16日(日)

●—司会（佐藤元彦） それでは、本日のセッションを始めさせていただきます。

本日ですが、昨日に引き続きまして総合セッションの第2部です。午前中は主に愛知大学の関係者、あるいは愛知大学国際中国学研究センターの関係者からのコメントをいただきたいと思います。

そして昼休みをはさみまして、午後に昨日と本日午前中のコメントを踏まえた「総合討論」を予定しています。

本日のコーディネーターは2名です。午前中は私、愛知大学の佐藤元彦が担当いたします。午後は私の左隣に座っております愛知大学の川井教授が担当されますので、よろしくをお願いいたします。

それでは早速、昨日に続きまして、先ほど申し上げましたように愛知大学の関係者、あるいは愛知大学国際中国学研究センターの関係者からのコメントを順次お聞きしたいと思います。

それでは最初に鈴木規夫先生、お願いしたいと思います。

●—鈴木規夫 おはようございます。ICCSの運営委員に加えて頂いている、愛知大学国際コミュニケーション学部の鈴木です。

まず昨日の加藤紘一さんの話のなかに、近代日中関係における分水嶺として、1915年



の対華21条要求の話が出てまいりました。愛知大学初代学長の林毅陸は、当時衆議院議員でしたが、大隈内閣に「何と愚かな外交か」と質問しています。有識者はわかっていたけれども留められなかったという歴史の問題でもありますが、なかなか示唆的な質問で、少なくとも1915年の段階でその後の日中関係の展開の性格を照らし出すような言説が、私どもの大学の初代学長の発言記録として残っているということに、意義深いものがあると考えております。

そうした本学の伝統を踏まえまして、加々美先生が問題提起なさっている「コ・ビヘイビオリズム (co-behaviorism)」の提唱について、私はとりわけ「地域」という概念の問題に特化して、3点ほどコメントさせていただきたいと思います。

まず、「地域」という用語の使い方の問題です。近代日本がアジアにおいて帝国主義的な展開をする場合、ご存じのように自らを「帝国主義」とは自己規定しなかったわけです。ヨーロッパの列強諸国は、クリスティアニティを背後にもった「啓蒙」や「文明」という視点から申しまして、帝国主義という用語法に何の躊躇もありませんでした。

その自己欺瞞に陥っていた「帝国主義」的侵略を、中国大陸やアジアへ展開していくに際して、戦前の日本では、「帝国主義」という用語を避けるために「リージョン (region) = 地域」という言葉を用いたのです。主には政治学的な意味での「地域」という用語の概念史において、これは基本の問題です。

日本政治史の三谷太一郎先生によれば、この「地域」概念が戦後アメリカに横滑りしていくこととなります。つまり、戦前の日本帝国主義が「地域」という概念で、自らの「帝国主義」性を隠蔽して東アジアにおいて展開

してきたことを、1945年以降はアメリカが実際にやっていたという議論があります。その歴史的成立過程から言っても、現在のブッシュ政権以前にはアメリカの政権が自らを「帝国」であるなどとは言っていなかったわけですから、これも頷けます。アメリカ国民に「帝国主義者」の自覚がなかったことと、戦前の日本国民にも「帝国主義者」の自覚が乏しかったという共通性も興味深いのですが、こうした議論は、ご存知のように、三谷先生ばかりではなくて、アメリカのブルース・カミングス (Bruce Cumings) 先生なども指摘するところです。おそらく、戦後の冷戦構造の形成等によって見えにくくなってしまっていた、そうした基本的な観点から「地域」という問題を考えて直してみてもよいのではないかと思います。

第2に、「国策」の問題です。加々美先生は国策に対する批判的な視座も「国策」という言葉の示す範疇の中に入めると言われておりますが、その国策的な志向の「主体」をどのように考えておくのかということなのです。

そして、「地域」をめぐる「主体」という観点から、第3に、「地域」概念自体を帝国主義との相関において考えていく場合、「コ・ビヘイビオリズム (co-behaviorism)」論に、中東研究の板垣雄三先生の「n地域論」を応用してはいかがかと考えています。

「n地域論」の「n」は変数です。ある研究主体あるいは研究実践主体が、その「地域」や「問題」自体にどのように取り組むのかというフィールドの設定によって、幅は伸びたり縮んだりあるいは位相空間が重なったりするという概念として「n地域論」は展開されています。この「n地域」論とコ・ビヘイビオリズム論との相互の精緻化がはかられていくと、昨日小林先生がコメントされたよ

うな危惧は和らいでいくでしょうし、もう少し理論的応用範囲が広がっていくのではないかと考えております。時間がまいりましたので、以上で取り敢えず私からの発言は閉じさせていただきます。ありがとうございました。

●—司会 はい、どうもありがとうございました。それでは続きまして、愛知大学の高橋五郎先生、お願いします。

●—高橋五郎 おはようございます。高橋です。昨日、私が申し上げましたように、最も大きな問題をのちほど申し上げます。レポートを出しておりますので、そのレポートに従いましてコメントをいたします。

加々美論文は、「地域研究には、他の学問分野とは違う固有の研究方法論 (メソドロジー: methodology) が必要なだけでなく、そうした方法論を確立することが可能である」とされております。こうした問題のもとで書かれている加々美論文の基本的なフレームワークをごく要約しますと、1つは地域研究の方法的組み立て。2つ目が地域研究の「国別学」。そして、その一分岐としての「現代中国学」への転換をいかにしておこなうかという点にあります。

そして、この構成についての思想上の展開を図るため織り込まれているのが、「オリエンタリズム (orientalism)」「国策研究」「共同態度性 (co-behaviorism)」という3つのキーワードだと思います。

加々美論文から、地域研究になぜ他の学問分野とは違う固有の研究方法論 (メソドロジー: methodology) が必要なのかを読み取ることは必ずしも容易ではありません。しかし、この問題を助けるのに有効な言葉が、オリエンタリズム (orientalism) をはじめとする3つのキーワードです。加々美論文は、オリエンタリズム、そしてその背後に付着する

国策研究をいかに克服するか、という研究方法上の課題は解決されにくいという視点から、オリエンタリズムの染み着いた地域研究の国別学への転換を思考いたします。

この変化の過程を表現するにふさわしい言葉を探すことは難しく、国別学とは地域研究からの研究方法の形態的な止揚であると言えるでしょうか。さらに、ありうる変化の過程の暫定的表現にすぎないものなのでしょうか。判然といたしません。

しかし、一定の研究方法论を持ち得た場合には、地域研究を国別学に変えるべきものだとする文脈からすると、地域研究から国別学への落ち着きが、差し当たりの目標ということになるでしょう。加々美論文は、ここで国別学は「中国学」「インド学」「タイ学」等々へと分岐していくことが可能であるという理論的根拠を示すこととなります。

ここで指摘し得る点は、「コ・ビヘイビオリズム」は、固有の学問領域、あるいは研究方法論と言えるかどうかということです。通例、固有の学問領域とは政治学、経済学、歴史学、民族学、民俗学などの諸分野を指していることが一般的です。これら広義の分類に対する狭義の分類という言い方をすると、中国政治学、中国経済学、中国歴史学等々と言うことができます。

しかし加々美論文の場合、これを当てはめること、まず国別学を広義の分類とし、中国学、ないしは中国国別学を狭義の分類そのものでなければなりません。その際に、まず「コ・ビヘイビオリズム」が、学問研究の姿勢としては理解できますが、政治学や経済学と同じような具体的な研究方法としての分析用具的内容、あるいはその力量を持ちうるものであるかどうか、という点が大きな論点になると思います。オリエンタリズムの克服が

果たしてできるかどうか、という問題も根本的にあります。加えて昨日の議論などをうかがって思いますのは、場合によっては、私どもが現在中国を評価しようとしている際、とりわけ経済発展のすさまじい状況を理解する際、場合によってはアドラー (Alfred Adler) のように大きな誤解をしている可能性もあり、これが逆説的なオリエンタリズムであるかもしれないという危惧を持っております。以上です。

●—司会 はい、ありがとうございます。あまり時間がありませんので、次々ご発言をいただきたいと思います。それでは次に、愛知大学経営学部の川井伸一先生、お願いいたします。

●—川井伸一 2点ほど指摘したいと思います。加々美論文の「コ・ビヘイビオリズム」の方法論自体は大変重要な指摘だと思います。ただ、そのままディシプリン (discipline) としての現代中国学に成り得るかどうかについては、まだ考えるべき点があるように思われます。

「コ・ビヘイビオリズム」は、主体と客体の分裂という旧来の状況を明確に批判し、それを克服しようということです。ただその際、主客、主体と客体の共通認識、その一体化を求めようというものですが、それはやはり大変難しい面もあるのではないかと思います。

例えば、対象とする地域社会のさまざまな諸主体の関係が複雑に錯綜している今日の地域社会において、その関係を全体として客観的に把握し理解するためには、やはり個々の利害関係者に対する敏感な目配りとともに、彼らに対して一定の距離を確保する必要があるのではないかと。

一般的には、研究主体は対象とする外国地

域社会における諸主体間の特定の利害関係のなかに直接的に身を置く必要は必ずしもありません。たとえ特定の利害関係者の立場に共感するとしても、その立場から全体の利害関係を見ることは、かえって全体の利害関係に対する客観的な理解を妨げるバイアスとなる可能性も見ることがあるかと思えます。したがって、全体としての客観性をいかに積み上げていくかという方法が問われるかと思えます。

第2に、地域研究の体系的なフレームワークを構築する課題についてです。やはり既存の諸科学のディシプリンとの関係をどのように考えるかという点、そして地域研究の独自の体系的なフレームワークをいかに明らかにするのかという大きな課題があるかと思えます。

特に地域へのアプローチにおいて重要な視点は、第1に地域の全体性、第2に他方で地域の多様性、そして第3に地域の重層性、そして第4に移動性、越境性だと思えます。それは言い換えれば、地域社会を全体と部分との関係において、どのように捉えるかという課題です。

グローバリゼーションのなかで、その影響によって各地域単位のありようは、やはり複雑に絡み合っただけで絶えず変化しています。このようなことを踏まえて、それぞれの地域を捉えていく必要があるかと思えます。どのような地域単元に注目するにせよ、そうした全体と部分との関係性において中国社会をアプローチしていく必要がある。そのようにして、中国の個性なり普遍性なりがよく把握できるのではないかと思えます。

したがって、「コ・ビヘイビオリズム」の方法は、私の理解では、基本的に態度、モラル、倫理、そのような側面の問題ではないか

と考えています。現代中国学のディシプリンを構築するまでには、先ほど言いましたような課題があるのではないかと思います。以上です。

●—司会 はい、ありがとうございました。続きまして古澤賢治先生、お願いをいたします。

●—古澤賢治 時間がありませんので簡単にいたします。ペーパーを出しておりますが、私自身、どうも「コ・ビヘイビオリズム」がよくわからないのですが、加々美先生のペーパーのなかで非常に面白かったのは、日本の中国研究の中心であった中国研究所、あるいは現代中国学会、それからアジア政経学会とアジア経済研究所の成立過程についてお話をされているところです。これ自体がひとつの大きな歴史的な経過として、日本の中国研究の方向を決めてきたと思えますが、その背景として、いかに客観的に地域研究を進めるかという流れのなかで政治的な問題が絡んで出てきました。

このオリエンタリズムに対する1つの評価の方向性としては、竹内好の考え方を取り上げて、その持続的敗北という予言の問題、このような大枠のなかで、どうしてアジアは西欧に勝てないのかという問題が出てきていたわけです。1つの可能性として、戦後のアジアの発展と最近の中国の目覚ましい発展が方向性を決めてきていると考えるのですが、このなかで私は消極的アンチテーゼと、さらにジンテーゼというかたちでの、日本をはじめとするアジア、中国の発展が考えられるのではないかという気がしています。

そのなかで、とりわけ戦後の日本の成長と敗北の過程からどのように見るかというようなことを1つの軸にできるのではないかと思います。

特に中国は近代化を取り込む、とりわけ改革開放以降の近代化が欧米と張り合うかたちでのやり方と、さらにそれに従っていく近代化の流れのなかで、中国が覇権国家として登場をしはじめているというような感じで、中国の地域研究の方法論としてのパラダイムは「共同主観の歪み」をいかに訂正して、方法論としての位置づけを進めるかにあるかと思えます。

このような基本的な方法論に関しては、なおまだ私自身が考えるところがありますが、不十分ながら私の発言を終わらせていただきます。以上です。

●—司会 はい、ありがとうございます。次は私自身ですので、よろしく願いいたします。

●—佐藤 あらかじめ提出したコメントペーパーをほぼ読みあげるかたちで申し上げたいと思います。

オリエンタリズムの再生産、オリエンタリズムの認識構造だけではなく、存在構造もが強力に復活してきているということに対抗する「態度」としてのコ・ビヘイビオリズムの提唱は、私にとっては大変魅力的です。ただし、コ・ビヘイビオリズムを確立するために、オリエンタリズムが影を落とした従来の地域研究に代わって、国別学が提唱されている点については疑問がないわけではありません。

加々美論文は、国別学の前提として、研究対象となる各「国」のさまざまな諸主体、具体的には国家などが主体性を持つこと、そしてそれは外国人でもある「国別学」研究者の主体性と同格なものとして存在することを、はじめに提起しておられます。

そして第2には、諸主体間の相互連動性、「共同主観的存在構造」が挙げられています。

最後に3つ目として、外国人研究者は、相互協調的、相互癒着的、あるいは相互対立的な働きをし得る輻輳した「共同主観性」のなかに分け入って、オリエンタリズムの認識構造、存在構造を明らかにし、その状況のなかから課題を見つけて、その解決を目指すということが求められているわけです。

しかしながら、近代主義の克服を目指すのであれば、「態度」としてのコ・ビヘイビオリズムが必要であるのみならず、特に近代の社会科学が前提としてきた「国」「国家」あるいはネーション (nation) の境界性を問い直すという営みが必要ではないでしょうか。これが私の問題関心です。

この点は、いわゆるグローバル化の進展によって、近代国家の境界性が実質的、機能的に薄められていることを言おうとしているものではありません。近代における境界が、多くの場合、山や河、海といった自然資産を利用して設定されてきたことにかかわるものです。山、河、海が分割され、それらを丸ごと保全、管理することを怠ってきたことが、今日の人間生活を危うくしていると言っても過言ではありません。その最たる例は、領海、経済専管水域による海の分断として考えることができると思います。

このように考えますと、オリエンタリズムに代表される近代主義を克服するためにも、境界性の克服、さらには「越境学」の確立を追求することが必要であるのではないかと思います。

もっとも、論文では明記されておりませんが、「共同主観性」が越境性への視点を含んだものであると考えられないわけではありません。それはあくまでも国別学として提起されており、一国学としては考えられていないという点から推量できます。ただし、この推

量が妥当であるとすれば、そうした点への言及は必要ではないかと考えます。例えば、インド学とインドネシア学をどのように結びつけるのかといった点については、詳細な解説が望まれると思います。

言うまでもないことですが、境界性の克服、あるいは「越境学」の確立は、境界そのものを否定するというものではありません。なぜならば、およそすべての社会は何らかの境界なしには成立しないと考えられるからです。ガバナンス、マネジメントということを考えれば、むしろ境界は必要です。問題は、それがどのような性格の境界なのかという点です。ストックを重視するという観点からは閉鎖的な境界が必要となりましょうが、閉鎖的な境界というものがさまざまな問題を引き起こしているとするならば、フローを促すような開放的な境界が考えられる必要があります。

先に挙げた、例えばインド学とインドネシア学の関係の在り方についても、この点に踏み込むことが期待されます。さらに言えば、オリエンタリズムの再生産を通じて展開されている画一性、標準化、一方的などを特徴とするこんにちのグローバル化に代わる多様性を基調としたオルタナティブ (alternative) なグローバル化なるものが想定できるとすれば、それは国別学が境界性をどのように克服しているのかにかかわっていると言っても過言ではないと思います。私からのコメントは以上です。ありがとうございました。

●—司会 それでは続きまして、愛知大学経済学部の李春利教授からお願いをいたします。

●—李春利 先ほどの佐藤先生の議論と部分的にその延長線にあると思いますが、一部見方が違うところもあります。コメントペー

パーを提出しましたので、基本的にそれに沿ってお話をさせていただきます。

加々美教授の論文を読ませていただいて、まずその真摯な学問姿勢に対して最大の敬意を表したいと思います。私も勉強になったところは少なくありませんでした。なかではとりわけ認識構造と存在構造に分けてオリエンタリズムを、あるいは中国研究を批判的に検証したところが特に興味深いです。

コメントは3つあります。まず1点目は、グローバリゼーションとIT技術の進化による方法論的な同質化と地域研究の限界についてです。2点目は、『鏡の中の日本と中国——中国学とコ・ビヘイビオリズムの視座』については、昨日、加藤紘一さんの講演会のときに質問をしましたので省略します。3点目は、研究方法としての日本的な中国研究と地域研究の特徴ですが、ここは1点目に絞って話をさせていただきます。

先ほどもグローバリゼーションの話が出ましたが、加々美先生が中国研究に関して問題提起をされたタイミングがあまりよくなかったのではないかと思います。これだけグローバリゼーションが進展しているので、地域研究における方法論的な自立は、これまでよりはさらに難しくなったのではないかと考えます。とりわけ統合化の進展により、存在構造としての世界は多様性よりも共通性、透明性、公平性を重視する方向へと進んでいます。特に方法論として共通の基準やパラダイムが求められ、その結果として同質化が進んでいます。それはいわゆる「グローバル・スタンダード」の問題です。これは別にアメリカ・スタンダードということではありません。

例えば、WTO体制、地域統合、あるいはインドネシアのバリ島で議論が進んでいる

「パリ・ロードマップ」の話、ポスト京都議定書の枠組みづくり、FTA 戦略、いずれも統一かつ包括的な枠組みの構築により、それぞれの地域の特有の問題の超克を目指しているわけです。いまはそのような時期にありますので、方法論的には、多様性をもっと重視すべきだという意見の重要性は理解できるものの、現実にはむしろ逆の方向へ進んでいるのではないかと思います。つまりグローバリゼーションが進展した結果、存在構造としての、かつてフェアバンク(John King Fairbank)氏が言っていた「Western Impact (西洋の衝撃)」が、これまで以上に強くなったと思うわけです。オリエンタリズム批判の限界もここにひとつあるのではないかと思います。

一方、研究対象となる中国ですが、加々美先生の本のなかでも触れられているように、中国は基本的にグローバリゼーションを内包しようとしてきたわけです。つまり、毛沢東時代の「掙扎」よりは——これは加々美先生の言葉ですが——いまの開放政策の本質はむしろナショナル・アイデンティティ(national identity)のようなものを放棄して、多様性よりも協調性に軸足をシフトさせてきたということです。

中国はグローバル化の恩恵の最大の受益者ともいわれており、改革開放政策や WTO 加盟といった政策はいずれも国際協調路線を基本としているわけです。このような文脈からすると、過去30年間の中国の改革開放は、西洋中心的思想やいわゆるグローバル・スタンダードのなし崩し的な受容にほかなりません。そのような存在構造としての中国および世界の現状を等身大に受け止める必要があるのではないかと思います。

最後に1点だけ補足します。IT技術の進歩は、中国社会における世論の形成に大きな

インパクトを与えました。中国ではいわゆる「網上民主(インターネット・デモクラシー)」とよばれる潮流があります。これまでの日中関係は、お互いに自身の変化を十分に自覚しないまま、相手の変化だけをとがめるといふ非難合戦に突入したという傾向があります。それによって、ちょっとした火花でも燎原のごとき大火事になってしまったという側面もあります。インターネット時代あるいは情報化時代は、日中関係をより複雑なものにしてしまったという技術面の変化も見逃せません。

●—司会 はい、ありがとうございます。先ほど私自身が話をして5分で話すことがいかに難しいかということを感じました。午後に総合討論の時間がありますので、なるべくポイントを絞って5分にまとめていただければありがたいと思います。

それでは、続きまして愛知大学経営学部の田中英式先生、お願いいたします。

●—田中英式 愛知大学経営学部の田中です。私が取り上げたいことはオリエンタリズムです。加々美先生の論文では、オリエンタリズムの弊害が再三にわたって批判されながらも、今日に至るまで根強く再生産されていることを指摘されたうえで、結論のなかで、オリエンタリズムを修正すべき「歪み」として捉えておられます。

私の問題意識は、現在のグローバル社会において、果たしてオリエンタリズムを「歪み」として認識すべきかどうか、さらには、そもそも「西洋中心主義」としてのオリエンタリズム自体が存在するのかどうかという点です。この問題につきまして、「オリエンタリズム」と「近代化」との関係から考えてみたいと思います。

地域研究の対象は、いわゆる発展途上国と

呼ばれる国々です。その開発、発展を目的とする国際開発学の領域では、発展途上国の近代化が主要な課題の1つとして議論されてきました。その際、西欧諸国型の近代化ではないオルタナティブ (alternative) の必要性は指摘されつつも、その具体的な方向づけや戦略が提示されたことは、これまで一度もありません。

したがって、西洋型の近代化以外のオルタナティブは存在しないという認識は、先進国、途上国、両者を含む現在のグローバル社会に共通するものではないかと言えると思います。

加々美先生の論文では、地域研究における諸主体と研究者自身の諸主体との間に、オリエンタリズムが「歪み」として介在することを問題とされていますが、「オリエンタリズム＝西洋型の近代化を優位」と考えるという「目的意思的な態度」(価値観)を、先進国、途上国ともに共通して持っているのであれば、これはもはや「歪み」とは言えないのではないのでしょうか。

さらに、アジアの経済「離陸」の経験、あるいは「内発的発展論」の議論を鑑みれば、現在のグローバル社会が共有している「近代化」という認識自体に、そもそも「西洋中心主義」という意味でのオリエンタリズム自身が存在しているのか、という議論も可能です。

すなわち、開発途上国は西欧諸国とは違ったさまざまな経路を通じて近代化を達成することができます。あるいはすべきという考えが多く見られます。つまり、近代化自体は西欧諸国が生み出したものであっても、その達成プロセスは必ずしも西洋型が優位性を持つものではないという理解です。

この点に関して、加々美先生の論文では、

政治学、経済学、経営学等の既存専門領域では「オリエンタリズム批判を実質的に免れた」とされていますが、むしろ実際のアジアの「離陸」過程を通じて、各専門領域における西洋型の優位性が否定されてきたのではないのでしょうか。

例えば政治経済学の領域では、世界銀行の『東アジアの奇跡』(World Bank)、そこで西欧とは異なるアジア型の政府の優位性が指摘され、専門領域のディシプリンに大きな影響力を持ってきました。また経営学の領域では、日本のものづくりの方法、生産システムや企業間関係の優位性、そのようなものが経営学のディシプリンに大きな影響を与えてきたと思います。

すなわち、西洋近代はその自己拡張、自己実現の過程で、西洋から離れ、東洋を含めた多種多様な近代化の可能性を提示しているのではないかと考えます。すなわち、われわれが現在共有している近代化という認識が、もう既に「西洋中心主義以外の近代化」ということになれば、そこにオリエンタリズム自体は存在しないのではないかと考えます。

以上のように、オリエンタリズムとは果たして「歪み」として認識すべきものか、あるいはそもそもオリエンタリズムが存在するのかどうかということが、私の問題提起です。以上です。

●—司会 はい、ありがとうございました。それでは次に現代中国学部の張琢先生、お願いいたします。

●—張琢 我的算不上是一篇论文，只是对加美先生长篇大论的一点小小的回应，因为只给5分钟，当时约的是2000字以内，恐怕我的还不到2000字。但是开始这个题目就成了问题，有些先看过的年轻的朋友问：什么叫“肺腑若能言，医生面如土”，就是论文集的第

61页（本報告書286～287ページ）。这个问题本身让我很高兴，就是现在大家居然不懂得这个意思。这个“医生”，就是中国传统所讲的“江湖郎中”。中国传统的医学，日本叫“汉方”、“汉医”，讲的是“望”、“闻”、“问”、“切”，当然也有些很有经验的，通过号脉就能够知道孕妇怀的是男孩还是女孩，我就认识这样的医生。但是相当多的是江湖“混混”，“混混”我不知道好不好翻译，也就是“蒙”，如果肺腑自己能够说话，他瞎蒙的那些就闹笑话了，所以“肺腑若能言，医生面如土”。当然，到了近代，20世纪中期以后，X光透视，现在B超、核磁、内窥镜都能够把你的五脏六腑看得清清楚楚。西医一讲透视，二讲化验，化验你的血，化验你的尿，化验你的大便，就知道你的内部器官的病变，所以，对现代的西医，这句话不能够成立了，大家也就淡忘了。这句话是鲁迅当年有感于那个时候的中国的中国学学者说的，一个典型的例子，就是1926年，一个叫安岗秀夫的写了一本书，叫做《从小说看来的支那民族性》，鲁迅说他一向对别人揭中国人的短、中国人的缺点是很高兴的，是很受欢迎的，但这本书里面讲了很多，有些呢，却也令人莫名其妙。我今天讲一个轻松的话题，比如安岗秀夫断定从小说可以看出中国民族性的其中一个，就是好色、淫秽。他的证据是什么呢？是中国人爱吃竹笋。那个竹笋是什么呢？像男根“挺然翘然”（《鲁迅全集》卷三，331页）。鲁迅说，我家就是出竹笋的地方（他是浙江人），我们家就爱吃竹笋，可是我在吃竹笋的时候就从来没有这么想入非非，可能也就是不如安岗氏比“支那人”更有性底敏感罢……话不用多说了，这篇文章很长，请你们看《鲁迅全集》第三卷《华盖集》里面的《马上支日记》续编。还有，就是给著名的内山完造的《活中国的姿态》写的序，鲁迅多次讲到这个例子，讲得很幽默，因为时间关系，

我就不重复他的幽默了。谢谢！

●—司会 ありがとうございます。引き続いて愛知大学現代中国学部の馬場先生、お願いします。馬場先生は現在、現代中国学部の学部長をされております。よろしく願います。

●—馬場毅 時間が限られておりますので簡単に申し上げたいと思います。加々美先生の論文については、いろいろ啓発されましたが、やはり若干違和感を抱く点がありますので、その点について少し述べさせていただきます。

まず第1点は、中国に対してオリエンタリズム的認識を持っているかどうか、少なくともそれを歴史学の立場で持っているかどうかということについて述べさせていただきます。

このオリエンタリズム云々ということで私が想起しますのは、戦争直後、歴史学研究会を中心におこなわれた世界史の基本法則を中国史に適用しようとする試みを取り上げたいと思います。そこでは戦前、戦中の時期、中国史に対してマルクス主義的方法論によるアジア的生産様式を適用した試みが、結果的には西洋や日本は時代の進展による発展段階を経たのに反して、古代から近代までの中国社会の停滞性という認識をもたらし、戦前、戦中の日本人の中国への蔑視観と相まって、帝国主義日本による遅れた半植民地中国への侵略に対しての論理的な批判にならなかったという反省を含意していたと思います。

すなわち、そこには「オリエンタリズム」という言葉は使っておりませんが、中国に対してオリエンタリズム的思考で考えることに対しての批判が内包されていたと思います。そして同時に、1949年に中華人民共和国が成立して社会主義を目指すことが明白になっ

てきたということも背景としてあると思います。

しかしながら、スターリンによって定式化された原始共産制から社会主義までの発展段階を中国に適用するには、やはり無理がありました。そもそも発展段階論が西洋社会の発展段階を基礎としています。ただ当時は中国においても、そのような発展段階があるということを証明することによって、いわばオリエンタリズム的な思考方法を離脱する指向性があったと思います。

どのような点が無理であったかという点、細かいことは少し省略させていただきますが、一例を挙げると、例えば領主同士の封建制 (feudalism) は、秦の始皇帝以来、廃止されておりますので、そのなかで宋代以後、中世封建制であったか否かという議論自体が非常に無理があったと思います。

ただ、このようなスターリン的な単系発展論がそのまま適用されないことが証明されたとしても、それによって中国社会に対して、オリエンタリズム的認識を持つことには結びつきませんでした。むしろ現在、中国社会の独自性を認めていくことになったと思います。

その議論として、例えば最近の朝貢システムで、中国とアジア社会を考える濱下武志さんの議論や中国社会の江南などの特定の地域を研究する地域研究を提唱する森正夫さんの議論が生まれたと思います。また近代史の議論としては、従来の半植民地半封建概念では、中国近代における資本主義的發展を認識できないという奥村哲さん、足立啓二さんの議論が生まれたと思います。

そのほか1949年の中華人民共和国の成立の質的意義を従来ほど重視せず、中華民国との連続性を重視する最近の近代史研究の動向

があると思います。そのような研究が、中国の発展段階論がそのまま適用できなくても、中国は独自の社会として営まれており、それ自体の発展を持っていたというのが歴史学のほうではないかと思います。

それからあと2点だけ申し上げます。中国の研究が学問的に低いと考える傾向については、私は文化大革命時に学問は完全に政治のしもべになり、かつ外部の情報から隔絶されていたということがあると思います。しかしながら1978年の改革開放以降、まさに1910年代の新文化運動に例えられるように多くの外国の思想、理論が流入して、多くの外国の研究書が翻訳され、直接原文で研究書を読む学者が増えています。そのなかで多くの学問的にも、理論的にも優れた研究業績が生まれていると思います。

むしろ問題は、このような中国学術界の現状を直視していない日本人研究者に問題があるのだらうと思います。これは「オリエンタリズム」と言えばいえるかもしれません。

それから3点目ですが、日本において地域研究が成立しているかどうか。アジア政経学会は、国策研究を指向しているのかどうかということについて、私は疑問があります。

最後に、「コ・ビヘイビオリズム」という加々美論文の提起に対しては、これは大変貴重な提起だと思いますが、これは対象に対する学問的な分析方法論というよりは、研究態度の問題と私は受け止めております。以上です。

●—司会 はい、ありがとうございました。それでは次に同じく愛知大学現代中国学部の高明潔先生、お願いします。

●—高明潔 私の発言は会場に配布されているコメントペーパーに沿っていたします。時間の関係で1ページ目(本報告書342ページ)

にある地域研究における「地域」の定義については省略いたします。2ページ目（本報告書343ページ）の最初の「すべての学問体系を網羅し～」というところから始めます。

加々美先生は、中国研究を地域研究に定義し、そして地域研究にあたる「共同態度」が必要であると強調していると私は理解します。私は、まず、すべての学問体系を網羅して一つの「共同態度」のもとに、ある特定の「地域」に当てはめる研究は無理であると思います。確かに近年、人類学や歴史学、それから経済学や政治学を含んだ総合的な中国研究が行われる試みがありますが、それらの研究は必ずしも、それらの総合研究を行う研究者の「共同態度」によるものではないと思います。

そこで、各自の専門分野による研究であっても、総合的な研究であっても、研究対象となる「地域（社会）」に関する分析作業は、基本的にはそれぞれの学問体系の固有理論によるものであるが、「共同態度論」によるそれぞれに分類された「地域」を分析することは不可能であると思われます。

私は、加々美先生が提唱されている「共同態度論」を下記のように理解しています。1点目は、加々美先生はこの「共同態度論」を学問体系のカテゴリーに位置づけること。2点目は、加々美先生はこの「共同態度論」に基づいて、各学問分野の固有論理を超える研究者自身の研究倫理、即ち「書き手」と「書かれる対象」との間の知的な力関係を「知のモラル」による対等化、あるいは平等化という目的を求めること。

もし、加々美先生の「共同態度論」が私の言う2点目であれば、私はこの態度論に賛成します。即ち、「共同態度論」を、研究地域に対する態度を是正するという研究者自体の

倫理のカテゴリーに位置し、研究者が各自の立場に立つことができ、相互間が対論から対話までできるような多声主義（多声性）に位置付ければ、私は賛成します。それと同時に、「共同態度論」を一つの学問体系として確立しようという発想には疑問を持たざるをえない次第です。ということは、もし、この「共同態度論」によってすべての固有学問分野を「態度」として、それらの「態度」を一つのまだ未確立の「体系」のもとに一元化にするとすれば、私は、この「共同態度論」はついに一つの単調な「声」にすぎず、またはもう一つのオリエンタリズムを派生するにほかならないと思われざるをえない次第です。

もし加々美先生がどうしてもご自身の考えている「共同態度論」を一つの学問体系として樹立するとすれば、私は、加々美先生の発想から、日本におけるオリエンタリズム批判の背景に見た日本の学際が持つ二重的なアイデンティティの影が見えると思います。これについての関連説明は、会場に配布したコメントペーパーの2ページ目（本報告書343ページ）から4ページ目（本報告書345ページ）にまとめてありますので、ぜひご覧になっていただきたいと思う次第です。

最後に、先ほど馬場先生にも言及された中国の研究が学問的に低いと考える傾向について。この傾向は広範囲で現れるものとは考えられません。それは恐らくある専門においてのある個人に対する評価にすぎません。それは客観的か主観的かは別として、その評価を普遍化すること自体、日中両国間の学際的対立を起こすにほかならないのでは。実際、日本の人類学あるいは民族学界では、本土研究を行う中国人研究者に対してそうした傾向はなさそうです。これについて、もし午後の総

合討論のときに時間があれば、改めて議論していきたいと思います。以上です。

●—司会 ありがとうございます。それでは続きまして、愛知大学国際コミュニケーション学部の周星先生お願いいたします。

●—周星 谢谢！我想谈一点自己的感想。我觉得我们面临的一个基本问题是，中国研究包括日本的中国研究或中国学，它是一门普世性的科学还是一门民族国家科学？基本上从目前来看，日本的中国学首先是日本关于中国的知识或知识体系，作为日本的民族国家科学，它被中国国内接受的程度可以分为三种类型：一种是涉及一些历史、文学及传统文化的部分，较容易被中国接受，承认日本的汉学、中国学做得还不错，第二种可能是在不同的文脉中把它当作是一类情报，信息，原来日本人是这样看我们的，是当作一种学术的情报、信息。第三种，就是被认为有敌意或是潜在敌意的东西，它通常被中国人所拒绝。如果日本的中国学是一门民族国家科学，它不是普世性的一门学问，而只是站在自己国家立场上认识你的一个领域，这样的话，像我这样的人怎么能够参与呢？一个中国学者怎么能够参与到日本的民族国家科学里去呢？这不太可能。但为什么我又作为 ICCS 的成员与加加美教授，还有其他同事一起在 ICCS 工作了五、六年？这是因为我比较认同加加美教授和 ICCS 的一个基本的理念，这个理念就是说要尊重地域研究之对象的主体性。研究研究的对象在过去被认为是沉默的、没有发言权的，是被动的，现在它仍然是成研究的对象，但它是可以有主体性，这是一个很大的不同。对等地看待来自对象地域的一些学术成果，同时，尽可能地反省地域研究里面确实始终存在着的西方中心主义，以及那些研究者和他们国家政策之间的关系，在这种情况下，象我们这样的一些中国学者也才有可能参与到这样的研究领域里来。所谓的共同主

体性态度论，则是一个基本的前提，我是这样理解的。因为共同态度论使我们有了一个基础可以参与。换句话说，我们需要确认的是，未来的中国学所要瞄准的目标是不是已经不再是一门民族国家的科学，而可能是一门普世性的科学？作为中国的学者在思考加加美教授提出的共同态度论这样一个概念的时候，当然我们也会很自然地注意到、也会警惕到海外的某些学者、西方的某些学者往往会持有西方中心主义式的偏见，会有他们无法摆脱的立场。但是，我们中国学者如果要参与的时候，是不是也会有一个中国中心主义的或“中华思想”这样的一些束缚，一些立场。我觉得，在这一百多年来，一方面是西方中心主义的傲慢，另一方面则是中国人顽强的中国中心主义的抵制。如果说西方的中心主义有某种进攻性，是咄咄逼人的，那么，在中国，比如像昨天陈东林研究员讲话时提到的毛泽东时代视中国为“世界革命”的中心等之类的观念，这在西方人听起来可能怪怪的，可中国人也有自己的立场，试图用中国中心主义来抵抗西方中心主义。我觉得，应该怎样来理解这个过程是颇为关键的。如果中国学者也能够参与到日本或者西方的中国学研究当中来，而且，对于自己所可能持有的中国中心主义也能够有所觉悟，有所警惕的话，那么，这样一个共同态度论才有可能成为真正的现实。不过，一旦共同态度论及其以此



为基础的中國學果真能够成为现实的话，那它可能就不再是日本的民族国家科学中的一门了，它可能就不再是美国的、日本的中国学，而是一个普世性的关于中国的学门部门了。我所理解的正是这样一种构图，它是一种理想主义。最后终结一句，我是觉得，共同态度论的可能性是存在的，但我们首先需要定义的是日本的中国学研究究竟是它的一门国家科学，还是一门具有普世性或旨在追求普世性价值与真理的科学。谢谢！

●—司会 はい、ありがとうございます。次に榎根勇先生にお願いしたいと思います。榎根先生はお手元の資料では ICCS フェローとなっておりますが、環境研究会を取り仕切ってられております。ご存知のとおり筑波大学の名誉教授でもいらっしゃいます。榎根先生、よろしくお願いたします。

●—榎根勇 このシンポジウムでは、いつも私と加々美さんが対立して論争しているのですが、「本音を言って欲しい」というものですから、今日も本音を言わせていただきます。

私の書いたものは71ページから72ページ(本報告書295ページ～296ページ)ですから、あとでお読みください。コメントは会場ですと書いてありますので、ここでおこないます。

基本的には、私は加々美論文の趣旨には賛成です。ただし、先ほど馬場さんが言われたように研究態度として賛成だということです。その「態度」というものは、私に言わせれば、既にもう常識です。ですから、その常識であることを難しく言っているだけではないかというのが私の感想です。

3つの言葉、「オリエンタリズム (orientalism)」「パラダイム (paradigm)」「コ・ビヘイビオリズム (co-behaviorism)」についてだけコメントします。

まずオリエンタリズムですが、これが主体である西欧が、客体である中国を客観的に認識する方法を示しているというのであれば、これは方法論としてはデカルト的二元論です。デカルト的二元論に無理があるということは既に常識です。それを私は COE-ICCS のレポートにたびたび書きました。

もしもオリエンタリズムが西欧優越主義であるからいけないという意味であれば、西欧優越主義は偏見であって、方法論ではありません。ですから、私は偏見について言い争うことに、個人的には興味がありません。

2番目に「パラダイム」という言葉ですが、確かトーマス・クーン(Thomas S. Kuhn)が、1960年代に言った言葉だと思います。(『科学革命の構造 (The structure of scientific revolutions)』1962年刊行で科学史の特別な用語として用いられた)。クーンが唱えたことは、自然科学の発達を歴史的に見ていったときに、その進歩は天才が大きな絵を描いてまず進歩し、そしてその穴埋めをするというか、小さいところを凡才が、凡庸な科学者がやるということです。

ところが、それはやがて魅力的なものではないから行き詰ります。するとまた天才が出てきて、新しい絵を描きます。そのような意味で、クーンは「パラダイム・シフト (paradigm shift)」という言葉を使ったように私は記憶しています。そのときに物理学者からいろいろ異論も出ました。クーン自身も「パラダイム」という言葉について、あとで言い換えたりしているように思います。それから、クーンはその凡庸の人が扱う科学を「通常科学」と言っています。そして、通常科学はやがて行き詰ると。

その意味でオリエンタリズムを見てみると、加々美さんはオリエンタリズムが復活し

てきたと言っているわけです。行き詰っていないわけでしょう。そうだとすると、パラダイムを転換するという言い方はおかしいと思います。それは、「私の考えを新たな枠組みで示す」というだけで済むことです。

それからコ・ビヘイビオリズムですが、これで一番問題なのは、川井さんも言われたように、加々美さんは「状況のなかに主体を埋め込むことができるかどうか」とおっしゃいました。

ところが、自然科学で主客分離の方法論をとったのは、客観的な認識を得るためには、それしか方法がないからです。それを前提にして考えますと、「主体を埋め込んだ」ときに、どのようにして客観的な認識を得ることができるのかということが提示されなければ、これはイデオロギー (ideologic) になります。

では、自然科学者がどのように考えているかを IPCC (Intergovernmental Panel on Climate Change: 気候変動に関する政府間パネル) を例にお話します。IPCC は、地球の温暖化について世界中の科学者がいろいろな論文を読んで、何とかしなければということで提案をしているわけです。そのときに気候変化を研究している科学者が、自分にとっての客体である地球の気候を認識はしたけれども、それに働きかけることができないわけです。つまり、主客分離では主体が客体に働きかけることができません。それを何とかするために IPCC という組織をつくって、あのようなかたちで世界に発言をしたということです。

ですから、自然科学者もデカルト的二元論の限界について考えているわけです。それについては、面白い言葉を1つ引用しておきます。片山洋次郎という人が、2007年にちくま文庫から『整体から見る気と身体』という

本を出しました。この方は整体師です。「整体」というのは、身体を整えることです。彼は東京大学の教養学部を中退していますから、そんなに頭の悪い人ではないのではないかと思います。彼が書いた本のなかで、このような言葉があります。「整体の場での身体を観察ということは、共鳴 (一元化) と観察・客体化 (二元化) の往復運動である」と。つまり主体でもあり客体でもある自分を見ていくときに、どうしても主客分離では駄目だけれども、非分離でも駄目であると。往復運動でなければならないと言っています。私はここにかなり示唆するものがあると思います。以上です。

●—司会 ありがとうございます。それでは、続きまして愛知大学文学部の藤田先生、お願いします。

●—藤田佳久 加々美先生のレポートをいろいろな意味で刺激も受けながら読ませていただきました。ありがとうございます。それを踏まえながら、少しコメントさせていただきます。そのコメントは、私自身は地理学を担当しておりまして、もう学部るときから地理学をやって何十年ということになります。

われわれ地理学は古い歴史を持っておりまして。古代ギリシャ以来の数千年の歴史を持って、人間と自然の環境論といますか、それを研究して、それが産業革命期に近代化をして、もっと大きく見ますと戦後、スプートニクショック以降、大きなアメリカを中心にした学問の科学体系の構造変化のなかで地理学のほうにも影響がありました。

本来、地理学は地域を対象とした学問です。もともとは単なる環境論、あるいは知的体系、カントあたりが最後にやったのは知識の地誌的な体系でした。それを「因果論」というかたちで近代地理学として次の時代へ抜

け出し、その因果論をベースにして地域構造、今では「地域システム論」といいますか、そのようなかたちで発展させてきた経過があります。その点で、地理学から見ますと、いわゆる「地域研究」という言葉に対して、われわれ地理学はすでにそれそのものでしたから、わざわざ新しく地域研究という分野が登場してきたことに対して、ある種の驚きと素直になれない部分がありました。

地域研究そのものはいったいどのような学問なのかという観点でずっと見ますと、加々美先生もおっしゃっているように、個別領域の学問の、特定地域への研究、つまりそれぞれ独立した学問領域がいろいろなチャンスがあってある特定の地域におよんだといえますか、そのようなケースが非常に多いです。

われわれ地理学の場合ですと、これはある種の小宇宙のようなところがあって、樫根先生のような自然地理学の分野、あるいは歴史地理や経済地理、社会地理、言ってみれば既存の学問体系にもそれぞれ関わるような分野を空間でどのように捉えていくか、というようなところがあります。それをどのように統一像、あるいは全体像としてまとめていくかということが、われわれのやってきた仕事です。

ただ戦時中、いわゆる環境決定論、あるいはいわゆる地政学 (geopolitics) というものがありました。そのような視点への反省のなかで、戦後、地理学は現実社会のなかに、そう簡単には手を出せない部分があるのではないかということで、自己規制をしてきた部分があります。

その意味で、例えば日本地理学会あたりも3,000人、4,000人の会員がいるということが1つの地理学だけの共同体を組織してしまい、外との交流が少なかったということをし、

われわれが今日反省しているところです。

ところで、ではそのようにそれぞれの地理学のなかの分野が個別化し、専門化していきますと、全体像が見えるのかという、また新しい問題が出てきています。それをどのように統一し、総合化するのかという本来、地理学が持っていた1つの大きなユニーク性ですが、これが分散化していく傾向もあります。これも学問を進化させるいろいろな段階では必要なことだと思いますが、常時それを考えていかいかなければいけません。ところが、その手法は、ここで議論されているような問題点をやはり持っているわけです。

そこで私が思うのは、これは地理学に限定してもそうですが、広い分野についてもそうです。それぞれのお互いの学問領域のなかで、相互の領域にどのようなチャンネルを持てるのか。またどのようなチャンネルをつくると、お互いが相互に共通項として認識できるのかということです。単独の学問で全体像を見ることは、非常にこれは難しいわけです。そのようなお互いのチャンネルづくりが基本的には必要になるだろうと思います。

例えば、中国でもそうだと思いますが、日本も高度経済成長期に、農村は都市化、土地利用の混乱ということで大変な問題を抱えました。地理学では、従来、農村の集落地理学という領域がありました。そこでは集落の形態論やその機能の研究がありました。しかし、現実に進展する問題に、どのようなかたちでチャンネルをつくっていくかということが、必ずしもできませんでした。その点で、よりよい農村をどのようにつくっていくのかという意味では、その側面の方向とのチャンネルづくりが今後必要になります。この中国学、あるいは中国の総合的な研究という点でも、共通の各分野間のチャンネルづくりとい

う課題があるのではないかと考えます。以上です。

●—司会 どうもありがとうございました。引き続きまして、ICCSの研究員をされている秋山知宏先生、お願いいたします。

●—秋山知宏 本日は議論する機会をいただきありがとうございました。今日はパワーポイントを使おうと思っていましたが、使えないということで、その配布資料をお配りいただきましたのでご覧ください（本報告書302～303ページ）。

私の専門は水文学と申しまして、水循環を中心に研究する分野です。とはいえ私は環境問題について人間と自然系との相互作用という視点で研究しています。したがって、ほかの学問分野の研究者との協力を必要とします。理系の諸学だけではなく、歴史学や文化人類学、政治学、経済学など幅広い研究者と交流したいという姿勢を持っています。

さて、加々美先生の「コ・ビヘイビオリズム」です。これを広く解釈しますと、「人間と人間との相互作用」に関心が払われているのではないのでしょうか。私はプラスアルファが必要であると思っています。それは「人間と自然系との相互作用」という視点です。近年、環境問題の顕在化に伴って、さまざまなレベルにおいて国内外の政治や経済などに「環境」が強く絡んできているからです。

私がこれまで研究してきました、中国の西北地方の黒河流域という乾燥地域の例を挙げてみたいと思います。黒河流域は青海省、甘粛省、内モンゴル自治区にわたる中国第二の内陸河川です。この流域は3つに分けられます。森林や水河のある上流域、扇状地で灌漑農業が大規模におこなわれている中流域、そして大部分は沙漠であるものの河川の近傍には植生がある下流域です。乾燥地域は日射や

気温などの面で、農業生産に非常に有利な条件を持っています。そのため、水と排水の条件のよい中流域を中心として、漢の時代から灌漑農業開発がおこなわれてきました。

次に4つ目のスライドです（本報告書302ページ）。左上の写真は、およそ100年前の下流域の様子です。川の水が豊富にあり、スウェン・ヘディン（Sven Hedin）という探検家が船で渡ろうとしているところです。この河川が過去50年間に断流するようになってしまいました。最末端にあった湖も枯れてしまいました。そして、地下水が著しく低下しました。それに伴って、植生の衰退も起きています。この水不足の原因は何でしょうか。

これまで気候変動と人間活動の影響の両方の側面から検討した結果、中流域での大規模な灌漑農業開発が原因であることがわかりました。このため下流域で水不足が生じてきたのです。

問題が顕在化するにつれて、中国政府は対策を打ち出しました。それが中流域での節水政策です。取水制限をして下流域への河川放流量を多くしようとするものです。その結果、確かに枯渇していた湖は復活しました。しかし、環境によかれと思ってやったにもかかわらず、思いのほか新たな問題を引き起こしてしまいました。中流域で河川水を使えなくなった農民は、地下水を使って灌漑するようになりました。そのため、中流域でも地下水の急激な低下を引き起こしてしまいました。かつて、この地域の地下水は地下を経由して河川に再び戻っていたのですが、この現象がなくなってしまいました。この結果、冬の河川流量がほとんどなくなってしまいました。それにもかかわらず、新しい農地の開発をやめようとはしません。この増大する水需要を賄うために、さらに井戸を深く掘り進め

地下水を使っているという状況です。開発のしわ寄せが地下水に及んでいると言えます。

このような問題は中国に限られたことではありません。「食糧、エネルギー、環境との間で水を奪い合う」という状況が世界規模で生じています。このような奪い合いの結果によって、途上国、先進国という枠組みとは無関係に、ある地域の人々が利益を享受する一方で、ある地域の人々が犠牲になってしまいます。この競争を制御することに責任を持つ仲介者、監査官、国連機関は存在していません。少なくとも現在は、完全に市場原理で動いています。

この問題に対してわれわれはどのように対処すべきでしょうか。これは政治の問題であり、経済の課題でもあります。したがって、このグローバル化時代における地域研究の課題として、私は、地域に即した解決策の提示であると考えています。さまざまな学問分野の手法の統合によって、地域の視点からグローバルな課題を掘り下げて考える必要があると思っています。以上です。

●—司会 はい、ありがとうございました。続きまして、同じく ICCS 研究員の朱安新先生、お願いします。

●—朱安新 あらかじめ提出した原稿を読みあげながらお話しします。1940年代前半お生まれの加々美先生は中国研究に造詣が深い方で、一方、1970年代後半（ポスト文化大革命）生まれの私（評者）は「地域研究」にまったくの門外漢です。このような評者は、まさしく高く聳えている山を恐れながら見上げるような尊敬の念で、加々美論文を素直に拝読しました。評者が持った疑問は以下の三つでした。一つ目は、なぜ「オリエンタリズム」を前提とした地域研究が「コ・ビヘイビオリズム」を前提とした「国別学」へ転換しなけれ

ばならないのか。二つ目は、「コ・ビヘイビオリズム」という新しい方法での「国別学」が目指す研究の方向や目的は何なのか。三つ目は、新しい方法論での「国別学」にとって、「学」として着実に成長していくための動力はどこに求めていくか。以下は、この三つの疑問について所見を述べていきます。

まずは、一つ目についてですが。途中の内容を省いてプログラム・予行集第79ページの最後の段落に飛ばしますが、オリエンタリズムに対する加々美先生の批判は2点に集約できると思われまます。すなわち、(1)オリエンタリズムの発想法では、研究者は自分自身の意志的な主体性を認めるが、研究対象の意志的な主体性は認めないという態度が顕著に現れる。それに(2)「実際には現在、オリエンタリズムの病弊を克服した本格的な現代中国学やアジア学の方法論は、今なお未確立の状況にあると言わざるを得ない。そのため、現在、中国研究、アジア研究、地域研究全般の世界認識は、依然としてオリエンタリズムの弊を引きずったままの状況にある」。という2点です。

既存の知識体系の在り方に対する加々美先生からの上記の批判は、よく分かりました。しかし、そこからですが、中国研究のために、なぜ研究者の姿勢がコ・ビヘイビオリズムへと転換しなければならないのか。その転換の必要性和切実性について、さらに詳しく説明していただきたい。

そして研究者の姿勢が「オリエンタリズム」から「コ・ビヘイビオリズム」へ転換することによって、なぜ「地域研究」に代わって「学」が形成されてくるのか。つまり、「研究」についての定義と「学」についての定義を提示した上で、「研究」から「学」へと発展して行く回路を、加々美先生から提示

していただきたいのです。

つぎに二つ目の疑問についてですが。「コ・ビヘイビオリズム」という新しい方法での「国別学」が目指す研究の方向や目的は、「非西欧世界的な近代化論」を捉えていくことにあるのでしょうか。この点についても明確に説明されたい。

最後に三つ目ですが。「オリエンタリズム」が今日に至るまで、強固な形で存続し得ている理由は、かつてに比べて自由主義の勝利を疑う者が格段に減少した」と、加々美先生が認識なさっています。しかし、このような現実的な背景にもかかわらず、加々美論文では敢えて「現代中国学の新たなパラダイム」の「コ・ビヘイビオリズム」が提唱された。今後、「コ・ビヘイビオリズム」が「ある一時代の人々のものの見方、考え方を根本的に規定している概念的枠組み」(パラダイム)に、どのようになっていけるのか。その際、「新たなパラダイム」形成を押し進めていく力、またそれが自ら浸透し広がっていくための時代的な要請が、どのようなものなのか。これらの現実的な事情がはっきり確認されないと、「学」にとってそれが育っていく実際の土台が薄いことによって、「コ・ビヘイビオリズム」が理念の次元で終わってしまうこともあり得ます。

以上、素直にコメントを述べさせていただきました。どうもありがとうございました。

●—司会 ありがとうございました。次に、南開大学の楊妍先生お願いします。楊先生は、愛知大学と南開大学の間で展開されている博士二重学位(dual degree program)の修了者でもいらっしゃいます。よろしく願いいたします。

●—楊妍 谢谢佐藤先生！各位老师、各位同学，大家上午好！我们是爱知大学和中国的南

开大学、人民大学联合培养的第一批博士研究生，现在我们已经毕业，同时也成为了加加美老师所主持的爱知大学中国学研究这个大家庭里新生代的成员。很高兴作为后辈今天在这里有机会向各位先辈们学习。下面我就加加美老师的文章谈一点自己的感想。加加美老师在文章中谈到中国学的研究必须实现一个范式的转换，他认为因为中国研究是一种区域研究，区域研究的研究者对于该区域的政治、经济以及文化都具有一种极强的价值取向，所以在研究的过程当中就会被深深打上一个价值偏好的烙印。价值偏好以及价值冲突这样一个问题，我们认为实际上还是存在一个主体性冲突的问题，那么，这个问题如何解决呢？我觉得不可以对这个主体性冲突的问题做一个逻辑性的分析。首先，我们所做的是一种社会科学的研究，它不像自然科学的研究那样。自然科学的研究所追求的客观性是可以检验或者可以被证伪的，因为在相同的时间条件下，你的结果是不符合的，那么你是可以被证伪的。但是社会科学不可能有这样的条件来检验你的结果，那么我们要在追求客观性这样一个前提条件下，怎样来做得更客观呢？我们就会提出要保持价值中立，追求这样一个最佳状态，但是我们可以想一下，价值中立这样的一种最佳状态是不是可以实现呢？即使我们假设一下要追求这样一个状态，那么研究者和被研究者，当研究者去研究他的研究对象的时候，他可能还要接受他的研究对象的一套价值，那么他才能够理解他的研究对象，所以说价值中立这样的一种最佳状态，只能说是我们追求的终极目标，这在现实中是很难做到的。因此，我们可不可说，在研究范式转换的这样一个背景下，可以转化为这样一个问题，在主体性冲突存在的背景之下如何解决或者说来探讨实现共同主体性这样的一个状态。有时问题发生了转换，在这样一个前提下，就是做了这样一个逻辑分析

以后，我们再来看一下，可不可以找到或者寻求研究的方法来探讨主体性的冲突，然后如何实现共同的主体性的平等的交流。我认为，价值冲突可以建立一个坐标体系，也就是说，用特定条件下空间和时间背景下的这样的一个坐标来寻求出发的原点，寻找到一个共同的原点，以这个原点为参照来看不同的主体或者不同的价值体系之间的关系。我可以举一个例子，我在南开大学现在的研究方向是环境政治，给本科生开这门课。我在辽宁省曾经做过一个田野调查，这个调查很有意思，因为到这个村子里来调查的人有美国人、欧洲人和中国人，各自所采用的方法是不一样的。美国人采用的是人类学的方法，也就是说他们想从一个研究者变成被研究者，所以他们尽量地去跟当地人生活在一起，和当地人一起劳动，一起生活；欧洲人则从欧洲人自己的立场出发，进行一种对比，对比中国和欧洲有什么不同；而中国的学者去那里调查，就是一种互相看，看看我们自己到底有什么不一样。也就是说，同一个平面、同一个问题就存在着三个不同的坐标体系。我觉得可不可以采用我刚才说的建立坐标这样的一种方法，来寻找到一个共同的原点，然后以此来参照，寻求共同主体性的一个共同的平台。谢谢大家！

●—司会 はい、ありがとうございました。続きまして、中国国家開発銀行の方塚さんですが、方さんも南開大学との二重学位課程を修了されています。方さん、よろしく願いいたします。

●—方塚 各位老师、同学，上午好！我和杨妍一样，也是南开大学和爱知大学联合培养的学生，很高兴有机会参加这次的研讨会。关于加加美老师的论文《建立现代中国学的新范式》，我想谈两点：第一，关于共同态度性的构建问题。加加美老师在文章中提到主体的和客体的共同态度性，我们知道，立场决定态

度，不同的立场决定不同的态度。我认为要想构建一个共同的态度性，首先需要有一个共同的立场。什么是共同的立场？它的背后是共同的利益或者说是利益相关者。对中日主客体双方来说，共同利益在现代社会中，主要体现为经济方面的利益。所以我认为在经济方面，在经济往来上通过加强双方的交流，通过推动经济共同体的建设，或者说在经济上创造一个共同的追求，来形成或产生一个共同的立场，由此才可能实现共同的态度性或者主体客体态度性。这是我的第一个思考。第二个是方法论的构建。现代中国学包括两层含义：首先它是“中国”学。中国学要求研究中国的环境、政治、经济、文化、历史。不同的学科之间在方法论上肯定会有不同的地方，从判断标准的中立性和方法的客观性来讲，我认为像环境学、经济学相对而言是走得靠前一点，有的学科相对走得慢一点。如何实现各个学科之间交流呢？在方法论上是不是要尽可能地实现检验标准的客观性。有了这种客观性，大家才有可能共同地进行不同领域之间的交流。第二层含义是“现代”，什么是现代？是用老的方法研究现代中国呢？还是用现代的方法研究中国？我认为在概念上还是要界定一下。如果是用老的方法研究现代中国，因为现代中国有一个越来越走向理性、越来越规范的发展趋势，那么在中国的发展过程中，在研究的方法上可能越来越趋向于客观化、量化。从这个角度来讲，实证方法上还是要客观一点。如果是用现代的方法研究中国，现代的方法也要求研究标准更中立、更客观。从这个角度来讲，要研究中国问题，应在研究方法上更加客观一点。所以从上面两个角度来讲，现代中国学要想在范式上取得突破，还需要在方法论上做一些文章。我就讲这两点，谢谢各位！

●—司会 ありがとうございました。それでは同じく博士二重学位課程を修了されている

中国人民大学の許先生、お願いします。

●—許光清 谢谢！今天很高兴我能在这里参加加美先生论文的讨论。因为曾经在这里学习过一年，看到很多老师、朋友还有校园的景色，非常地亲切。我的论文是在这本书的第89页到95页，题目是《气候变化背景下的现代中国学研究》，加美先生提出共同态度性，根据我的浅薄的理解，然后结合我研究的领域，我认为像全球气候变化这个领域，整个地球、所有的人类面临着一个共同的问题，也有共同的利益。我这篇论文主要还是介绍一下中国的现状，包括经济的发展，能源的消耗，还有政府的一些政策。中国作为一个幅员辽阔、人口众多的大国，历来她是受到世界各国的关注的。改革开放后近30年的经济增长奇迹，使中国受到了更多的关注。在现在新的国际政治经济形势下，气候变化也成为一个倍受关注的国际议题，在此背景下，中国不仅是一个人口大国，还是一个经济持续快速增长的发展中国家，在世界范围内受到重视。同时，中国的能源消费总量和二氧化碳的排放量位居世界前列，无论是现在还是未来的几十年里，这个发展中大国都会处在应对全球气候变化的聚光灯下。中国经济增长的状况，1990年时的GDP在世界排名是第11位，2005年超过了法国，基本上与英国持平，是世界第四大经济体。2005年底，中国的人口是13亿756万人，中国的能源消费总量在2006年是排在美国之后，是世界第二。从2001年到2006年这几年时间里，中国的能源消费需求以较快的速度在增长，大概是1978年到1998年平均增长速度的两倍。2006年中国所消费的石油有50%都是进口的，而且电力装机容量近几年也以很高的速度在增长，所以也有人很形象地说中国是以两个星期建一座电厂这样的速度在发展。二氧化碳排放呢，中国自己的初始信息通报是核算了1994年二氧化碳和温室气体的排放，另外，

在国际范围内有一些研究机构对近年来中国的二氧化碳排放的估计，也是位于世界第二，排在美国之后。另外，在中国能源消耗急剧增长的这几年，从2000年到2006年这六年期间，全球二氧化碳排放增长中因能源消耗产生的二氧化碳，有58%来自中国。但是在历史上，大部分的二氧化碳排放是来自发达国家的。自1850年这一百多年来，在能源消耗产生的二氧化碳排放中，北美和欧洲是占到了70%，所以说这（全球气候变化问题）是一个全球共同的责任。中国政府为减缓气候变化也付出了持续不懈地努力，特别是最近几年，我在92页写了2003年国家气候变化对策协调小组和2007年成立的国家应对气候变化及节能减排工作领导小组成员及组织结构的比较，可以看出，力度还是有一个非常大的变化。从1993年开始成立一个挂靠在原来国家气象局的一个国家气候变化协调小组，到1998年是挂靠在原来国家计委、现在国家发展与改革委员会的国家气候变化对策协调小组，到2003年新一届的国家气候变化对策协调小组成立，到2007年是国家应对气候变化及节能减排工作领导小组，这一机构的变化中可以看得出来。除此之外，还有一些减缓气候变化的指导方案和法律，特别是2007年年颁布了《中国应对气候变化国家方案》和《节能减排综合性工作方案》，这是两个比较主要的。另外还有《循环经济法》和《能源法》也在推出或征求意见。除此之外，我在94页还列出来最近五年来中国推进的跟节能减排和减缓气候变化有关的法律法规及其政策。除了这些命令控制性的政策，还有一些经济激励性的政策，比如说，也是今年以来财政部、海关总署这样一些单位联合发布取消对一些“两高一资”（即高污染、高能耗和资源性）产品的出口退税优惠政策等等，这也是希望中国的经济增长由一个高投入、高排放的模式向绿色环保的模式转变。除

此之外，还有中国的退耕还林、退耕还草的政策，也对气候变化做出了一些贡献，在论文的最后一段也写了一些数据。因为时间到了，我就说这些。我稍微超了一些时间，谢谢！

●—司会 はい、ありがとうございます。次に ICCS 研究員の大野太幹さん、よろしくお願ひします。

●—大野太幹 今、ご紹介にあずかりました大野です。私は、このシンポジウムを主催している国際中国学研究センターの研究員をさせていただいておりました、今年2年目になります。専門は歴史学です。特に、中国東北地域の近代史、第2次大戦終了前までの中国東北における日中関係を専門にしています。今回、加々美先生の論文を読ませていただいて、まず社会科学の研究においても決して客観性は存在しないということに非常に感銘を受け、啓発され、賛同もしたところです。

また2つ目として、研究対象に対する当事者は外側から見る観察者であってはいけないという、レジユメでは「共同主観性」と認識したのですが、「共同態度性（コ・ビヘイビオリズム）」の必要性にも非常に賛同したところです。

そのうえで、この論文を読んだあとに抱いた若干の疑問点、わからなかったところを2つ述べたいと思います。2つは関連しています。

まず1つ目としては、「国別学」における「国」は何を指しているのかということです。先ほどの佐藤先生の疑問と関係のあるところです。もし、その国が国民国家であるとすれば、現代中国学を確立する、その現代中国学における「中国」という言葉は国民国家としての中国を指すのでしょうか。つまり、中国史では国民国家が成立したのは中華民国からといわれていますが、その中華民国ないしは

現在の中華人民共和国のことを指しているのでしょうか。もし、それが国民国家を指しているのであれば、まず1つ目として、あくまで現代の国境線に基づいて地域の歴史的な変遷は視野に入れないのでしょうか。つまり、現代中国学は現在の中国の状況ないしは国民国家の成立以降の中国の状況のみを対象とするのかということです。

2つ目としては、国民国家であるとすれば、国家を持たない民族が地球上には幾つか存在しています。例えば、クルド人やパレスチナ人などもそうですが、彼らは現在居住している地域を支配しているいわゆる国民国家の「国別学」に含まれることになるのでしょうか。これについては、少数民族の研究に関してもいえるのではないかと思います。

一方、「国」が国民国家を指すのではないとすれば、何をもって国ないしはその国の領域を確定するのでしょうか。ここで興味深い例を挙げたいと思います。特に中国の東北地域では、「東北プロジェクト（東北工程）」がおこなわれています。これは中国社会科学院と吉林大学などが主体となっていたと思いますが、中国東北地域に関する研究のプロジェクトです。

中国側は、古代の王朝の話になりますが、高句麗を中華領域の一地方政権であったと概略的に規定しています。一方、韓国側の研究界では、この議論を受けて非常に反発しました。なぜならば、韓国側としては、高句麗は朝鮮民族の一大王朝であったと認識しているからです。これは古代の国家についての議論ですが、それが現代にまで敷衍されています。結局、中国東北地域が歴史的に、どの国家あるいは民族に属することになるのかという議論にまで発展しています。この一例を見るとわかりますが、中国東北地域も含め、国

ないし領域を定義するのに政治性が非常に大きくかかわってくると思います。つまり、現在、引かれている国境線では語れない歴史的な地域の変遷をどのように捉えるのかということなのです。

最後になりますが、国別学は国境を越えた地域の研究、「越境研究（トランスボーダー（transborder）研究）」などとも言われますが、そのようなものとどのようにかかわってくるのか、共存できるのか、あるいは対立するものなのかということになります。

私が専門としている中国東北地域は、現在は中華人民共和国の領域になっていることは明白です。皆さん、周知のとおりです。ただ、近代にさかのぼっていくと、漢族のみならず、朝鮮人あるいはモンゴル人、さらにロシア人や日本人、これは植民地経由になりますが、そのような人々も生活してることになります。このようになると、各民族、中国史という枠組みでは捉えることができない部分がたくさん出てくることになります。

ですから、あくまで地域史研究分野に関しては、国境を越えた複合的な視点が必要になってきます。これは中国にかかわらず、日本でも琉球は東南アジア、中国大陸などとの交易で栄えていましたし、近年ではアイヌの人々はサハリン、樺太であるとか、アムール川流域との交易を盛んに行っていたことが明らかとなっています。ですから、琉球やアイヌを「日本学」の範疇で捉えることができるかといえば、そうではないと思います。この部分をどのように考えているのかということをお聞きしたいと思います。以上です。ありがとうございます。

●—司会 ありがとうございます。それでは同じく ICCS 研究員の劉さん、お願いします。

●—劉曉慧 研究員の劉曉慧と申します。加々美先生の論文は、戦後日本における中国研究機関の創立経緯、研究の文脈を整理し、各時期の研究の特徴とその限界を明らかにした上で、独自の中国研究の方法論を提示されました。特に、感心したのは、戦後日本における中国研究の流れに関する論述の部分である。簡単にいえば、戦後中国研究の特徴というのは、国策研究離れという性格から次第に国策研究的な性格を迎えてゆく、そして、新中国、新しい社会制度へのある意味での憧れから、中国社会の厳しい現実を目にした後、批判的な姿勢が主流になってしまったという「親中」から「嫌中」的な、あるいは中国批判という傾向が現れたといえます。

さらに重要な指摘は、70年代、特に80年から、中国研究を含んだ地域研究における新たな理論的枠組みで、観念世界のオリエンタリズムの歪んだ認識構造を解消しようとするが、現実存在としての世界のオリエンタリズム的存在構造を破壊することには、ほとんど関心を持たない傾向を色濃く持っていました。そのため、ポストモダン、ポスト構造主義全般が持つ非実践的な特徴があったといえます。このような現象は、中国研究にもあります。このような、理論と現実との乖離、特に経済のグローバリズムという強い嵐が吹く



中、思想界でも欧米の自由民主主義的価値観が絶対的な存在となってしまった現在、中国研究を行う際、この流れをどう認識すべきか、そしてどう対処すべきか、という重要な課題について、加々美先生の指摘は、非常に意義があると思います。

理論的枠組の構築には、方法論の研究と設立は、極めて重要である。特に、歴史的原因、イデオロギー的な要因があるため、中国研究に関しては、海外と中国本土との間、方法論研究をめぐるギャップが大きいのではないかと考えます。今、中国社会全体は、これまでに類を見ない速度で転換をしています。その中で、中国を世界の中でどう位置づけるべきか、またそれをどのように中国と連動させるべきか、という一連の問題を解決するには、新しい方法論の樹立が不可欠です。研究対象の諸主体と研究者自身の主体の間に、それぞれの目的意識的な態度を相互連動的に働かせようとする中で、研究者と研究対象との間に共同主観性を構築しようとする加々美先生の主張は、理論的には非常に有意義な仮説であり、中国研究、そして中国の学者が求めている目標でもあると思います。

そこで、私の理解では、共同主観性の第一歩として、平等かつ連動できる学術交流の場を作り出すことが重要ではないかと思えます。つまり、共同主観性の中身、性格、共同主観性の構築のアプローチ、理論的枠組みなどの問題に関して、できるだけ幅広い交流を通じて、徹底的な議論をしなければなりません。一方、方法論として多くの共通性があるが、それぞれの科目になると、如何にそれぞれの専門理論、専門知識と結合させるかは、一定の困難があるのではないかと考えます。また、共同主観性を強調しているが、その場合、そもそも共同の客体が存在し得るのかど

うかも検証の余地があると思われます。以上です。

●—司会 はい、ありがとうございます。それでは、最後になりますが、華僑大学の湯先生です。愛知大学の二重学位プログラムの修了生です。それでは、お願いいたします。

●—湯忠綱 加々美先生给大家提供的《现代中国学新范式》这篇文章，我读了以后感到很启发。我提交的论文《以“共同态度性”范式观照现代化理论研究的几个问题》，主要是结合我自己前段时间关注的“传统文化与现代化”这样一个点来写的。我认为现代化理论研究与我们在这里讨论的地域研究事实上是一个题目，或者说是一个有交集的题目下的子部门，就是说它们大致是在相同的时代，20世纪中期在西方、尤其是在美国兴起的理论领域，在如何避免西方中心主义、如何建立西方世界同东方世界的健康的相处方式、如何形成现代性与传统性之间的和谐对话关系，这些可谓是地域研究和现代化研究在发展中共同面临的几个重要问题。我提交的论文首先回顾了一下：

现代化理论研究在西方的兴起、发展、转向及其带给我们的启示，我把它作为第一部分。第一部分集中地表现了这样一个思路：西方的现代化研究表现了两个阶段：第一个阶段是西方中心主义阶段，即把现代化理解为西方化，把现代化理解成一个传统被简单地抛弃，向西方接近、向美国接近的这样一个传统与现代两极对立的早期研究阶段。虽然两位从美国来的学者认为现代化研究在它的早期即使有国策研究的趋向，未必会得到政府在资金或者说是意识形态上的直接授意，但是我们说现代化研究在这样一个阶段，在它的早期，确实是一个美国化的概念，现代化被简单地理解为是传统性被西方的现代性所取代。

现代化研究的范式在20世纪70年代以美

国学者布莱克教授的《比较现代化》一书的出版形成了一个转向，这个转向表现为传统性和现代性之间的互相对话，西方社会与东方社会之间的相互尊重为取向。这个转向是西方人首先提出来的，它强调应该对东方社会的现代化发生、发展给予一个新颖的理解，东方社会也有可能发展出自己的现代性和现代化。这样一个转向同加加美先生提出来的共同态度性就有一个交集：东方作为一个主体应该得到尊重，传统社会作为一个主体应该得到尊重，同西方社会形成一个平台关系，可以对话，可以互动，东方也可以发生自己的现代化理论和现代化社会，这是从现代化研究的范式转型对加加美先生的共同态度性新范式的一种理论支持和响应，或者说，加加美先生从地域研究的这个角度同样也提出来了一个东西方社会平等互动的思路，即地域研究中多元主体并存的一种新思路，我认为这与现代化研究中的转向是一脉相承的。

我在第二部分中写到，主张走出西方中心主义是必要的，但是我们也要避免一种东方中心主义，即认为东方高于西方、传统性可以高居现代性之上。我在论文中也对大家简单地说明了中国的现代新儒家的立场。新儒家认为西方也在批评自己的现代化，他们自己也在转向，中国人应该有自信，东方人应该对自己传统的东西抱有自信，东方的儒家理论甚至可以拯救西方现代化的弊病，东方现代化模式可以超越西方现代化模式，成为不仅是中国和东方的，甚至是全人类的福音，带有救世主的理论姿态，所以，我认为这个部分和周星老师提出来的警惕东方式的、中国式的东方主义的观点具有同样的意思。加加美先生提出的共同态度性就是西方要尊重东方，同时东方也应该要尊重西方，没有谁是谁的救世主，没有谁为对方提出了绝对的福音，两者应该是平等对话的关系。

第三部分我认为要真正建立共同态度性，真正建立一个多元主体，西方世界和东方世界平等对话的关系，关键是要放弃对“永远正确”的思想体系的迷恋，走出发现并代言“绝对真理”的一元中心主义情结，变自我吹胀为自我克制，化狂傲为谦虚，建立一种对彼此的充分理解和尊重的“宽容为本、和而不同”的宽容世界观。这个自然是一个需要付出耐心和继续努力的很困难的理论与现实的工作。因时间限制，就讲到这里，谢谢！

●—司会 はい、ありがとうございました。時計を見ますとあと5分ありますので、この間、加々美先生は合わせて34のコメントをお聞きになってくれました。皆さんと同じ5分だけ最後に全般的な感想をお願いできればと思います。

実質的な議論は午後をお願いしたいと思えますので、コメントに対するリプライは午後でお願いしたいと思います、5分で全般的な感想をお願いいたします。

●—加々美 5分ではほとんど何も言えませんが、とにかく幾つか申し上げます。最初に「国別学」と「コ・ビヘイビオリズム」の関係です。これは高橋さんが、どのように「コ・ビヘイビオリズム」が「国別学」へと結びつくのかという問題点を指摘されました。あるいは他の方々も川井さん、李さん、佐藤さん、大野さん、劉さん、皆さんが指摘になった点ですので少しお話しします。

これは中国政治に関する報告書のなかの私の論文のなかで明確に述べています。方法論の報告書でそれを明確に述べなかったのは、確かに私の不行き届きでした。昨日、パワーポイントで示した状況を示す図式（本報告書42ページ）は明らかに開放系です。例えば「A」という外国人研究者は、自分の母国である「A」という国のいろいろな主体の目的

や意志との絡み合いのなかで、自国の国家的意志や研究者の意志を抱え込んだままで、自国とは別の中国という対象領域の状況にかかわります。したがって、それは完全な開放系です。例えば、そこで描かれた政府や党という主体に関しても、この政府や党は特定の地域の状況にだけ絡んでいるのではなく、県、省、中央政府、中央レベルといった立体的な空間へと開放されて、主体がそこに存在するわけです。したがって、「国別学」は焦点として置かれているある国をとりあえず意味するだけでしかありません。その国が閉鎖体系的な国であることをまったく意味していません。この点を誤解しないでください。私はむしろ一国論的な国民国家論に対しては極めて批判的な論点を既に出しております。

2番目に、馬場さんや榎根さんの出された問題、昨日のお二人の報告のなかにもありましたが、研究態度としてのみ「コ・ビヘイビオリズム」の提起に賛成するという考え方です。これは私の論文に対する明らかな誤読から来ています。なぜならば、研究方法論としてこそ「コ・ビヘイビオリズム」は重大な意味を持つからです。自身の主体を状況に埋め込んでいるときの研究者の意識が、自己の状況に埋め込まれた主体に自覚的でなければ、客観的な、つまり価値中立的な意味での客観性を帯びた研究はそこからは生まれ得ないと言っているのです。

この点は『鏡の中の日本と中国』のなかで詳細に論じています。どのようなことかと言うと、方法的な自覚がないところでは「因果論」と「目的論」の混同を引き起こすからです。つまり、主体を状況に埋め込むことを方法的に自覚しないことによって、自己の内に存在している目的論的価値判断に無自覚となります。そこではオリエンタリズムの克服は

不可能であるだけでなく、自己の価値に適合的な事実のみ、状況からそうしたもののみを削り取るという態度があらわれがちとなります。

したがって、それは明らかに価値中立性から外れた結果になるということです。秋山さんが出した自然と人間の関係は、当然、視野に入れておかなければいけないポイントです。私が「コ・ビヘイビオリズム」を円で表現した状況として描きましたが、これはあくまで主体を人間にのみ置いたものとして描いたものです。ただ、自然をこの状況に置いて描くことになると、これはさらに複雑な図を描かなければならないために、極めて一部に限定した図にとどめたということをお話しました。

他にもお答えしたいことがありますが、とりあえず時間が来ておりますので1つだけ申し上げたいと思います。オリエンタリズムは「歪み」であるのかどうかという田中さんの指摘は大変重要です。実はフランシス・フクヤマが歴史の終わりをクエスチョンマーク付きで論じた最大の理由は、もはや自由主義が対となる反価値を持つことがなくなったのではないかと。つまり自由主義が対抗する反対軸を持たなくなったとき、それはもはや「歪み」でも何でもありません。全部が自由主義になってしまうのです。もはや、誰も自由主義に対する疑問を持たなくなってきました。だからこそ、より問題が根深くなるということをお話しているのです。したがって、オリエンタリズムは「歪み」か？ という根本問題は、今の世界の現状に批判的な目をなお向けうるかどうかという一点にかかってきます。まだ他にありますが、とりあえずこれだけお答えしておきます。

●—司会 どうもありがとうございました。

皆さまの時間厳守のご協力の結果、ほぼ定刻に午前中の予定を終了することができました。コーディネーターとして改めて御礼を申し上げます。

〈 昼 休 憩 〉

●一司会（川井）では、ただいまから午後の総合討論を開始したいと思います。私、国際中国学研究センターの川井が司会を務めさせていただきます。午後は、忌憚のない自由なディスカッションを意図しております。問題点が大変多岐にわたりますので、私の独断で論点を整理してみましたので説明させていただきます。

これまでの議論、論文を整理すると、3つの大きなポイントがあると思われま。第1点は「地域研究」の評価について。とりわけ中国研究は、これまでどのようなものであったのかという評価についての問題です。これについては、ご覧のスライドに、そのなかのサブポイントを幾つか整理しておりますが、当面、それぞれのポイントについて議論を進めていければと考えています。それから、大きな第2のポイントは「コ・ビヘイオリズム（共同態度論）」に関するものです。それから第3のポイントは「地域研究」と「現代中国学」との関係、とりわけ現代中国学の構築に関してのものです。大きく以上の3つに整理できるだろうと考えました。

そのもとで進め方としては、午後の総合討論の時間が2時間半あります。それからコンクルージョン（総括）とありますが、総括とするよりも議論をそのまま続けることを予定しています。したがって、休憩の前の時間を大きな第1点と第2点を中心に進めていきたいと思。それから休憩のあと、第3点、現代中国学の構築に関する点を議論し

ていきたいと思。います。

さて、これまでの中国地域研究がどのようなものであったのかということについて、加々美論文もそれを重点的に書かれています。それについてのコメントもたくさん出ました。そのなかに2つのポイントがあるかと思。います。すなわち、地域研究には国策的な指向があったのか、なかったのか。あったのならほどの程度あったのか。「国策指向」か「自立指向」かということに関連して、アメリカにおける中国研究、日本における中国研究、さらには中国における中国研究、それぞれの立場からいろいろな議論ができるだろうと思。います。

そして、もう1つ大きな点はオリエンタリズムです。オリエンタリズムないしは近代主義の影響をどのように見るのかということについても、いろいろな角度から議論が出たようです。その他、パネルにありますようないろいろな点につきまして議論していきたいと思。います。

この大きな第1のポイントについて1時間程度、議論を進めていきたいと考えています。まず、上の順番からいきますと、第1のポイントである「国策的」なものか、「自立的」なものかについて、特にアメリカにおける中国研究の評価を巡っては、かなりの見解の違いがあったような印象を受けました。日本についても議論があったようですが、中国も含めて、そのへんのことを議論していただければと思。います。

いかがでしょうか。加々美先生の主張とリチャード・マドソン先生の主張の間には、やはりある程度の違いが見られたと思。います。そのへんについて、できればマドソンさんから何か議論をいただければありがたいと思。います。

●—マドソン I think Professor Kagami's analysis was very enlightening. However I might make a distinction in this notion of China area studies being oriented toward state policy. I think in the United States it has been oriented toward state policy, but on different levels. There are some scholars who want to influence the government, government bureaucracies, for instance the state department or the defense department, and want to consult for them. But then there are others, including myself, I think, who orient our work toward the public. So we aim to speak to the educated public, to try to inform the public in general about China, so that in a democratic process the public will choose leaders and advocate policies that are ultimately in the public's best interest. So I think you have to make a distinction between the state and the public sphere.

Then there are other pressures within academic research to orient one's work to what one scholar has called the "communities of the competent," that is, to one's fellow experts. So we write for little journals in a language that no one can understand except fellow sociologists or fellow economists, and that's not really public, although it's supposed to be. And you get a different kind of discourse when you do that. So I think that China studies like other parts of academic life is caught between these different dimensions. I also would say that in the United States, scholars like myself feel some responsibility to orient our work toward the American public, that is we write in English, I expect most people who read my books will be Americans, and I try to write things that would answer the kind of questions, concerns that they have. However I think that Professor Kagami

would encourage us to orient our work also more globally. So in my case, more recently I like that my works are translated into Chinese and are read in China. And that wasn't the main intended audience but hopefully it's beneficial to them, and learning from their dialogue with it has enriched my understanding. So I guess the issue is, what our responsibility is, and whom we orient our work to. And I think it's not exclusively to our states, whether it's the Japanese state or the American state, but I think it should be to a broader public, and the public would first of all be a national public, but also I would hope a more global public as time goes on.

●—司会 どうもありがとうございました。アメリカの中国研究についてのご発言ですが、これに関連して、どなたか追加発言はありますでしょうか。

最初に、このテーマに関連して発言のあった方をこちらで指名させていただきます。そのあとフリーにしていきたいと考えています。もしそれでよろしければ、「国策的」か、「自立的」かということに関しては、アメリカ研究についてはもう一人ハーウィット先生、それから日本の中国研究については馬場先生が議論されたと記憶しておりますが、ハーウィット先生、いかがでしょうか。

●—ハーウィット Yes, I'd like to agree with what Professor Madsen said, generally about the way that American scholars publish their material. Also I would like to add that much of our research is funded by the American government, in many cases by the Education Department or by foundations associated with the government, but my impression is a lot of times once we receive the money as scholars that we're not really bound to follow the state policies of the

American government, so that we're given a lot of freedom I think to spend the money in ways that we think are useful. On the other hand, the American government I think wants to make sure that they can defend the way the government spends the money. So a lot of times we say, is the American taxpayer going to be pleased with the way that this money is spent? So I think the government does look out not so much for national interests but for the interests of maybe American businesses to some extent, American communities, so in that sense maybe not so much American foreign policy interests but to the benefits for the American people at kind of a lower level of thinking. So, there are some parameters I think on the way that the American government distributes their money but once we have the funds I think that they are relatively, we have a good degree of freedom in how we actually spend it.

●—司会 はい。では関連して、馬場先生いかがでしょうか。

●—馬場 アジア政経学会の件ですが、加々美先生がアジア政経学会の創立者が国策指向的な指向性を持っていたことを指摘されました。これは非常に重要な指摘だと思います。

しかしながら、確かにアジア政経学会は外務省から補助金をもらっていましたが、実際の研究成果が即日本の外交政策に生かせるというような研究内容ではなかったと、私は総体としては判断しています。より地道な基礎研究がおこなわれていたのではないかと思います。ただ一部、アジア政経学会を基盤としている方、名前を挙げるといけないのかもしれませんが、例えば国分良成さんなどが、そのようなかたちで政策に関連を持っているということはあるかもしれません。ただ現在の

アジア政経学会が、総体として国策指向的なものを目指しているとは私には考えられません。

それよりも例えば、外務省の関係では日本国際問題研究所がありますが、その在り方はどうかとか、そのようにもう少し幅広く考えた方がいいのではないかと思います。以上です。

●—司会 これに関連して、アメリカや日本における中国研究、地域研究についていかがでしょうか。何か関連した発言はありますでしょうか。

●—周長城 我想就这个问题简单说一点。美国伯克利的麦克·鲍威 (Mike Vogel) 最近提出一个观点值得我们思考, 把中国学的研究、区域研究放在社会科学的视域下进行思考, 他把研究分为四个象限: 第一象限是 academic, 第二个象限是 public sociology, 第三个象限是 critical, 第四个象限叫 social policy。他举的社会科学研究的途径具有这四个象限, 每两个象限之间都有交界的, 既有 academic 和 critical 的, 也有 academic and social policy 的, 是交互的, 我认为这个思路可以回答我们讨论的问题, 区域研究究竟是政策研究, 还是学者个人的兴趣所在, 还是公共领域中的像刚才 Madsen 教授讲的, 这个思路可以提供给我们一个对整个社会科学的思路的问题, 所以说, 简而言之, 区域研究起源于政策研究、国策研究, 实际上它慢慢演变为一个 academic 的, 或者说是一个批判性的, 或者是一个公共领域的 discourse, 我觉得要按照这个逻辑去思考。谢谢!

●—司会 ありがとうございます。これに関連して、特に中国側から中国におけるご発言がありますでしょうか。だいたい国策的な政策が強かったという点では意見が一致するのではないかと思います。ただ自立的な傾

向も見られたという発言もあります。それに関連して何かご発言ありますか。どうぞ。

●—鈴木 まず、アメリカにおける大学の機能の問題に関連しますが、アメリカでは既にシンクタンクのシステムが十分熟成しておりますので、研究の政策的志向性については、それぞれのシンクタンクが担っているという側面があります。そのため、研究機関としての大学は具体的な政治権力による「国策的」課題から相対的な距離を保つことができるのではないかと思います。

しかし、実際にアメリカの大学において自由な研究ができるかどうかというと、中国研究についてどうか具体的にはわかりませんが、私が少し関わっております中東研究について申しますと、やはり広義の政治的な力関係の上に微妙に成り立っている現実が変わりはありません。いわゆる「イスラエル・ロビー」の動きや「キャンパス・ウオッチ」のような「監視機構」が、厳然と機能しておりますし、これは政府というよりも、いずれにしても政治社会における力関係がいろいろなかたちで反映するような場面もあるということを見ておかないといけないのではないかと思います。単純に、政府と研究者という二元的な関係だけではなく、いろいろな権力の構造がありうるアメリカのなかでは、この問題を単純に考えることはできないでしょう。

それから、日本について申しますと、ペーパーにも少し書きましたが、戦後の日本は、冷戦構造の中に組み込まれた、アメリカ以外の他の多くの国家同様に、外交政策を自主的に決定する独立主権を有する国家には、どうもなっていなかったということもあり、政府の外交政策も官僚組織の状況的対応に依存していただけて、国内の研究者に何も期待してはいなかったように思えます。また、有効に

機能するシンクタンクもありませんでしたので、大学の研究者などに中途半端な、実効性を検証されることもない無責任なアドバイスをもらって、個々の外交政策への国内における反発や反対の緩衝材にしているに過ぎなかったように、個人的には考えています。国際政治や外交問題を論じている研究者が、そのまま政府に参画して、それまでの官僚とは違った特色ある働きをしたという事例は、残念ながらあまりないように思えます。

●—李 経済学部で李春利です。今の日本関連の部分で、鈴木先生のご意見に対して多少反論になりますが、日本では果たしてアカデミックな人が政策にかかわっていないのでしょうか。日本には審議会があるでしょう。それは典型的な政策形成に関するアドバイスですね。

●—鈴木 いや、審議会は官僚のお膳立てに乗っている人を呼ぶのであって、別にその人が何かをポジティブに研究業績を背景に提案したり、協力したりするという場ではないのではないのでしょうか。官僚が主導で操作可能な構成となっているので、研究者の主体的役割は相対的に小さいということです。

●—李 私が言いたいのは、機能面からみれば、審議会はシンクタンクのような機能を果たしているということです。

●—鈴木 それは誤解でしょう。審議会はシンクタンクにはなりえませんし、アメリカの外交問題評議会のような機能はないと考えます。

●—李 審議会の場合は、例えば、東京大学のなかでも経済学者の小宮隆太郎という人が有名です。この人は絶対に審議会に入らない主義です。学者は自分の論文で政策批判をすべきだと主張してきています。

ただその一方で、この人は大蔵省（現：財

務省)、あの人は通産省(現:経済産業省)、運輸省(現:国土交通省)など、官僚の世界にどっぷり身を置く学者も結構います。鈴木先生がおっしゃったように、たしかに官僚が事務局を担当し、審議会メンバーの選出も官僚の意思が反映されますが、ただやはりその分野のしかるべき専門家、あるいは権威でないとその職が務まらないわけです。その場合、学者は政策提言を行うだけではなく、実行に移すときに審査、監督することもしばしばあります。学者がトップを務める政府関連の委員会は決して少なくありません。日本の官僚は、少なくともこれまである程度シンクタンクのような役割を果たしてきたのではないかと思います。

アジア政経学会はどうか分かりません。学会と政府の関係については、お金の出处だけではなく、もう少し機能面に目を向けてほしいというのが私の意見です。

●—司会 何か関連発言はありますか。

●—鈴木 審議会の編成についてですが、先ほどのマドソン、ハーウィット両先生のお話にもありましたように、有権者の声のバランスを取るために、政府擁護の研究者ばかりでなく、それに反対する研究者をもあえてセレクトして、あたかも予定調和的に政策提言が為されているかような「バランス」を取るところに、日本の審議会制度の絶妙なポリシーがあるのだということも付け加えておきたいと思います。その意味では、世論が大きく動けば、審議会もその影響を受けることにはなっているのでしょう。

●—司会 もし発言がなければ、これまでの発言に対する加々美先生の意見をどうぞ。

●—加々美 どうもありがとうございます。まず、マドソンさんの議論ですが、ジェームズ・ベック(James Peck)とフェア

バンク(J. K. Fairbank)の論争があります。CCAS(The Committee of Concerned Asian Scholars:憂慮せる米アジア学者の会)のジェームズ・ベックとフェアバンクの論争です。これは1970年の*Bulletin of Concerned Asian Scholars*に掲載されております。そのなかで、ベックは、フェアバンクがアメリカの対アジア政策、対中国政策に批判的であることは十分承知していると言っています。つまり、アメリカ政府の国策を支持する立場にはなかったということです。しかしながら、フェアバンクにはある種の近代主義(modernism)があり、そのうえに立って国策批判をしていたという意味で、もっと根深いところから見ると、アメリカの国策と大きく軌道を外れているわけではなかったという論法でフェアバンクを批判しています。

私がこの点をわざわざ引用しているのは、国策批判的であるか、国策支持的であるかということはずしも問題ではないからです。現代中国研究ではなく、例えば、古典中国を研究することになれば、現代中国学のジャンルから外れるわけです。そのような場合には、確かに中立的研究は部分的には成立し得たかもしれませんが、それでも、ベックに言わせれば、そこにある種のモダニズムが働くことがあり得るのではないかという疑惑は残ってきます。現代中国研究に関していえば、アメリカの国策から自由ではないという意味では、そこに国策に対する何らかのコミットメント(commitment)が働くということ、コミットメントは、ポジティブなコミットメントもあるし、ネガティブなコミットメントもあるわけです。その両者がいずれも国策的研究と定義できると言っているのです。これがまず第1点のお答えになるかと思います。

それからもう1つは、これはマドソンさん

がおっしゃっていることです。「the strongest base of “orientalism” is not within area studies centers, but within the mainstream, specialized social science disciplines : economic, political science, sociology.」と指摘しています。

つまり簡単に言えば、オリエンタリズムのより強固な主流は、エリアスタディーズにあるのではなく、どちらかといえば経済学、政治学あるいは社会学のようにオリエンタリズム批判の対象となっていない領域に非常に強く存在すると言っておられます。

私はそのとおりのことを書いています。名前を具体的に挙げるのは控えますが、国際政治学から中国研究に研究範囲を拡大した日本の学者はたくさんいます。しかし、オリエンタリズム的な批判が起きると、そのような研究者は逃げ込む穴があるわけです。そのような批判をかわして逃げ込む穴があるわけです。それは国際政治学という穴です。社会学も同じです。「私は社会学者です。社会学の応用領域として中国について研究していても、オリエンタリズムとして批判されるのならば応用領域から撤退して社会学に戻ります」となるわけです。簡単に逃げ込める穴があるわけです。そこにオリエンタリズムの強固な持続性が存在する背景があると私は言っているわけです。ですから既存のディシプリンまでを最終的に批判しなければ、本来オリエンタリズム批判は徹底できないということです。

その意味でもう1つは、あらゆる社会科学は一定の有用性を持たなければいけません。それは学術的な有用性だけではなく、公共的な利益にも奉仕するということもあり得るでしょう。公共的利益に奉仕する研究をやっているという場合、例えば日中関係研究の場合「私は、中国についてよく知らない人々に中

国のことをより理解してもらうために研究をしている。国家のために国策研究をしているわけではない」と言う場合です。

その種の研究も「公共的利益」に奉仕するためとは言っても、日本人一般の対中イメージを左右することを通して国家の対中政策にも影響を与える結果になってくるわけです。ですから、いかに実用主義的な考え方に立ったとしても、国策的研究から完全に自由ではあり得ません。これは特にアメリカの場合にそう言えるだろうと思っています。なぜかと言うと、アメリカでは中国研究が結果的にさまざまなロビー活動（対政府広報活動）に影響を与えていくことにもなるからです。

それから日本における中国研究に関してですが、これは繰り返しお話していますので、おわかりになると思いますが、戦後、日本は対外的な国策、つまり外交政策を独自に展開できる力量がありませんでした。つまり、完全にアメリカの従属下に置かれていましたので、対アジア政策、対外政策を独自に展開できないということは、対アジア、対外的な国策を持ち得ないという制約下にあったのです。

設立当初のアジア政経学会やアジア経済研究所が国策的研究を目指したとしても、日本の国家に対外的国策がないために、かえって国策研究から自由であり得たわけです。冷戦終了後、90年代に入って、中国の改革開放政策が熟成してきて、初めて日本政府に対アジアの国策が生まれ、それとともに国策的研究が、例えば国分良成さんのように意識的におこなう人が現れてきました。私は国分さんを尊敬していますが、それは彼がはっきり国策を意識しているからです。自分が国策的研究をやるという自覚的意識があるからです。これは先ほど来お話していますように、

「コ・ビヘイビオリズム」の基本的条件です。自分は国策的研究はやっていない、「そんなことにかかわっていない」と言いながらかかわっている人、このような研究が方法的に貧しい研究です。あくまで、自覚的意識こそが方法論の出発点になるということです。

そうした変化は90年代に日本に起きました。それ以前には先ほど小宮隆太郎さんの話も出てきましたが、それは中国の改革開放に助言的立場に立ち、相当コミットした研究者が日本の経済学者のなかにいたということです。その意味では、彼らが国策的研究への草分けです。小宮さんの頭のなかには日本と中国という2つの国家のありようが、はっきりと描かれていたはずですが、その意味では、国策をはっきり意識していたはずですが、そのようなことが方法的に問題だということを示し上げておきたいと思います。

同じようなことは、エリック先生の指摘のなかにもマドソンさんと同じ指摘がありますので、あえてお答えはしません。ほぼお二人の疑念に関しては、私自身もマドソンさんやハーウィットさんと同じことを主張しているということです。オリエンタリズムは、むしろエリアスタディーズとしての中国研究の根より、もっと深い根が一般的なゼネラルディシプリン (general discipline) のなかに非常に強く存在しているということです。

●—司会 申し上げるのを忘れてしまいました。一人のご発言は最長5分をお願いしたいと思います。どうもすみません。よろしくをお願いします。

この議論に関連した発言があればお願いしたいと思いますが、既にオリエンタリズムの話が出ていますので、2番目のポイント、これまでの地域研究、中国研究においてオリエンタリズムの影響があったという議論がかな

り多かったのですが、ただ他方で、その影響も少なかったという議論もあります。それに対する対抗の姿勢も反オリエンタリズムというかたちで見られました。さらに視点を変えてオリエンタリズムの良さを、良さという言い過ぎかもしれませんが、成果もあったかという発言もあったかと思います。

ですから、オリエンタリズムの影響をマイナスのみで見ていいのかどうかという問題もあり得ると思います。もっと根本的にはそもそもオリエンタリズムはあったのか、なかったのかという問題も指摘できると思いますが、このへんに関してご発言をお願いします。お名前をお願いします。

●—李 愛知大学の李春利です。今の加々美先生のリプライに対して一言コメントをしてよろしいですか。先ほど加々美先生のリプライは、あたかも国策研究とは距離を置くべきだというニュアンスで受け止めることができます。ところが、アメリカにおける政策研究や、場合によっては中国における政策研究は、それぞれの社会の文脈 (context) のなかで、一般的な受け止め方が感覚的に違うところがあるように思います。

先ほど小宮隆太郎さんの話が出ましたが、実はわれわれが5年前に ICCS 最初のシンポジウムにお招きしたプリンストン大学経済学部のグレゴリー・チョウ (Gregory C. Chow、鄒至莊) さんの例があります。私と山本先生が彼のオフィスを訪ねましたが、その前に彼のホームページを見たら胡耀邦と一緒に撮った写真や趙紫陽との2ショットの写真が載っていました。彼は小宮隆太郎さんよりもっと前に中国の改革に積極的に助言してきた人です。彼はアメリカで全米中国経済学会を立ち上げて奨励金まで出しています。政策研究は当たり前だという雰囲気です。アメリカの研

究者であれ、中国の研究者であれ、国策研究は悪いものではないというような受け止め方をしている人が多いようです。

さらに、2004年から私は1年間アメリカに滞在していましたが、ちょうどアメリカの大統領選挙の年でした。そのとき、民主党が負けたのですが、もし勝ったとしたらハーバード大学の先生たちは喜んでワシントンへ行くでしょう。共和党が勝ったら、今度はスタンフォード大学の先生たちが喜んでワシントンへ行くでしょう、と聞いたことがあります。アメリカでは、パブリック・サービス（public service）という観点で、学者が政府の仕事にかかわるということは非常に名誉なことなのです。そのような受け止め方をしている人が多いようです。パブリック・サービスに関しては、2年間の休職が認められます。それを過ぎてしまったら、スタンフォード大学のライス（Condoleezza Rice、米国務長官）さんのように退職しなければなりません。

学会と政府の関係について、アメリカと中国、そして日本との間に感覚の差というか、温度の差があるように思います。そのあたりを考慮する必要があるのではないかと思います。

●—司会 では、先ほどのオリエンタリズムとの関連のご発言をお願いいたします。お名前をお願いします。

●—高 愛知大学の高明潔です。オリエンタリズムのことですが、それぞれの分野において、さまざまに定義されているように思えます。人類学におけるオリエンタリズムに関する解釈は、もともとオランダ人の日本人に対するイメージから生まれたものであるとされているようです。

具体的には、着物を着ている日本人の姿を

見たオランダ人はそれを、西欧に対する東洋的なイメージとして見据え、その後そのイメージがヨーロッパに広げて、異国興味や異国情緒を志向したヨーロッパ絵画の一流派とされ、ついに芸術史上の用語として定着するようになったが、サイードの『オリエンタリズム』によって、「オリエンタリズムを東洋と西洋とされるものの中に設けられた存在論的・認識論的区別に基づく思考様式」あるいは「オリエントを支配し再構成し威圧するための西洋の様式」と再定義したのです。「オリエント」とは、狭義には植民地時代の中東地域、広義には地域の如何を問われず、「旧宗主国」対「旧植民地」、「先進国」対「発展途中国」といった不平等な二者関係に現れる、前者による後者への潜在的優越意識や偏見、およびその発現としての好事的な描写、言説、態度の諸相を指すようになったとされています。

サイードのオリエンタリズム論はつねに現代思想界をリードしてきて、同時に批判も多くと指摘されています。日本側も同様であろうと思います。私の知る限りでは、中国は、近代以来「東方主義」を用いて西方に対照的な存在を示すには、「東方主義者」を標榜するような人物には情緒を示したが、サイードのオリエンタリズム説とは異なる意味合いを示されていました。サイードのオリエンタリズム説に追随し欧米の言説と対抗する動向は1990年代半ばに現れたものです。それは「多元論を提唱する第三世界の後現代主義（third world postmodernism）」と認識されています。

私自身は、多元論を提唱するものの、欧米に確立された社会学科の人類学の固有理論に基づいて研究を進めてきています。それと同時に、異文化、とくに少数民族に対して書く

手が持つ潜在的優越意識や一元主義的な偏見、および無責任の描写、言説、態度という態度をオリエンタリズム的な態度を強く批判しています。即ち、私はオリエンタリズムを一つの学問体系として見做されず、それを「覇権的・権威的な態度」の代名詞として用いています。私はこれまでオリエンタリズムを学問分野の固有定義として使用したことがありませんでした。

もう1つは川井先生の、もしオリエンタリズム的な結果があるとすれば、それを取上げてください、というコメントについて。個人差にもよりますが、私が読んでいた A. H. スミス (Smith, Arthur, Henderson 1848-1932) が書いた『支那の性格 (Chinese Characteristics)』は、サイドのオリエンタリズム的な描写であろうと思われる。また白鳥庫吉のモンゴル研究の中にもオリエンタリズム的な記録が見られます。勿論、それらの記録のいずれも後世に多大の示唆を与えているとも思えます。以上です。

●—司会 いかがでしょうか。議論を面白くするために、いろいろな対立点を出してみたいと思います。ひとつ考えられるのは、オリエンタリズムの問題性を指摘するという議論に対して、私が注目したのは江沛先生の議論です。オリエンタリズムの一面においてはプラスの成果としての側面もあります。やはり途上国の人がいると知識を得るためには、どうしても西洋の学問を学ぶ必要があるのでしょうか。それを通して現状を把握していくという意味で、手段として、認識としてやはり必要だったと。これは私の意見ですが、江沛先生、何かそのへんはありますか。

●—江 关于这一点，我主要是从中国当时在整个世界中的地位 and 角色进行思考的。我个人

认为无论是在经济上，还是在国家的角色以及学术体系上，中国都处在一个像金观涛先生所讲的那样的一个学习阶段。在这样一个阶段，中国人是拿世界的标准来重新看待自己，或者是以这个标准为目标向前发展。在这个过程中，东方主义对中国可能会有很多的作用，包括我们如何认识世界？如何认识我们自身的不足？当然，加加美先生讲的最重要的一点，是东方主义本身忽略了研究对象的主体性，这是从学术研究发展的角度来讲的。但是，东方主义在中国由农业社会向工业社会转型的过程中，我个人认为它还是发挥了相当的作用。在中国为代表的发达国家向现代世界体系转型的过程中，也许它是不可避免的，当然，警惕东方主义思维的问题所在，力求朝着科学的价值中立方向发展，这是没有问题的。在今天，中国无论是从经济上还是学术上都无法摆脱现有的这个体系，还不具备创造新体系的基础。所以说，我们可以去批评东方主义，但我们的学术语言、学术思维在根本上仍是难以摆脱它的影响的，这是我的想法。谢谢！

●—高 川井先生の提示はとても意味があると思います。即ち欧米側の知識や論理が中国に伝えるプラス面をどのように評価することですね。私の出身大学の先生のうち、1920年代半ばころからアメリカで学位を取得し、そして彼らが各自の修得した学問体系や固有理論に基づいて、帰国後いわゆる自国研究を精進しながら、数多くの弟子も育成しました。とくに潘光旦先生の生物社会学による江南地域のある王族の家系研究や、費孝通先生や林耀華先生の自らの古里に対する人類学的研究は、中国国内外を問わず、この分野でのテキストとして指定されています。彼らは中国人であるからその研究も価値がないというわけはありません。勿論、建国初期では、彼らの専門はブルジョアの学問と看做された

が、それと同時彼等の専門知識や方法論は、諸民族社会を区分する作業や政策を制定する作業には多大な貢献をしました。

私のコメントペーパーにもあると思いますが、私は、オリエンタリズムを一つに指標として、それによってすべて欧米側と関わりのある学問体系を否定することは、極端的ではないかと思っています。欧米側に樹立した人文社会学の学問体系がなければ、我々の「中国学」においては学問体系としての方法論も失われる可能性があると思えます。

●—司会 どうぞ、お名前をお願いいたします。

●—マドソン I'm Richard Madsen from University of California.

I would say that orientalism itself is a western concept, and it's based in certain kinds of western philosophy, and I would urge Asians to develop their own epistemologies based on Asian traditions.

One problem with orientalism is that it gets defined in many different ways. As I understand it, its first use was by Edward Said in his famous book by that name, and that book was very heavily influenced by the theories of Michel Foucault, the French philosopher. And Foucault and Said see power as totally intertwined with knowledge, so you can't separate them, and so when you know something it's really an expression of your power and of the will to dominate.

Now, there are other ways of understanding orientalism that are somewhat more positive, optimistic and maybe benign, and the way I have thought about it myself is based less on Foucault, whom I don't like, and on Hans-Georg Gadamer, a German philosopher very influenced by

Husserl. And he would say that we have to recognise that as human beings we start from our own prejudices, we see the world from where we are, and that is natural. So as an American I see China from an American point of view, there's no way of denying that and it's a normal thing. But we all have a kind of horizon, he says, a boundary beyond which we can't see things, and we think that's all that the world is. But then the purpose of research, of study, is to expand the horizon, and when you expand the horizon you have to take other things into account and you have a broader, more encompassing view of the world. So that view sees knowledge and power as at least partially disconnected. That is, the more you know, you can have a critique of the power relationships that you're part of. And it's a more dynamic view than the Foucault view, in which they are totally connected and static. And this is, I think, in line with Professor Kagami, that what you want to do is to try to expand your horizon constantly to have a more subtle understanding, recognizing that power relationships can't be avoided either. But not just assuming and despairing that all there is to life is people dominating each other with power and knowledge.

●—司会 関連発言を求めます。

●—藤田 愛知大学の藤田です。日本のことを考えますと、よく言われる例ですから改めて言わなくてもいいのかもしれませんが、日本の西欧化のプロセスのなかで、多くの技術、特にお抱えの先生方を日本に連れてきて西欧の技術を導入しました。これは地理学でもそうだと思います。今、大きな問題になっている断層線についても、その最大の断層線を見つけたのはドイツの研究者ですし、いろ

いろな意味で地理学も影響を受けています。

このオリエンタリズムの定義の仕方にも問題があると思います。日本の場合には、確かに欧米技術を積極的に導入しましたが、精神構造のうえでは伝統的な仏教思想や多神教的な世界がベースにあり、ヨーロッパのキリスト教的な、あるいは一元化された神々のもとでの価値観を日本人は受け入れませんでした。そのようなことが日本の場合にはありません。

しかし、ちまたを見ると欧米風のビルやファッション、生活様式など、価値観が一見西欧化しているところもあります。これは世界的な情報のなかでのグローバル化のひとつの問題だと思います。その基盤のなかで、日本人の場合は精神構造までは欧米化しませんでした。そのようなことがよく指摘されています。

このようなことからオリエンタリズムが、日本の場合は比較的、欧米の知識や技術と日本人の精神的な部分、これは八百よろずの神を信仰する日本人としては、多くのものを受け入れながら、それなりに取捨選択したというところがあります。

このような点は、中国や東南アジア諸国、中近東諸国等ではどのようになっているのでしょうか。価値観まで入ってきますと、欧米中心の価値観をどのように実証したらいいのかよくわかりませんが、そのへんの検討が、日本人が中国研究をする場合には、やはり非常に基本的な視点のひとつになるのではないのでしょうか。

したがって、中国の方々はそのへんのところはどうかだったのでしょうか。私は、戦前の東亜同文書院の研究を進めており、彼らの中国各地への調査旅行の作品をみていますと、中国にはヨーロッパやアメリカの宣教師が

隅々まで入って教化活動をしています。日本ではそのようなことはありませんでしたので、戦前あるいは戦中までの中国のヨーロッパの受け入れ方に独自性があったのでしょうか。そのへんを中国の方にお聞きしたいと思います。

●—司会—では、張琢先生お願いいたします。

●—張—我是爱知大学的张琢。关于西方文化，比如说刚才讲的宗教这样的意识形态，其实包括马克思主义在内，都是从西方传入中国的。中国现在作为国家宗教事务管理局所管辖的、承认的五大宗教，只有一个是本土的宗教，就是道教，然后是中世纪引进的佛教、伊斯兰教，近代传入的天主教、基督教（就是新教和旧教）。其他还有民间的信仰崇拜，比如说妈祖、土地菩萨等等各种民间信仰，所以说是贯穿中国近代各个领域的古今中外（古今中西）之争，一种碰撞、融合，多元一体，在磨合中塑造多元文化。“草鞋没样，边打边象”，未来的中国文化可能没有一个人能给它画一个固定的模式，也就是邓小平讲的“摸着石头过河”。

●—司会—宋さんからまずご発言ください。

●—宋—我对刚才这个问题补充说明一点。我认为从中国现在对外部文化接受的程度来看，应该说是世界上最开放的一个国家。什么原因呢？因为中国经过了文化大革命，传统文化、传统文化对中国人的约束已经没有了；第二，中国现在外部的如刚才张教授讲的五大宗教，实际上没有一个像西方包括日本的那样束缚人的思想，所以中国目前除了政治以外，政治体制还没有放开，其他全部应该是最开放的。我举一个简单的例子，也就是说中国人买东西通常认为外国的是最好的，自己的东西是不好的，这与我在日本生活的感受的最大的一个区别，日本认为自己制造的东西是非常好的，非

常贵的。我们看中国的商店的话，经常说所谓的“出口转内销”，在日本的话绝对不会出现这个现象。我就补充说明这一点，也就是说现在的中国和文革之前的中国对外部的接受的想法和做法完全发生了变化。

●—司会 どうもありがとうございます。次に榎根先生、お願いいたします。

●—榎根 榎根です。話題がオリエンタリズムに移りましたので、ひとつ言わせていただきます。

確か高橋さんがオリエンタル・ディスポティズム（oriental despotism：東洋的専制主義）とおっしゃったと思います。それはウィットフォーゲルの話ですね。

●—高橋 そうです。

●—榎根 そうすると、彼が書いたオリエンタル・ディスポティズムをどのように訳すのかわかりませんが、ハイドロリック・ソサエティ（hydraulic society：水力社会）のことですね。私は水の専門家ですから言わせていただきますと、あれは完全に間違っています。だから、あのようなものを、オリエンタル・ディスポティズムも含めて、オリエンタリズムと言って批判しているということは、私に言わせればナンセンスです。間違っているのですから。私に言わせると単に偏見でしかありません。だから、偏見なのか、方法論としての主体・客体論なのかということを問題にさせていただかないと、私はオリエンタリズムの話には入っていきません。

具体的な例として、日本には「風土」という概念があります。外国人も「風土」に興味を持っていますが、フランス人のベルク（Augustin Berque）は、「風土」についてフランス語でも書いていますし、日本語でもたくさん書いています。ところが、和辻哲郎（わつじてつろう）の言った「風土」は訳すこと

ができないのです。欧米語にはないわけでは、ベルクは何と訳したのでしょうか。結局、フランス語の「milieu」という言葉を使いました。このように、東洋と西洋の間には言語の問題もあると思います。私は風土を外国に広めようと思ってやる時は「風土＝fuudo」と書きます。しかし、それでは外国人に理解できるわけがありません。非常にポピュラーな自然現象である津波（tsunami）のように、日本語で世界に通用するものもあるわけです。しかし、観念的な言葉になるとなかなか通用しません。そのような言葉の問題もあることを指摘させていただきたいと思います。

●—司会 はい。他に関連した発言はありますでしょうか。では、鈴木先生お願いします。

●—鈴木 愛知大学の鈴木です。手短かに2点申し上げます。

まずオリエンタリズムについてですが、サイドが主張しているのは、特別に西洋起源の何かがあり、それが世界を席卷したということなのではありません。オリエンタリズムの根幹となる機能は、ありとあらゆる世界中の知を、近代西洋の自分たちが、あたかも最初の起源、少なくとも近代西洋がなければ、学知のシステムの中で意味あるものに構築することはできなかった、とでもいうかのように装うというところにあります。嘘でも何でも、いろいろな起源を近代知のカタチにまとめてしまい、自分たちにはパワーがあると主張していく、思考システムそのものであるオリエンタリズムを、サイドは批判しているのです。ウィットフォーゲルの問題もあるかもしれませんが、オリエンタリズムそのものについていえば、西洋を構築してしまった、その構築された西洋が、パワーの再配分権を

持っているかのように振る舞うことを、サイド自身は問題にしたのだと思うのです。近代西洋なるもののなかで、中国起源のものもオリエント起源のものも、夥しくたくさんあるわけですが、それらはすべて近代西洋へと向かうために存在し、そうした近代西洋の世界史的発展段階に到達しなければ、世界秩序をめぐる言説を支配する力は持てないのだという「幻惑」を与えるところに、オリエンタリズムの根幹があるのであろうという点が1つです。

それから、榎根先生が『風土』のお話をされましたが、日本のオリエンタリズムのひとつの典型として和辻哲郎があるわけです。彼は独自に翻訳不能な何かを用語として開発したのだと思いますが、それは彼自身の日本や東洋なるものの再編をする過程のなかで生み出したものです。あらわれとしてはオリエンタリズムそのものだと思います。以上、2点でした。

●—高橋 愛知大学の高橋です。今までの議論を聞いていて思いますに、私たちがまず認識しなければならないことがあるという点です。つまり、オリエンタリズムの受け止め方が人さままだということです。たとえば江浦先生はオリエンタリズムの源である西欧文化、文明にもメリットがあり、それを評価する部分もあるというお話でした。私はこのお考えは否定できないと思います。

西欧近代の普遍的な文明、あるいは普遍的な文化と文明の融合の利点については否定しようもないわけです。したがって、オリエンタリズム批判はできても西欧を悪として排除することはできません。

もう1つは、私たち日本人が受け止めているオリエンタリズムそのものです。オリエンタリズムという定義を辞書で確認したことは

ありませんが、非常に弾力的なものであり、時代の変化と世界情勢、学問水準や研究方法によって変わっていく性格のものだと思います。

ウィットフォーゲルについては、実は湯浅超男さんが翻訳されていますし、最近、また新しい著書を書かれまして、ウィットフォーゲルの見直しをしようという気運が出ています。ウィットフォーゲルは中国でもそうですし、日本の水研究者では、旗手勲さんや玉城哲さんなどからも批判されています。

しかし、批判をしきれない部分があるわけです。批判しきれない部分はどこかという、やはり私たちが受け止めざるを得ないような自然と人間との関係についてです。私たちは決して自然を切り離して生きていくことはできないのであり、その自然をどのように制御するのかという問題を定義したのが、まさにウィットフォーゲルです。その意味で、彼は真実を突いたといえます。

少し日本的な、文化的なニュアンスに偏りすぎたのが、和辻哲郎の「風土論」だと思います。玉城哲さんはその部分を批判したわけです。

●—司会 関連したご発言はありますか。特に、私からぜひおうかがいしたのは、中国における外国の地域研究について、例えば、日本研究やアメリカ研究との関連でのオリエンタリズムはどのように捉えられていたのでしょうか。そのへんを議論していただくと大変ありがたいと思います。どなたかご発言をお願いできませんでしょうか。では、陳東林先生、お願いいたします。

●—陳 我是中国社会科学院当代中国研究所的陈东林，我们这个所主要从事当代中国研究，就是加加美先生所讲的现代中国学在中国的称呼。我在文章里提出一个反东方主义，

我认为我们回到加加美先生提出来的“共同态度性”，为什么他要提出“共同态度论”的范式？我想他不单单是针对东方主义，还是针对功利主义的研究来提出的。江沛先生讲的东方主义的客观作用我是承认的，但是我们作为现代中国学的一个范式，必须有一个长期的、平稳的、可持续发展的范式，它不能是功利主义的。比如说，在我们的历史上曾经有过东方主义，在国内也曾经出现过反弹的、对立的反东方主义，这两种研究被历史证明都是对现代中国学有害的，所以我认为现在中国国内提出的口号——“有中国特色的社会主义”，究竟“中国特色”是主要的，还是“社会主义”是主要的，我想大家对这个都比较理解。中国现在搞的是不是社会主义可以讨论，但是中国特色是毫无疑问的，这一点是要坚持的。也就是说，如果我们在现代中国学的范式中间对东方主义或者反东方主义加以肯定的话，恐怕就会在无意识中丧失本体。我所理解的加加美先生提出的对东方主义的警惕，不仅仅是针对西方提出的那种东方主义，更为强调的是坚持本体论。谢谢！

●—司会 お願います。

●—楊棟梁 我接着陈先生讲两句，我是南开大学的杨栋梁。刚才主持人川井先生也提到，中国的地域研究或者是国别研究是一个什么情况，实际上我在提交的小文章的最后一部分讲到这个问题，我就顺便讲一下。在中国，80年代中期以后开始出现日本学这样的词汇，这在此前是没有的，80年代中期以后我们的日本研究开始进入到日本学研究时代。目前，中国有三个学术杂志就有日本学字样，都是比较好的杂志，叫日本学的机构也有几个。另外，我们也开过“日本学研究的现状与展望”这一类的学术研讨会。大家似乎都知道日本学是什么，实际上谁也没有认真想过日本学应该是个什么样的研究，它的特征、理论框架和方法体

系好像没有人研究。实际上关于这个问题我们在90年代就出过一组文章，是我主编的，全国十三家日本研究机构在南开大学召开过“日本学方法论”方面的会。但是，现在想起来，我们的认识还是很浅的，这是一个情况。最近十年来，没有像我们现在讨论的建立中国学范式这样讨论过日本学是什么范式。我对加加美教授的论文之特别感兴趣，在于他提出了一个中国学新范式的话题，也许我们也可以直接借用过来考虑日本学的范式，所以我认为这个会议的价值非常重要。中国学范式、日本学范式形成后，也就形成了一个原点，国别学研究的范式也就出来了，我想这是我们这次会议的最大意义。中国、日本的研究界关于日本学的概念，当初和现在是有变化的。80年代初期的时候，由于日本要成为文化大国、文化输出大国，全世界都在学习日本，中国当然也要学习，当时和东方主义就联系起来。日本虽然是东方国家，但在中国学界看来，它属于发达国家的一员，如果从东方主义的观点来说，肯定有这一层意思，他是先进的，我们应该学习。但是还不仅如此，它既是先进的，同时又是东方的，在中国旁边的，具有很多近似性的，学习起来很方便。如果日本能够成为一个先进的，中国和它有相似性，向它学习的话，那么中国成为先进的、发达国家的可能性不也是很大吗？这是80、90年代中国日本研究者的一种潜意识。但是现在情况正在发生变化，这可能和中国本身的变化有关系。谢谢！

●—司会 では、これまでの議論を踏まえて、加々美先生のレスポンスをお願いいたします。

●—加々美 ありがとうございます。最初にオリエンタリズムそのものにメリットもあったのではないかと、特に現代化プロセスのなかで、現代化を促進する要因として働いていたのではないかという問題。これは「オリエ

ンタリズム」という言葉がどこかに消失してしまい、なおかつ実質的にはオリエンタリズム的な方向で現代化を進めていくことに、あまり疑念を抱かない、そこにメリットがあると捉える見方が強くなってきたことを意味するのでしょうか。

しかし、ご存じにのように中国でも孫歌女史をはじめとして、竹内好再考の議論があらわれ、また魯迅をもう一度再考するなかで、「オリエンタリズム」という言葉自体は使われていませんが）、現代化のプロセスをもう一度批判的にみるという考えが徐々に強くなってきていると思います。

先ほど、楊棟梁さんが言われたように、中国ではよりオリエンタリズムの普遍性が強く働く状況が生れている傾向があります。例えば、「日本モデル論」からより一般的な「西洋モデル論」へ、さらにもはや西洋さえも意識しないという意味での一般的な「現代化モデル論」に移行してきています。

私の危機感は、「オリエンタリズム」という語彙が消失して、なおかつ、かつてのオリエンタリズム、そこに西欧近代を優越的な地位に置く考え方が、言葉が消失し、消え去ったなかで全面的にむしろ肯定され始めているという点にあります。そこに大きな問題があると思います。

その点は先ほど来、何人かの方々が言われました。特に江沛さんが非常に鋭く指摘をされた点と関連します。東洋はオリエンタリズムのなかで西洋を学びの教師として、ひたすら学ぼうとしながら、その西洋によって暴力的に植民地支配、武力的支配を被りました。学ぼうとするものから、逆に殴り倒されるという意味では、期待と裏切りが反復するという非常に長い歴史がありました。

今や西欧は東洋を殴り倒すという段階を通

り過ぎました。ただし、イラクのように、いまだに殴り倒されているところもありますが、ASEAN、NIEs、中国、インドなどはもはや殴り倒されません。殴り倒されないが故に、オリエンタリズムは、田中さんが指摘されたように、もはや歪んだものとする必要がないのではないかと、そのまま受け入れたらいいのではないかということは、論旨としてはフランシス・フクヤマの「歴史は終わった」という歴史観と非常に近いと思います。

そこに、力と知識というマドソンさんが指摘された問題、つまり本来はフーコー(Michel Foucault)が指摘したように、力と知識は、一体不可分の切り離しがたいものとして存在してきたわけです。しかし、この力と知識を分けなければいけないというのが、フーコーの目指した哲学的方向であったとした場合に、実際の事態はそのように向かっていないということです。力と知識は、再びフーコーが期待したものと違う深い結合のなかに存在しています。

いろいろなことをお話しなければいけないのですが、とりあえず最初の答えの出発点として、オリエンタリズムが極めて根強い力を持ち、しかもその名前そのものをも消失させて、装いを新たに世界のなかに厳然として、その根を張っていることを方法的問題の1つとしているということです。それはむしろん学術世界をも覆っているということです。

●—司会 はい、どうもありがとうございます。時間の関係上、掲示してあるような他の論点もあるわけですが、むしろ、2番目の大きな問題点である「コ・ビヘイビオリズム」について議論を移りたいと思います。これについては、私の整理では3つほどポイントがあったかと思います。「共同態度論」、これはコ・ビヘイビオリズムの成立条件という

問題の指摘。やはり成立させるためには長い道のりが必要であるという意見、その長い道のりはすぐにできるわけではありません。したがって、そのためにどのような条件が必要かという検討は必要でしょう。

これは次の設問と重なります。中国の条件において、もしくは現在の条件において、この「共同態度論」という認識、ないしは方法論を一步前進させるためにはどのようにしたらよいのでしょうかという点です。これはハーウィットさんからロードマップを示して欲しいという意見がありました。また藤田先生は、そこから全体を見通すにはどのようにしたらいいのかという指摘、このへんは私も共感するところです。やはりそのへんは、皆さんご関心があったかと思います。

それから、「共同態度論」の位置づけ、パラダイムとして評価することができるのか。態度やモラルの問題なのか、それとも分析ディシプリンの分析枠組みであり得るのかどうかという点です。最初の2つの点は重なっておりますのでまとめてしまいまして、このへんで、加々美先生がせっかく具体的なマップを示されました。この領域のなかの利害関係者を念頭において、一体どうするのかということを議論していただければと思います。

●—藤田 マップのなかで、直接そのなかに入り込んだ研究者と、それ以外の中国の研究者、あるいは国家、地方政府や一般の農民、住民などいろいろな立場が混ざったなかで、現実には非常に大きな立場がそれぞれにあり、利害関係が錯綜していると思います。これは日本でも同じだと思います。例えば、ある事業をおこなうときに、それに賛成、反対、あるいは少し賛成、少し反対、どちらでもよいなど、いろいろと出てくるわけです。

確かに外国人の研究者がそのなかに入った

ときに、その状況がわかるなかでどのくらいの役割を果たすのかという問題があるにしても、最終的にいろいろな議論を戦わしたなかで、どのような決着の方向をとっていくのでしょうか。お互いはわかるのですが、では、どのように決着をもっていくのでしょうか。今、これは日本のなかでも、われわれも地理学でフィールドワークをたくさん実施していますが、そのような問題に各地でぶつかります。そのための解決方法は、力でやるのか、妥協でやるのか、やはり難しかった、で終わってしまうのかと。従来を見ると、いろいろな選択肢があります。

そこで、例えば、研究者が外側から観察し、そのなかで問題を見つけて提案した場合にも、そのことがここから先は研究者の領域外ということになるのかもしれませんが。どのような決着の方向に向かっていくのでしょうか。そのへんに関する研究者と結果とのかかわり、それは次の段階で同じ問題にぶつかったときに、より良い方向へ向かっていくことができるのでしょうか。現実解決の問題とアカデミーのなかでの解決の問題は、かなり違うのではないのでしょうか。そのへんのところが、マップを見ながら、われわれも現実のフィールドワークをしながら、いつも現場の人たちと議論するなかでの一番大きな問題だと感じています。そのところをひとつ。

●—榎根 榎根です。私がコ・ビヘイビオリズムは常識だと言いましたので、その1つの例を申します。これは地域研究ではありません。私は、環境に関して水問題にいろいろと絡んでいます。例えば、ある地域に企業が進出してきたとします。そこで井戸を掘りました。地下水には水利権がありませんから、土地さえあれば井戸を掘ることができます。そうしたところ、井戸水が出たと。すると、住

民がそれに対して、「うちの井戸が枯れました」と、ちょうどそのころに河川工事をおこなっていました。住民は河川工事のせいだと言って訴えました。それが裁判になりそうだと相談を持ち込まれたことがあります。

それならばと、地域の水循環を調査して実態を明らかにするために委員会をつくり、3年ほど調査をしました。そのとき最初に提案したことは、委員会は公開にしましょうと。市民が参加できるものにしましょうと。発言はできませんが公開にしましょうと。テレビが入ってもいいし、情報は共有しましょうということで、川の水はこのよう地下水に漏れています。井戸への影響はこうですと、いろいろとやりました。すると、反対派の人たちは黙ってしまいました。

つまり、利害が対立するような人たちが、何か1つの問題に対して共同で行動しようとするときに、一番大事なのは情報の共有だと思えます。以前に環境庁の委員会で、それに関係する「健全な水循環の確保」という報告書をまとめたことがあります。そのときにも同じ問題が議論されました。具体的な方法は、ある地域の健全な水循環を確保するためには、企業と行政と住民と学識者が同じ場のなかで情報を共有し合って、どのような解決方法があり得るか考えることしか方法はない、ということでした。

皆さんもそれはご存じなわけです。だから、私は常識だと申し上げました。ところが、具体的にどのようにして健全な水循環を確保したらいいかという実行段階になると、その具体策が問題になります。残念ながら、その答えはまだ出ていません。

●—司会 関連の発言をお願いいたします。

●—高橋 愛知大学の高橋です。

客体と主体との関連論、かつ行動という概

念が出てきますが、まず主体については、中国研究に関しては、日本人でもアメリカ人でも構いませんが、それを括るとオキシダント(oxidant)になります。一方、中国は客体です。これはまさにオリентです。オリントとオキシダントが対句という関係になります。この主体と客体が直接向き合うようになった時代が、現代なのではないでしょうか。今まさにこの場で、私たちは中国の方やアメリカの方と1つの問題について議論をしています。

1970年代まではこのような場はなかったと思います。サイードの『オリエンタリズム』という本が出版されたのは1970年代です。もちろんそれ以前にも、状況や似たような概念はありました。この本は、それ以後に、脚光を浴びてきます。まさに私たちが時と場所を一堂に介する時代になってこそ、この本の意味が強まってきているといえます。

つまり、加々美先生の「共同行為論」は、まさにこのような状況、間接的に遠隔地で話し合う、あるいは情報によって交流しようとしていた時代から、現在のように直接向き合うな時代に変化しています。これが中国であろうが、日本であろうが、場所は構いません。そこでは、客体と主体がどのような位置づけになっているのでしょうか。客体と主体との関係が、もはやその区分自体がそれほど意味を持たなくなっているのではないかと、という問題提起をされているのでしょうか。

あるいは厳然として、客体と主体との区分は残り、依然として文字どおり、実態的にも、存在として残り続けており、その客体と主体が、客体としての役割、主体としての役割を堅牢に持ちながらひとつの行動をしようとしているのでしょうか。あるいは関係を持

とうとしているのでしょうか。このへんがいま一つはつきりしません。

私自身は、もはや客体と主体という区分自体が、それほどの意味を持たなくなっているのではないかと思っています。まさにそれが「共同」という意味ではないかと考えています。

●—司会 今の関連で、加々美先生のレスポンスはのちほどお願いしたいと思います。どうぞ続けて、ではハーウィットさん。

●—ハーウィット Professor Kagami, as I said yesterday Professor Kagami's diagram from his powerpoint was very useful to me in helping me understand some of the dynamics of cobehavioralism, and it made me think more about how it could be used in some of the examples that Professor Kagami gave in his paper, for example nuclear safety in Japan or I suppose in the United States or any country in the world, is something where the methodology could be applied. Or, he mentioned the specific case of a railway disaster in Japan.

But I guess my question is, in the case of China, it seems to me you have different dynamics operating with some of the elements that he talks about. For example, the media in China I think operates very differently than the media in Japan or the media in the United States or in other countries. Or, the local government, or researchers themselves I think have different constraints from what there are for those in America or Japan. So my question is, is there a way that one might have to modify cobehavioralism so that it could be applied specifically in the China case more effectively? So how best can we use cobehavioralism in the China case taking into account the role of the media, and the restraints

on the media, and the restraints on Chinese researchers and local government and the other factors that Professor Kagami has in his model?

●—江 我是南开大学的江沛。我对加加美老师昨天画的那幅图非常感兴趣，里面有一个问题没有想明白，要向加加美老师请教。我们现在讨论共同态度论这样一个基本立场的时候，大致的一个基本背景是全球化的时代，一种普世的价值观、科学的立场正在被大家逐渐地接受，是在这种前提下去讨论共同态度性，如果没有这个背景的话，恐怕就很难形成共同的态度性的。在加加美老师的那幅图里有一个小小的问题，在外国人研究者和中国人研究者之间用红线表示对立的关系，而没有绿线的协调关系。我有个疑问，为什么我们之间不能协调？其实我们两个人经常讨论问题，我的很多观点和您的是一致的，为什么是一种僵硬的对立关系？在那幅图表里面，外国人研究者和中国人研究者，与政府及其他的关系间都可以协调，为什么我们之间就不可以？我就是这样一个问题。

●—許 谢谢！这个问题我想还是举环境方面的例子。根据我的知识体系，我认为共同态度性要是用环境经济学的语言可能在一定程度可以解释吧，它是不是就是一个公共物品的概念。环境问题实际上是由外部性引起的，我们要想解决它的话，就必须尽量解决它的外部性。如果说一个区域的比如说是一个城市的大气污染问题的话，可能那些不同的利益相关者就应该是城市范围内享受大气质量的各个团体，包括不同的企业、公众还有政府等不同的团体。如果是在一条河流域的范围内，有可能是不同的国家或同一国家的不同省份，这条河流是公共物品，他们之间可能会有利益冲突。如果是全球的大气层，全球气候变化这个问题的话，整个全球范围内大家共享这个公共物品，如果是谁多排放了二氧化碳，可能全球

の人都会受到危害，这是人类共同面对的问题，所以在全球范围内要结成一個联合体统一行动来应对这一问题。其实，所有的研究如果要做到价值中立的话，那么这个中立的价值观就应该是全人类共同的美好未来。但是从现实的角度来说，一个很完美的政策体系是很难实现的，因为毕竟团体间的冲突是存在的。即使全球能够达成共识，都认识到气候变化是对全球的危害，我们要联合采取行动，但是在这样一个共识下，要达到一个完美的政策框架，也是很难的，这个道路有可能会很长。从京都议定书签订到它生效，直到现在还有很多国家，例如美国还没有签署，“后京都”现在已经提出来讨论，但是怎样能够达到一个很好的框架，可能也要有很长的路要走。因为在不同的国家之间有不同的想法，我理解的东方主义就是西方国家认为中国作为一个能源消费大国、二氧化碳排放大国应该要承担一些责任，但是从中国的角度来讲，如果纯粹是一个反东方主义的观点的话，就会认为在历史上发达国家已经排放了那么多，中国现在刚开始发展，全球面临气候变化这个问题，如果要我开始减排的话，我就拒绝和国际社会合作。我想这种东方主义和纯粹反东方主义的观点和做法，可能都不是一个价值中立的或者能够有助于事情完美解决的方案。因为中国可能还有很多农民连电灯都没有，所以尽管中国现在以一两个星期建一个发电厂的速度在建设，肯定在未来几年还要这样建下去。发达国家的人们很难想象没有电灯怎么生活，更不用说家用电器了。要达到现代化，现代化意味着生活的便利，意味着人人平等地享受高质量的生活，中国人可能还要发展下去，不会放弃发展的权利。其实这是一种冲突，国际社会怎样看中国和中国人怎样看中国是一个冲突，那么到底要采取一个怎样的政策？可能这两种观点要互相结合一下，而且要分步骤地来实行，最后达到一个完美的

结局，可能是一个比较现实的路径。谢谢！

●—高 愛知大学の高です。加々美先生に質問をしたいと思います。まず、「中国学」の設立条件について。私の質問は抽象的なものではなく、極めてプライベート的です。加々美先生の新しい中国学を確立するアイデンティティについて、ぜひ聞かせていただきたいと思います。

正直に言いますと、私は、加々美先生がどうしてこれまで中国研究を続けてきたのでしょうか。また「共同態度論」を求める目標は何であろうかについて、ずっと考えています。そして、先生の研究スタイルもずっと観察してきています。これと関連して、または高橋先生と江沛先生やハーウィット先生の質問にも少し関連があるかもしれませんが、つまり、加々美先生の、中国国内の中国人研究者と日本で中国研究をしているネデイヴ研究者の位置づけについて、どうしても拝聴させていただきたいです。これも「共同態度論」と関連のある問題だと思い、質問させていただきます。以上です。

●—李 ここでは「コ・ビヘイビオ」をという言葉の理解について少しコメントしたいと思います。コ・ビヘイビオは「態度」という言葉だけでは少し物足りないような気がします。やはり「立場」「方法」「態度」の3つを含めて解釈する必要があるのではないかと思います。昔の中国では、マルクス主義の立場、観点、方法の3つの言葉がよく使われていました。このビヘイビオについては、その中味をどのように理解したらいいでしょうか。

もう1つ、中国研究と日本研究はいま似たような問題に直面しています。やはり、両国の政治関係に大変影響されています。それは研究者を取り巻くマクロ的な環境にほかなり

ません。私は中国も非常に特殊性の強い国ですが、日本も特殊性の強い国だと思います。中日関係となればもっと特殊性の強い関係だと感じています。両国の政治関係が悪くなれば、中国人は客観的、理性的に日本のことを研究したり紹介したりすると、すぐに「親日派」と呼ばれてしまいます。中国では歴史のなかの特殊な時期において「親日派」は売国奴に近いようなニュアンスにとられたこともあります。それは日本においても似たようなことがあります。日中関係が悪くなった場合は、例えば、昨日の加藤紘一さんの話に出たように、彼が客観的に中国のことを話すと、やはり「親中派」や「媚中派（びちゅうは）」というレッテルを貼られてしまいます。

したがって、地域研究の政治的な環境も非常に重要なのではないかと思います。日本の中国研究と中国の日本研究両方は両国の政治関係から影響を受けているのではないかと思います。

●—小林 小林です。加々美論文は「西洋を中心とする近代の学問の問題意識」を批判するという主張でしたが、すべての近代の科学はヨーロッパ人が生み出したわけです。学問を自然科学、社会科学、人文科学と分けると、自然科学は人類が減びようと減びまいと、例えばニュートリノが降ってきて突き抜ける速度や量などは、今から1万年後でも同じです。人類がいなくなっても続く現象だと思います。

量子力学も中国人が研究しようが、日本人が研究しようが、アフリカ人が研究しようが変わりません。人間の解剖も基本的には、黒人であろうが、黄色人種であろうが、中国人、朝鮮人であろうが、人類というのは同じ構造を持っています。だから科学となるわけです。そのような自然科学に関しては、ヨー

ロッパ人が生み出したため、当然、ヨーロッパ人を尊敬し、今やその科学の中心であるアメリカに、中国人やインド人の秀才が勉強に行くのは当然のことだと思います。だから、その点においては、何らコスモポリタン（cosmopolitan）批判は問題にならないのではないのでしょうか。いつか、東京や北京が、科学の中心になる可能性もあります。

2番目の社会科学については、フランス革命に近代社会が生まれ、社会・経済が政治権力や宗教から独立したので、そこに何か法則性があるのではないかと、経済活動や人間社会の仕組みを研究しようということになり、一定程度それが可能になったのです。人間の社会・経済活動を対象にした学問は、人間の予測できない複雑な諸条件に規定されているので、科学として成立しておりません。人文社会科学はまだ「科学」としては未熟なものですし、人間をすべてロボットに改造しなければ、最後まで科学にはならないでしょう。

しかし、社会科学には、部分的に有効性というものがあります。フランス革命以降に近代社会が生まれたとすれば、約200年の歴史があるわけですが、その蓄積の中で、例えばウィットフォーゲルが出てきて、ヨーロッパ人の関心でアジアを見たところ、中国にハイドロリック・ソサエティ（hydraulic society）という「水の理論」によってより分かる固有の社会がある、そこが中国社会とヨーロッパ社会と違うことを言っていたわけです。先ほど、どなたかが「水の理論」で中国を見ること妥当ではなく、ヨーロッパ人の偏見だとおっしゃいましたが、今も水の問題で困っている中国政府も含めて、中国の歴代の国家においては、河川管理、治水灌漑、水の配分はその死命を制するほどの重要なものでした。ウィットフォーゲルはまた、「アジアの相続

制」論、「遊牧世界による征服王朝」論も提起しております。アジアでは一般的に相続制度が長子相続、限嗣相続です。中国や遊牧世界では男の子達に財産を均分で相続させます。ですから、アジア世界では日本の武士階級、ヨーロッパの領主・騎士階級のような階級は成立せず、支配者と被支配者は絶え間なく変転するのです。ウィットフォークの『オリエンタルデスポティズム（東洋帝専制主義）』は、そのような複雑で多様な理論構造を持っておりまして、彼はそのような東洋社会の特殊性を発見したのです。中国の国家社会を考える際に無視できない指摘が多いと思います。最後の人文科学は、どうも一番科学とは遠い物のように思います。個人の役割がきわめて大きいからです。科学にはなりにくいので、中国学といった国家の名の下でくくることはできにくい。

加々美先生の人文科学におけるオリエンタリズム批判は納得できます。人間はせいぜい数十年の命しかありません。長い自然科学や社会科学の成果を踏まえてどのように生きるのか、せいぜい70年くらいの間にどのように生きるのか、どのような哲学や道徳観を持って人生を過ごすのか、そこで人文科学が成立し発言力を持つと思います。ですから私は昨日言いましたように、アジアにおける仏教論や照葉樹林文化論、さらには海洋文明史観、文明の生態史観など、日本人による研究成果、パラダイム提起を取り入れて、人文科学の面で、ヨーロッパで生み出すことができなかった新しい観点を、アジアからあるいは日本から世界に発信してこそ、われわれの学問は普遍的な意義を持つのだと思います。

●—司会 では、周先生お願いします。

●—周曉虹 大家好！我是南京大学周曉虹。我提两个小的问题：第一个问题是求教于加加

美先生，我注意到关于共同态度论的翻译，还专门注意到加加美老师在论文中使用的这个词。我特意问了问朱安新，在日语中有没有“态度”这个词，加加美老师在论文中专门使用的是一个假名，也就是说他直接从英文读成 co-behaviorism。我自己觉得如果只用英文的这个词，倒可能更好地反映加加美老师的思想，但要真正翻译成日文和中文的话，可能会与他的想法有一定的距离。如果要翻译成中文的话，我还是坚持我个人的译法，翻译成共意或合意行为主义可能会更好。为什么这样说呢？因为刚才冯先生也提到，它不但要包括一种态度，而且要包括一种立场，但实际上如果要用 behavior 这个词就全部解决问题。在心理学中间，按照韦伯的解释，behavior 这个词是个体、群体以及总系对刺激的反应，这种反应既包括内隐的，也包括外现的，换句话说，态度本身是一种内隐的东西，一个 attitude，从这个角度来讲，behavior 这个词包容的程度可能比 attitude 更大，所以西方的心理学一直坚持心理学是研究 behavior 的，attitude 是 behavior 中间的一部分，这是第一个问题。

第二个问题，关于共同态度。我暂且使用共同态度，这个共同态度究竟是怎样形成的呢？我昨天谈到两个方面，我今天对这两个方面再作进一步的补充。中国以外的学者在研究中国的时候，我们还是要倡导一种主位研究，英文过去就有一种主位和客位，就是 eric 和 emic 这样一种区分。这是主位研究，如果反过来的话，中国自身的学者在研究自身的问题时，应该倡导一种客位研究，换句话说，中国过去有句老话，“不识庐山真面目，只缘身在此山中”，真正作为中国人这一点本身，不能够必然地导致你意识到中国问题。如果要这样说的话，我们讲中国农民问题最好的专家应该是农民本身，但实际上不是的，他需要一个 reflective，就是反思性，就是我在这里讲的他

本身应该超越自身的立场，作为一个客观的东西来反观中国，这样的话中国学者也才有可能真正地了解中国。所以，我认为这两个东西如果不能够有效地结合在一起的话，可能就不能触及问题的症结。刚才一位女士在谈到中国环境问题的时候，我觉得用这样一个观点来看待中国环境问题的话，可能会产生两个方面：一方面外国学者在研究中国环境问题的时候，可能不应该一味地指责中国，他应该站在中国人的立场上去采取一种主位的观点，意识到中国人们在改变自己的生存状态的过程中，他们有急切使得中国成为一个富强国家的愿望，在这种情况下会对环境问题丧失一定的敏感。反过来，中国自己的学者，应该站在客位的角度，超越这种想法，意识到中国对世界也是有责任的，换句话说，包括对世界的环境问题也是有责任的，在这种情况下就能够达到加加美先生提倡的这样一种共同态度论，我认为就能达到一种“共意行为主义”。谢谢！

●—宋 我是中国科学院地理科学资源研究所的宋献方。我首先想提加加美先生的一个问题，涉及到现代中国学的研究。我本人非常赞成加加美先生提出的“共同态度论”的口号，这对研究政治问题，或者包括刚才周教授讲的社会科学问题可能是适宜的，但是，我们来看自然科学的话，例如环境问题，讲中国的一个水污染的问题，现在淮河流域的水污染问题。在这个问题里面，中国国内的水利部建了很多大坝，大坝对水污染起什么作用？中国国内的两个利益部门——水利部和环保总局，这两个部门打得很厉害。环保总局给国家写报告，说淮河流域之所以造成污染，是因为大坝修建得太多了；水利部的人则极力反对这个观点，这是个利益冲突的问题，水利部说修建大坝既起到防洪的作用，发挥了灌溉作用，又减轻了污染，这就出现了一个争论。为了解决这个争论问题，他们最后请科学院这个中立的机构来评

判大坝对水环境，也就是对淮河流域的水污染到底起什么作用。我想这个已经与加加美先生提出的这个战略做法是一致的。反过来讲，如果加加美先生提的这个口号对中国学下一步的战略要打的话，就是要界定现代中国学研究的范围和定义，这和下一步的战略很有关系。如果是自然科学要提这个口号的话，恐怕要有一个适当的什么提法，我的问题就到这里，谢谢！

●—楊妍 谢谢！我是来自南开大学的杨妍。我想请教老师们一个问题，就是加加美老师提出的共同态度，就是中国学研究的范式转变的背后，我想知道我们为什么要讨论共同态度论这样一个问题，它背后到底追求的是什么？我们到底是要“求真”还是“求合”？“求真”就是说我们到底是要为中国问题的研究寻求它的客观性和真实性，还是要“求合”，就是寻求一种各方利益的均衡点这样的一种行为模式，我认为这两个目的是不一样的。也许在做中国研究这样的问题的时候，这两个目标是同时存在的，也就是“求真”要讲究研究的客观性，“求合”我们可以通过 Game theory，就是博弈论，找到一个纳什均衡点，通过这个均衡点来确定各方的共同的利益，然后我们寻求一种共同协作的行为模式。比如说像环境问题，就像中国的环境问题，这两个目标都会同时存在，如果我们要讲究“求真”的话，那么我们可以寻求一些量化的方式，像 CO₂ 的排放，还有二氧化硫的排放量等等，都可以制定一个国际的标准，然后根据这个量化的标准来确定。在研究中国问题的时候，通过量化的方式可能会更好地达成一个共同讨论的平台。但是如果“求合”的话，就像刚才有些老师所讲到的，那么我们怎样来寻找这种行为模式的纳什均衡点呢？我对这个问题还不太明白，想请教各位老师，谢谢！

●—周星 接着杨妍的话说，我觉得首先应该

是“求真”。“求真”是认识论的问题，应该就是学术，包括现代中国学的目标；而“求和”大概是行为论层面的问题，或者是一种政策研究，或者是为了达成某些现实的目的。这两个问题通常不能放在同一个层面上来讨论。如果中国学叫“学”，当然是要“求真”而不是“求和”，这是我的一个直觉般的回应。我倒是想起，在人类学界曾有位法国的人类学家，他想摆脱人类学中的西方中心主义，遂提出一个观点叫做“相互与双边的人类学”，也就是说，中国不再只是我们的研究对象，而是希望中国也来研究我们欧洲。他特别申请了一个计划，邀请一些中国人到法国去做田野调查。并不是说你作为我的研究对象，你永远是没有声音的，没有面孔的，沉默的，而是认为你有主体性，甚至我也可以成为你的研究客体。换句话说，日本的中国学必须和中国的日本学有一些对话，才能够有更多的发展，这是很重要的一点。由此引申出来一点，知识，我们关于异国、异族、异乡、异文化的知识，除了在把它们作为实地调查或田野工作之客体对象的过程中，在把它们作为客体对象去研究的过程中产生与获得之外，还有一个非常重要的路径就是交流，就是知识或知识体系的对话。日本的学者们所积累的关于中国的知识，中国学者们关于自己国家的知识，双方都难免有先入为主的偏见，都可能存在局限性，但是，如果这两种知识或知识的体系之间有一些场所，有一些机会，有一些管道来双向交流，那情况就会好得多。因此，我认为，共同态度论或者共同态度性，其实是应该再引申一步到知识的对话论才好。

●一季 今年の夏に、日本の「地域研究コンソーシアム」はニュースレターを発行しました。発行元と事務局は京都大学の総合地域研究センターです。このコンソーシアムは日本の地域研究関係者の大半をカバーしていると

いわれています。私は加々美所長から、ICCSの5年間の活動についてエッセイを書くようにと依頼されました。そこで、「コ・ビヘイビオリズム、現代中国研究の新しい方法論」という大きなテーマを見つけました。ところが、いざとなると、なかなか加々美理論をまとめあげることができませんでした。最後は仕方なくご本人に投げ返したわけですが、お忙しいなかでよくまとめていただきました。

そこで大事なのは、今、宋献方先生が提起された今後のICCSの中国研究戦略に関するお話です。私の基本的な考え方は、例えば、経済学や政治学などの社会科学の諸理論においては、既にディシプリンが確立されているわけで、それを打ち壊すだけの力は地域研究にはまだないのではないかと、ということです。やや悲観的な考え方かもしれません。

おそらく、これから研究对象や研究分析ツールも発展途上、あるいは研究途上にあるものならば、このコ・ビヘイビオリズムがより大きなパワーを発揮することができるのではないかと問題意識を持っています。

そこで、何が対象かというところ、おそらく加々美理論が一番かみ合っているのは環境問題ではないでしょうか。これが先ほど、インドネシアの「バリ・ロードマップ」の作業のプロセスを見てもわかるように、さまざまな利害関係者はそれぞれの理論的なツールを持ち合わせて、それぞれの地域の利害関係を代表してやり合っていたわけです。これほど大きな舞台は、まさにコ・ビヘイビオリズムがパワーを発揮できるひとつの大きな舞台になるのではないかと思います。

このエッセイのなかに書かれた、加々美先生ご自身がまとめた結論を読み上げます。

「コ・ビヘイビオリズムの新しさは研究主

体と研究対象双方に、相互的に連動する目的論と価値判断をとまなう態度が生じる点を重視するところにある。さらに、研究主体が外国人である場合と中国人である場合とでは、その目的論に違いが生じる点も重視する。すなわち、研究対象を囲む内外の状況をみずからの価値判断にそって主体的に変える権利を持つのが、あくまでも中国人であり、外国人研究者は同じ状況に中国人と総合的に連動する目的意識を持って働きかけるといっても、あくまで支援者の立場にとどまる。この点に方法的な自覚を持つことこそ、コ・ビヘイビオリズムの核心をなす。

ここまでは前置きです。次のところがより大切です。

「研究対象となる中国の内外状況に対して、中国の個人、集団、政府などの諸主体、さらに外国人研究者の目的意識は相互に連動して働くのだが、各主体の目的は、ときには調和的に、またときには敵対的に作用しつつ共同主体的な構造を形成する」。

「このコ・ビヘイビオリズムは、この構造を単に観察するのではなく、その構造のなかに分け入って、課題の解決策を具体的に提示することを目指す方法である」。

これが加々美先生ご本人の結論です。つまり、この複雑な構造をまず観察し、それからそのなかに分け入っていきます。したがって、これまで新しい方法論が確立されていない環境問題は、まさに梶根先生が指摘された総合学としての研究対象になるのではないかと考えます。

分かりやすくいえば、古いものを壊すよりも、新しいアリーナを探したほうが、より建設的なのではないかと思えます。新しい方法論と新しい研究対象のカップリングが ICCS の現実的な研究戦略になるのではないかと思

います。

●一方 大家好！我是中国国家开发银行的方琢。我就加加美老师的共同态度性谈一点自己粗浅的看法。刚才在下面和杨妍交流过这个问题，我认为共同态度性这个理论的提出确实是一个非常好的思路。一个理论背后，它的基础一定要厚实，关于共同态度性问题，从两个角度来讲，我还是有些问题想得太不清楚。一个是从因果论的角度来讲，我刚才在发言中也提到，立场决定态度，若有共同的态度性首先就要有共同的立场，或者是具有共同的利益相关性，如果在利益上没有什么相关性的话，作为主体也好、客体也好，在提出共同态度性方面就不是特别客观。下午发的这个 ppt 材料里面有一张图，揭示了人与人之间、人与自然之间的关系，从这张图上可以看出来，人与自然是一体的，是一个共同体，在这个基础上，人可以作为一个主体来研究客体，同时他们之间通过各种各样的相互关系。但是对中国研究来说，日本的学者研究中国和中国的学者研究中国，能不能具有共同态度性，取决于双方是不是一个共同体，他们之间在利益上有没有相关性，是不是一个共生体？如果这个问题解决不了，我觉得在共同态度的产生方面，在因果方面会有一些问题。第二，刚才杨妍提出中国研究是要“求真”还是“求合”？周星老师也说是“求真”，但现在有一个问题，这个“真”的标准是什么？因为社会科学，“真”的标准可能不一样，日本和中国对“真”的看法不太一样，怎么给“真”找到一个共同的标准，或者立场更加中立一点，这也是一个需要解决的问题。所以，我认为共同态度性确实是值得研究的，也确实有一些地方是需要完善的，我就提一些粗浅的看法。

●一周長城 我是武汉大学的周长城。因为昨天的时间很短，我在简单评论里已提到这个问题，但没有展开说。首先，共同态度性的研究

是一种理想模式，当然，我们科学研究接近一种理想模式而永远不可能达到这种理想模式，为什么呢？这个研究的过程是很重要的，我觉得这是一个过程论者，在过程中大家来谈论这个问题是可以的，但是最终真正达到共同的态度，我觉得是永远难以达到的。态度决定一切，刚才方琢谈到的另一个问题，立场决定态度，态度又决定一切。所以，作为一个研究来倡导这种理念，这种主客体的相互的反思或者理解，换位的思考，这些都是可以的，但要真正做到确实是比较困难的。在目前全球化的形势下，不论是哪一个研究者，从哪一个角度来研究，主客体之间总是要经常变换的。这是我所要讲的第一点，总结一下，这个是很有意义，但要达到这一点是比较困难的。第二点，具体地讲，就是主客体之间换位的方式或者叫态度的共同性，从哲学的层面上来讲确实是社会科学研究中的一个重要问题，在现实中也是很有必要的，例如刚才大家举的环境问题，在国际关系、国际政治、地缘政治中也都是非常重要的问题。在这里面，我认为两者是相互影响的，像吉登斯的行为者和结构的二元性的问题，实际上主客体之间也是相互影响的，即使在共同态度形成的过程中，也是相互影响的一个过程，因为在不了解客体的情况下，会是一种态度、一种理念，当你慢慢接近这种客体的时候，可能在对客体的理解时，主体会发生一种反思性的转变，这是一种能动的作用，我觉得这两个方面都是需要进一步思考的，这个观点的提出是非常有意义的，但是要接近它，恐怕还要有很长的路要走。谢谢！

●—馮 愛知大学の馮昭奎です。共同態度とか、ビヘイビアとはどのような意味でしょうか。共同態度が、やはり態度と立場が非常に密接に関連しております。ですから今、聞きたいのは「共同態度論」から「共同立場論」になれるのかどうか。もっと具体的に言え

ば、中国人と日本人が、中国人の立場と日本人の立場が一致することができるかどうかです。

去年香港のフェニックステレビ（鳳凰衛視）の一番有名な評論員が、中国の日本研究全体に対して全体的な評価は、中国の日本研究全体が親日的だと批判しました。すなわち、中国の日本研究者が日本人の立場に立って日本のことを言っていると。私の昔の友達で日本の駐北京大使の中江要介さんは、中国人の立場に立って中国のこと、日中関係のことを発言しているとよく批判されます。ですから、「共同態度論」から「共同立場論」になれるかどうか。

先ほどの話のなかで、中国全体のなかでも1つの立場になっていないです。それぞれの利益集団とか、地域や立場、それぞれの立場に立っておりますが、日本では最近の税金では、東京や愛知県から貧しい地方に分配することに対して、ものすごく対立しています。最後は石原さんがやむをえず三位一体改革を出しました。ですから、共同立場になれるかどうか。その質問をさせていただきたいです。

●—周立群 我是来自南开大学的周立群。对加加美老师提出这个命题我有一个想法，共同态度的培育和构建，它有一个前提，那就是必须有一个共同的命题或者共同的问题去研究。而在这个共同的问题或者共同命题的研究过程中，对话和交流以及换位的思考是一个很重要的路径，举个例子说，最近这几年中国为了把经济学和人文社会科学的某些成果推向国际，参与国际的交流，就办了一个系列的、共有17本杂志，其中经济学的英文杂志叫《Frontiers of Economics in China》，已经办了两年，我是这个刊物的主编。这个刊物是由Springer这个出版商向全球发行的，它的网络版、印刷版和

データベース同時発、它在推向国际的时候，有一个问题，它初始的问题不在于语言，在于编委会选择的的文章有两个方面的问题：一个是中国人十分关注的问题，而且这篇文章认为是高水平的、走在前沿的，在英文世界的学者阅读的时候，他认为这篇文章不重要，Springer 要定期向我们反馈，因为它的网络版和电子版有点击率和下载率。我们认为有的文章水平并不是最高的，而且这个问题不是最重要的，可是它的点击率和下载率恰恰是最高的，我们编委会会根据读者的要求不断地调整。这里面就隐含了这样一个问题，可能有两个原因：一个原因是，这个事件、对象本身会在国际上、世界上以及对方的国家和民族产生影响的，他会关注，而完全是中国内部事务的，在短期或者直接关系不是很密切的，他并不关注，并不关心。比如，中国国内收入的差距、地区之间的差距和他们没有关系，可是中国的经济增长、外汇储备等等与他们有关系，这是一个原因；第二个原因，不同国家和不同民族之间发展阶段和社会制度确实有差异，他们更为关注的是，在一些发达国家和发达地区在发展的水平上来审视和判断一些问题，包括他们对社会文明的理解，比如对贫困问题、妇女问题、社会救助问题就特别关注，从这个例子要推出一个命题的话，共同态度性的构建和培育，它涉及到很长的过程，而在这个过程中是要选择我们共同关注的问题，而这个问题也是每一个民族、每一个国家在利益上具有相关关系的，要在这一方面加强我们的对话和交流。谢谢！

●—司会 はい、ありがとうございます。この間、いろいろと意見が出ました。これから15分間の休憩をとりまして、その後、加々美先生からまとめてリスペンスをしていただくとかたちを取りたいと思います。よろしく願いいたします。

〈 休 憩 〉

●—司会 では、ただいまから最後のセッションになりますが、内容的にはコンクルージョン（総括）とは直接関係ありませんのでご了解ください。

では、先ほどの共同態度論のいろいろな議論に対して、加々美先生から議論の内容が比較的多いので10分以内でまとめてお願いしたいと思います。よろしく願いします。

●—加々美 いくつか問題を簡潔にまとめてお答えするようにします。まず第1点、共同態度論の特に「共同」という2つの漢字です。英語で言えば「co（シーオー）」と書いてあるところです。この理解に若干の誤解があるようです。これは楊妍さんからの質問のなかにも見られます。それから同じく許光清さんの質問にも見られました。つまり楊妍さんの場合は、「求真」か「求和」かという問題。「求和」は簡単に言うと協調的な関係、あるいは共同利益的な関係に行き着くのかどうかという問題です。

私の「共同態度論」は、未来の構図として美しい未来、つまり公共利益の実現、あるいは協調的な諸関係の成立というような未来を前提として立てられているカテゴリーではありません。その意味では、最後まで対立的な関係が持続する可能性も十分にあります。ある意味では、そのような方法的概念です。これを方法的概念なのか、あるいは道徳的概念なのか、あるいは倫理的な概念なのかという質問もありました。午前のセッションでも、榎根さんと馬場さんからそのような質問が出されておりました。その際お答えしたように、私の「コ・ビヘイビオリズム」は、倫理道徳の価値観の問題をその枠組みのなかに入れておりましたが、それ自体は方法的な意味で

倫理的な「何々すべき」といった道德論ではありません。

つまり、自己の主体を状況のなかに埋め込むという表現をしていますが、主体を状況のなかに埋め込むことは、当然個人としてみれば倫理的問題、道德的問題が発生します。

なぜかといえば、例えば、日本人が日本の研究をします。あるいは日本経済学の先生が現代日本経済を研究し、なおかつ仮にその国策研究に参加をして経済改革を推進するという立場に立った場合に、当然、その経済学者は状況のなかに自己の主体を埋め込むこととなります。しかし、そこではその人が提起した改革政策そのものが結果を問われるわけです。

因果関係と申しましたが、科学研究は因果分析です。原因と結果の連関を明らかにし、実際予測される結果を提示するわけです。そのときに、価値判断として、例えば日本の経済はこうあるべきであると。構造的にこのように変えるべきであるといったようなことが語られます。そうした結論を下すときに、原因となる諸要因をその状況のなかからできる限り価値中立的に集めてくるというわけです。

しかしながら、あるべき構造、あるべき経済を政策として提示するということは、その結果が事実としてどうなるかということが、いわば科学的な意味での検証になるわけです。自然科学の場合は、実験室の実験によってこのような検証手続きが取られています。つまり、実験室のなかで一方向的に、例えばある石だったら、石に科学的操作を加えます。その結果その石がどのように変化したのか。その変化はある操作を加えた際に、これこれの結果になるだろうと予測したと違わず変化を遂げれば、そこに検証が働きます。

つまり、その予測、因果分析が間違っていたという結果をきちんと示し出すわけです。そうすると、原因となる要素分析のほうに間違いがあったということになってきます。

社会科学の場合は、予想されるあるべき構造、あるべき経済構造を提起します。その結果、実際は予想したとおりにならなかったとします。つまり経済が、低成長の状況にあるところから出発して、因果分析を通して、ある一定の改革政策を実施すれば経済成長を保証できるようになると主張したときに、そのとおりにならなければ、当然、経済界、あるいは消費者も含めて、様々な経済主体がその経済学者に強い批判を浴びせることとなります。批判を受ければ、当然それは倫理的問題でもあるわけです。「あのような政策提言をしたために、かえって日本経済を混乱に陥れたのではないか」といった批判を不可避免的に浴びることになります。そのなかには、あるべき構造うんぬんと語った以上は倫理の批判も含まれます。道德的な批判も含まれます。それを正面から身に受けて、なおかつ最初の要因分析、つまり因果分析の原因にかかわる状況の収集のなかに誤りがあるとか。あるいは因果分析を、相関分析の関数に誤りがあり、例えば、パラメーター（係数）を変えなければいけないといったようなことを再検討しなければなりません。そのようなことが自国研究では実際に起きるわけです。

ところが、外国研究においては、このような検証過程が働きません。つまり、状況に自己を埋め込まないからです。外国研究の場合、中国という状況ならば中国という状況に自己の主体を埋め込まないことが多い。したがって、そこでは批判が中国側から起きたとしても、その研究者には届きません。中国側の批判があったとしても、それは犬の遠吠え

にしか聞こえません。自分の道徳的な問題も自覚されないという結果になります。

これがコ・ピヘイビオリズムの方法では、たとえ研究対象が外国の状況であっても、その状況のなかに研究者自身の主体を埋め込むのです。私が言う一番大きなポイントです。つまり、科学において検証過程が働かないということは、仮説を修正する余地を持たないということです。ですからより価値中立的な仮説に到達できないのです。これは私が40年間、中国研究をやってきて、たくさんの同僚研究者にそのような欠陥を見てきたわけです。

したがって、例えばオリエンタリズムの構造は、そのような検証過程を免れて、なおかつ好き勝手放題のことが言えるという状況を作り出す。日本を含む西欧の学者が中国、アジアを研究するときに、そうした構造のなかにいるということに問題があることを言っているのです。これがオリエンタリズムの最たるもので、最も根源的な問題はそこにあるわけです。それ以外に、西欧の文化が優れているとか、西欧の風俗が優れているとか、西欧の科学研究がより発展しているといったような問題は、副次的な問題に過ぎません。

例えば、西欧の価値を信ずる者が、本気でその西欧の価値を信じていたならば、ヴェーバーの言う価値合理性が働いて価値中立性を守ることができるのです。なぜかと言うと、愛国主義者の例を出しました。愛国主義者は、日本を愛するが故に日本を敗北させてはならないと。軍国主義者でもいいです。決して日本を破滅させたり敗北させてはならないと考えるならば、1943年の時点で、参謀本部の少なくとも一部の参謀たちが日本は負ける可能性が高いと知っていたにもかかわらず、それを政策的レベルにあげず、あえてそ

れを大本営の軍戦略として提起することをしなかったのはなぜでしょうか？ まず「売国奴」と言われることを恐れた可能性があるわけですね。

ところが、日本が負けてはならないという愛国的信念が貫徹しているほどの価値の内面化、価値判断の内面化が進んでいたならば、自分の命を賭けても参謀本部に対し停戦を主張したはずですね。そのための情報をより多く集めたうえでそう主張したはずなんです。

これは確かに、理念的に過ぎるように思えます。理想的な考え方だと言えばそのとおりです。しかし、マックス・ヴェーバーが「*interessen lage* (利益・利害状況)」、英語で言えば「*interest situation*」ですが。価値判断、価値観と利益状況との関係を精密に議論しているわけです。

例えば、私と小林一美先生が価値観においても、利害関心においても対立しているとしても、小林一美先生の言うことが道理にかなっていて、よく冷静に考えれば小林先生の言うことのほうが道理に近いと思っても、対立しているが故に、私はあえて小林さんの主張を私の仮説から排除するという態度を取ります。それは本当に自分の研究に対して誠実な態度かと言えば、そうではありません。自分の価値判断に対して、真に誠実であるのかというとそうではありません。自分と対立し、自分が感情的に受け入れがたいと思う考え、その人の主張する仮説がいかにも正しくとも受け入れない態度を取ること、それこそが日本の愛国主義者、軍国主義者が陥った過ち、つまり価値合理性からの逸脱なのです。

ですから、それがまず前提です。そこで「美好的未来」というか、つまり、共同態度論が理想的な秩序、協調性のある社会を生み出すかどうかの問題についていえば必ずしも

そうとは言えません。しかし、方法的問題を自覚するか、しないか、自覚が働く場合には、利害対立や価値判断の対立が協調関係に変わる可能性も秘めています。

ですから、共同態度論はひとつの動態的な過程を伴う方法論であり、決してそこから未来における協調関係が前提されている方法論ではないということを、最初に申し上げておきたいと思います。

それから、榎根先生が環境保護に関する委員会をとりあげた問題に、少しだけ触れておきます。それは榎根先生が日本で主催された委員会だと思います。日本人として日本の環境問題にかかわるときは、文字どおり榎根先生が紹介した事例は、自分の主体を状況のなかに埋め込んだ事例です。ですから、そこでは当然、健全な水循環の確保に対してどうしたらよいかという問題解決に向けた強い使命感があったはずですが、その使命感は確かに道徳的な問題でもありますが、実はそこに重大な方法的な問題を含んでいるのです。

例えば、中国で研究をされる際、それと同じように榎根先生が自分の主体を中国の状況のなかに埋め込むのかという問題が出てきます。日本であれば日本政府から、例えば榎根先生に委員会を組織してくださいと要請があつて、委員会活動が始まり、その結果如何によっては自分も責任を問われることとなります。しかし、中国研究の場合はそうはいきません。ですから先ほど榎根さんが出された事例で反対派の人々が黙ってしまったのは、文字どおり榎根先生が状況のなかに自己を埋め込んで責任を果たしたからです。私はそう思います。実はその問題が重要です。

今や、自分と中国とはあまり関係ない、だから自分は観察者として中国に臨んでいればいいのか、そのように考えられる時代は既に

通り過ぎています。先ほど高橋さんが言ったとおり、また他の先生方が言われたとおり、グローバリゼーションが強く進行していて、もはや私たちは外国研究と言えども、中国人やアジアの人々、中東の人々と無関係ではいられません。つまり、そこに自他共有する状況が発生し、共有する状況から自分が自由であろうとしても、それは本当は成り立たないことなのです。ですから、共有する状況のなかに自分を埋め込むことが、どうしても必要になってきます。一言で言えば、グローバリゼーションの1つのあらわれであると言ってもよいと思います。

いずれにしても、ハーウィットさんが言われた中国の自治体やマスメディアは、アメリカや日本のマスメディアや自治体とは違う。したがって、中国との文脈で読み直して修正が必要ではないのかという問題も、実際にその状況のなかに自分の主体を埋め込んだときに初めて中国のマスメディアのありよう、その真相が、実体として見えてきます。外から中国マスメディアをいくら知ろうとしてひっくり返しても、そこでは真相は見えてきません。自治体も同じです。住民団体もそうです。自分が一定程度、状況から自由であるという前提に立って中国のマスメディアを見ている場合も、中国の住民組織を見ている場合も、どちらも住民組織の真実に近い姿、マスメディアのより真実に近い姿は見えてきません。状況から自分が自由であるままで、そのなかで自分の考えるマスメディアのイメージが違っていただけからといって批判しても、それは根本的な批判にはならないことを意味しています。

江沛さんが、私の図中、中国人研究者と日本人研究者が対立関係に置かれているけれどもそれでよいかと言われました。この図は実

は1つの事例として描いた図に過ぎません。たまたまある某県、某郷の事例です。そこで偶然、その中国人研究者と日本人研究者の価値判断が違っていたという事例です。しかし、そうでないときには、もちろん協調的な関係も当然あり得ます。そこを誤解がないようお願いいたします。

馮昭奎さんが、マルクス主義では「観点」「立場」「方法」と言われたものが「コ・ピヘイビオリズム」ではないのか、「態度」「立場」「方法」という全体を包括する概念ではないのかと言われましたが、そのとおりです。マルクスが「ドイツ・イデオロギー」の中で「社会的諸関係の総体」と呼んだもの、それを動態化したもの、それが「コ・ピヘイビオリズム」なのです。その意味では、馮さんの指摘は私の考え方を読み解いていると思います。

同じく先ほど言いましたように「親日派」、あるいは「親中派」と呼ばれるのは、日本人ならば日中関係について論じているときに、あるいは中国について論じているときに、日本の状況のなかからは自由ではあり得ないのです。中国の状況から観念的に自分は自由だと思っているのですが、本当は自由ではないのです。まして、日本の状況からは自由ではありません。

必ず日本の状況のなかで私などは「おまえは親日なのか。反日なのか」。あるいは「親中なのか、反中なのか」と問われます。その意味では馮さんや他の方が言われているように、私の研究を親中的研究として分類する人がたくさんいます。そのような分類は傍観者の言うことだと思い、気にかけないようにしています。しかし、時にはインターネットの書き込み欄で非常にひどく罵られることがあり不快な思いをすることもあります。それは

中国における日本研究者の場合も同様で、楊棟梁さんが言われたことにもつながりますが、中国における日本研究者と日本における中国研究者は、その状況から負うものはほとんど同質のものです。ですから、そのようなことを一方で考えているということです。

ほかにもたくさん答えなければいけないことがあります。楊妍さんと方琢さんが出されましたが、「コ・ピヘイビオリズム」は「求真」なのか「求和」なのかという問題は、どちらかというところ「求真」であるというのが答えです。「求真」は価値中立性、価値自由性を獲得することですが、「コ・ピヘイビオリズム」によっても必ずしも研究の完全な客観性が達成可能であると私は思っていないという意味では懐疑論者です。客観的なものに近づくことはできます。無限に近づいていくことはできます。しかし、これが完全に真実であると言えるような状況はないということです。状況は常に研究主体を巻き込んで流動化しています。その意味では相対的な客観性にしか近づけないということです。

最後に、自然科学への批判は成立しないという小林先生のご意見。先ほど小林さんと私の例を出して価値観の対立がどうのこうのと言ったことと直接に関係するわけではありません。実際には1957年に、カナダでバグウォッシュ会議が「科学者の社会的責任」をテーマに開かれました。それより2年前の1955年に、アインシュタイン (Albert Einstein) と、バートランド・ラッセル (Bertrand A. W. Russell) が出した核廃絶の共同声明、アインシュタインの死去とほとんど同時に出された有名な共同声明があります。

その際、本当に状況から自由な客観的真理の追究が、自然科学においても成立可能なのかどうかという問題が議論されました。つま

り、素粒子物理学の研究の副産物としての原子爆弾による大量殺戮を誰が予想し得たのでしょうか。原子力について平和利用しか考えていなかったわけです。それが人類を破滅に追いやるほどの巨大な破壊兵器となったのです。それを予想しないで研究を行うということは、原子爆弾、核融合、核分裂の事実のマイナスの一面を見ていなかったか、見ていても軽く評価していたということです。

これはバイオテクノロジーについても同様なことがいわれます。自然科学では、既に1957年のバグウォッシュ会議以降、社会的状況から自然科学が自由ではないことを前提とした方法的問題が論じられてきました。特に自然科学のなかで、人間の肉体を対象とする医療においては、1963年に「インフォームド・コンセント」という方法が世界的に合意されています。

もっとも、数学などの純粋数学的な問題などになってくると、これは確かに小林先生の言うとおりで、これをもオリエンタリズムと結びつけて述べて、何ごとか論ずることはできません。その意味では、自然科学の原点に純粋数学のようなものが置かれていることが、自然科学の科学としての強みだろうと思います。

しかし、応用科学に至れば至るほど、実際には自然科学もこのような社会的状況に主体を埋め込むということと無縁ではあり得ません。それは1960年代以降、今日まで明確になっていると私は思っています。まして、人文科学や社会科学はそうであるということです。

あと翻訳の問題は、むろんあえて暫定的に「共同態度論」と訳していますので、適訳があるか、ないかということは、これからさらに摸索しなければいけません。しかし、なぜ

先に英語が出てきたのかと、日本人なのに最初に日本語が出てこないで、英語が出てくるのは何ごとかと。だから、加々美こそがオリエンタリストだと言われれば、そうなのですが、やはり自分の考えていることを言葉で表現しようとする、どうも他にないということと、昨日から言っているように、この問題を愛知大学の学内、東海地域、愛知県、日本、そのような狭い世界に向けて提起したいと考えているのではなく、マドソンさんやハーウィットさんもお招きしていますように、また今回、参加されなかった世界のいろいろな方々にも私の論文をお送りしております。そのときに、やはりより理解を得ることが可能だと思える概念は、「co-behaviorism」という英文でした。そこは翻訳上の問題としては、確かにご指摘のあるように、周曉虹先生が指摘したとおりです。この点については、検討の課題としたいと思います。

それから、まだいろいろあります。「価値観の対立」と「利害関心の対立」は同じものではないと先ほど宋さんも指摘されていますし、いろいろな方が指摘されています。あの図中、実はヴェーバーが言った「*interessenlage* (英: *interest situation*)」との構図も重ね合わせなければいけませんでした。この点については、マックス・ヴェーバーの宗教社会学の中心テーマでした。価値の転換は利益状況の転換の転轍機となると。つまり、価値判断こそが利益状況を変える転轍機のような、ある方向まで進んできた利害状況を価値観の変化によって変えていくという問題を伴っていたということです。

最後にもう1点だけ。トーマス・クーン(Thomas S. Kuhn)の問題です。クーンは「パラダイム」という概念を提起しました。パラダイムとはこのようなことです。

今、私は普通の遠視の眼鏡をかけています。これを黒眼鏡に替えます。そうすると見える世界が変わってきます。さらに、これを赤い眼鏡にすると見える世界も変わってきます。このように色の違う眼鏡をかけ替えるようなものが「パラダイム転換」であると、クーンは言っています。ですから、例えば世界が7色にしか見えない人間と、世界が12色に見える他の動物と比べたときに、12色に見える動物のほうが優れていて、7色にしか見えない人間のほうが劣っているということはないのです。つまり、7色に見える眼鏡をかけることと、12色の色を分別できる眼鏡をかけること、実はそこに進化論という累積的な進化による転換は何ひとつ起きていません。見える世界が変わる。しかも変わった世界を12色でも説明できるし、7色でも説明できます。その両者の世界観は等価である、という考え方がクーンのパラダイム転換の最も優れた指摘です。

天才と凡才というかたちで、樞根先生が説明されましたが、天才は価値観を変えることが出来、凡才は変えられないという問題。そのレベルでクーンの議論は終わっているのではありません。つまり簡単に言うと、7色の眼鏡をかけようと、12色の眼鏡をかけようと、ですから相対論と同じです。アインシュタインの一般相対性理論とまったく同じです。これをクーンは、科学史の世界観の転換に応用して論じたと私は思っています。

以上です。いろいろと長くなりました。

●—司会 はい、長くなりました。あとちょうど1時間余りの時間が残されています。最後の3つ目の大きなテーマですが、現代中国学をどうするかという話です。その際に、パネルにありますように、いくつかの点が議論されたのではないかとまとめましたので、少

し説明させていただきます。

これは従来の中国地域研究と現代中国学との関係になりますが、加々美論文は、中国地域研究には問題があるという。したがって、現代中国学を構築する必要があるということだろうと思います。

高橋先生はグローバリゼーションのなかで、地域研究の役割は終わる可能性があるため、そのように加々美先生の論文を解釈することもできるだろうという趣旨のことを書かれています。

李春利先生は、グローバリゼーションのもとで地域研究の独自性はだんだんと少なくなっていくだろうということも述べています。そのようなことで、現代中国学という論理はありますが、この両者の関係をどのように見るのか、ということも1つの議論になると思います。

そもそも中国学が果たして成立するのか、しないのかということも含めて、いろいろ困難な長い道のり控えているという議論もあります。具体的にどのような課題があるのでしょうか。それは内容の枠組みです。中国学をもし独自のディシプリンを持った枠組みであると仮定しますと、それは可能なのかどうかということも含めて、既存のディシプリンとの関係がどうなのかということは、どうしても重要な検討課題の1つであろうと思います。

実際、地域研究は既存のディシプリン単独ではできませんので、複数のディシプリンを総合化することによって、全体の姿を明らかにしようということから展開されてきたのだろうと考えられます。そうすると、それと現代中国学との関係はいったいどうなのかということです。このへんは重要な問題だろうと思います。

それから、人文社会科学の世界だけではなく、自然環境の専門家からも自然系を含めた地球規模での視野がどうしても必要であり、それを地域研究、もしくは中国学研究のなかにいかに組み込むかという課題も出されています。

最後になりますが、やはり中国学という場合、中国の枠あるいは地域的な枠をいかに見たらいいのだろうかという問題もあります。ということでいろいろな議論が出たかと思えます。単に国家を固定的、閉鎖的な枠で見るとはではなく、国家内部のさまざまな地域の重層的な関係、さらには国家の枠を越えたより大きなリージョナルな地域との相互関係で見なければいけないだろうという意見も出たと思えます。

そのようなことを念頭に置きまして、これは一括議論ということで、どれでも構いませんので、ご発言をお願いいたします。

●—榎根 最初にクーンの話について少し弁護させていただきます。私が読んだものにはそう書いてあるのです。それは最初にクーンが書いたものです。それがだいぶ批判されて、彼は書き直したのです。ですから、加々美さんが読まれたのは、おそらく書き直した話だと思いますから、眼鏡を替えるというのであれば別に「パラダイム」という言葉を使わなくてもいいのではないかと思います。それだけです。

それから2番目の問題は中国学です。加々美さんの話に反対はあんまりないのではないかと思います。しかし、この話を聞いたのはここにいる人と本を読まれた方だけです。時代は変わってしまして、自分の考え方を広く発信したいのならば、ウェブに載せればいいわけです。ですから、そのようなかたちでこれからの学問はつくられていくのではない

か、というのが私の「統合学としての地域研究」です。

しかし、私は地域研究を実際にはやっていませんから、自分がやった「統合学としての新しい環境学」のコピーを入口のテーブルの上に置いておきました。それを話したら1時間でも2時間でもかかりますのでやめますが、要するにそれはどのようなことかと言いますと、まず情報の共有です。中国に関する情報を共有しないところに誤解が生ずるわけです。そのための一番いいツールはデータベースではないかと思えます。それをまずつくることです。そして、それを共有の情報として、それをベースにして、中国研究者が研究テーマの設定をおこなうことにします。

そのようなかたちでネットワークをどんどん広げていけば、おそらく中国の環境もよくなるかもしれませんし、政治状況も変わるかもしれません。私と同じことを言っている人もいます。そのようなかたちの統合学が21世紀の科学であると。20世紀型の学問のモデルは物理学ですが、21世紀の科学のモデルは統合学になるのではないのでしょうか。詳しい内容は、いま秋山君にデータベース作成を頼んでいますので、私の書いたものがやがてウェブに載りますから、「愛知大学」のホームページにアクセスして、「ICCS」をクリックして、それから「研究業績」をクリックしていただければ読むことができます。

●—小林 一昨日から名古屋に来まして、加々美さんが主張するように、状況を取り込もうと、つまり「客体を主体に取り込もう」と、腰痛をこらえて、自分に鞭打って諸先生方の御高説を御伺いしております、大変勉強になりました。これは、どなたかが言われたように情報をインターネットに入力して、いくら世界に公開してもダメであり、ここで

こうして、主体を痛めつけ腰痛をこらえたという苦勞をしないと身に付かないということで、そうした利点があったことが分かりました。日頃難しく考えたくないことを、無理して考え続けたのであり、その意味で、加々美先生はじめ愛知大学の皆さま方に感謝申し上げます。人は大脳皮質でわかるが、さらに体を使って初めて理解することができるのでしょう。これが第1のポイントです。

私たち日本人が中国人になれるわけはありません。私が思ったこと、日本で言っているようなことを中国に行き話したら、中国の友人が、「おい、おまえ、いい加減なことを言うな、帰ってくれ、迷惑するわ」とすぐに追い返されてしまいます。中国でなくても、日本人が考えたことをそのまま話しても、拒否されるに決まっています。その意味では、今生きている世界に実情によって、国や人間を取り巻く状況の違いをよく見極める必要があります。そのためには相手の国の政治や文化をよく勉強しなければいけません。ですから、私は当面絶対に中国人にはなれないということです。中国人が感じ提起する課題、パラダイム、学問方法からずれるところにこそ、日本人の独自の問題提起と学問的寄与が生じてくるのではないかと。それが2番目です。

3番目は科学の社会的責任です。原子力を発明したことは大変偉大な業績です。日本の電力の40パーセント弱は、原子力発電によっているわけです。それが原爆に使われたことに関して、科学者は大変悩みました。私が尊敬している東京教育大学の学長だった朝永振一郎、湯川秀樹、名古屋大学の坂田昌一など諸先生の原水爆禁止の国際運動の呼びかけには、私もいくらかカンパをしたり、署名運動活動をしたりしたことがあります。しかし、

彼らは大変悩んで苦勞をしたけれども、現実には原爆は世界中にたくさん広がっているのではないですか。どのように阻止するかということは、彼らの責任ではありません。地球全体で一般の民衆が、人類全体がそれについてよく理解していないためです。われわれ人文社会科学者にも責任があるということです。彼らが一生懸命にやってきたから、というような話とは少し違うというのが3番目です。

そして最後に、イデオロギー（体系化され絶対化された虚偽意識）の話です。「1943年に日本の参謀本部将校が、何故、日本はアメリカに負けるから戦争をやめようと言わなかったのか」という問題ですが、それを言ったら「裏切り者」や「国賊」になる、その世間の評判が恐ろしいから、ということではないのです。国民の大多数に、皇国イデオロギーという絶対的な観念体系が取りついていたのです。歴史を見ると、しばしば、ある民族や集団に、例えば最近では中国では「紅衛兵」というような人々に、あるイデオロギーという絶対的な観念体系が取りつくのです。これが始まると、もう止めることができないのです。ですから、いったん戦争が始まれば、なかなか止められなくなる。文化大革命を発動した毛沢東もこれが10年間も続く動乱になるとは思わなかったと思いますね。1年、2年で解決すると思っていたに違いないのです。しかし、いったん中国がソ連修正主義と帝国主義を打倒して世界の先頭に立ち理想の王国を実現する、そして世界で一番早く新しい共産主義社会に突入する、その時が今来ているという英雄主義と終末論的な救済を約束するイデオロギーが紅衛兵や青年たちの頭に取り付くと、もう誰もそれを止めることができなくなった。こうした毛沢東教を信じた集団が何百万、何千万と出たらもう止める

ことができません。日本にも、1930年代に天皇現人神、国体の精華、大和民族、八紘一宇などを信じる神の国が誕生したのです。醒めていた参謀将校も、もう大海原にこぎ出した船から降りることが出来なかったのでしょうか。1920年代の中ごろ、ドイツに留学していてあの凄まじいインフレーションをみた羽仁五郎は、経済と生活の大崩壊が起これば、人間は一気に狂気と化すと言っていました。ですから、イデオロギーの絶対的虚偽意識を、歴史家は、ファシズムやスターリン主義、共産主義、日本の天皇制ファシズムなどを社会経済を批判的に研究することで考えてきたのですが、加々美先生は2つの簡単な要素の組み合わせで解釈されていますけれど、歴史家から言えばあまり説得力がありません。以上です。

●一高 「中国地域研究」と「中国学」との関連についてです。個人的には、「中国研究」を「中国学」のように定義することに違和感を持っています。これについては、過去の会議で自分なりの考えを述べたことがあります。

異なる国を研究対象として、その国の名前の後ろに「学」とつける場合には、どうしても植民地的な色彩を帯びるように感じさせられています。中国国内では、自国研究をするのに「中国学」を研究していると言う研究者は無いに近いです。もし加々美先生がどうしても日本で「新しい中国学」を構築するとすれば、その発想の中には加々美的なオリエンタリズムの要素がないとは思えません。

それから、「中国地域研究」と「中国学」の研究の意味合いが大部違います。意味合いも違ければ方法論も違います。例えば、牧畜業地域社会を説明する論理の枠組みを用いて、農業地域社会を分析していくのは、きつ

と行き詰まります。逆もそうでしょう。同様のことで、産業社会を解釈する説によって農業社会を説明するのは通用しないに間違いありません。そこで、「中国地域研究」と「中国学」研究との関係を明らかにする必要があると思います。以上です。

●一司会 他にどなたか、おられますか。はい。

●一馬場 愛知大学の馬場です。午前中の私の発表に対して加々美先生から論文の誤読だと言われましたので、ひとこと言いたいと思います。

私は、加々美先生の「コ・ビヘイビオリズム」が対象に対する研究態度あるいは方法も含んでいると考えています。それから前のセッションでの「コ・ビヘイビオリズム」に対する議論も大変有効だと思っています。

ただ私の言いたいのは、他の方も言っておられますが、やはり「コ・ビヘイビオリズム」はディシプリンをともなった地域研究の方法ではないだろうと思います。その点に関連して加々美先生は「統合学」とおっしゃっていましたが、私はその概念が面白いと思っています。対象によって、単に「中国学」というと広すぎるような気がします。従来の歴史学や政治学、経済学などと同じようなディシプリンともなった学問的方法を地域研究で即求めるのは非常に難しいことだろうと思います。それだけをお話しておきます。以上です。

●一高橋 高橋です。先ほど加々美先生の答えとの関連で、なるほどと思ったことがありましたので、それを最初に申し上げておきたいと思います。

これは客観という問題です。昨日私は、加々美論文は反客観であると申し上げました。この客観という意味合いが、社会科学、

人文科学では非常に曖昧な概念として認識されてきたと思います。私たちも客観的な立場で中国を理解しようとか、客観的な理解で中国の経済成長を理解しようとか平易に言うのですが、これは大変厄介なことです。

例えば、統計的な手法、数式を使って中国を理解する際に、データを駆使するということがあります。しかし、問題は出たデータをどのように読むかということになります。統計は、読み方まで教えてくれません。結局は、出た数字を自分で理解するしかありません。このときに必ず主観が入ります。この主観を客観に置き換えることはできません。したがって、学者の見方、分析の仕方はさまざまであり、それをどのように評価するかということとはまた別問題です。客観の意味合いをもう一度考える機会を、昨日、今日は与えてくれたと思います。

それと関連して、やはり「真実」ということについてです。「真実は1つではありません」ということを加々美先生はおっしゃいました。これは、この件に関しては真実に近いのではないかと思います。つまり、真実も変わり得るのです。昨日、私が引用しました、ハイエク (Friedrich Hayek) の本のなかに、まさにそのようなことが書いてあります。「真実とは、客観的に見ようとした人々の集団的な恣意、主観である」と。このようなことを併せ考えますと、客観と真実は流動的であるということが1つです。

また、中国学あるいは現代中国学ですが、中国をどうも頭から最初に考えすぎている気配があります。私も考えてみますと、確かに中国の農村に行き、農家に行ったり、畑へ行ったりしていると中国という意識がなくなってしまう。これはやはり農民がどのような耕し方をしているのか、どのようなも

のをつくっているのかと、あるいはこれをどこで売っているのか、その技術や制度がどうなっているのか、もちろん土地制度などのさまざまな制度の違いはありますが。しかし、それは農民の置かれた状況は多様であるということの1つであり、そこに国家という中国が蓋然的に固定的にあるわけではないということを思うことがあります。

そうしますと、フィールドワークにしろ、まず国家ありきではなく現場ありきであり、状況把握が先に来ることがよくあるというのが実態です。その意味で、中国という国、あるいは地域をそれほど意識しなくてもよく、むしろさまざまな産業や人々の置かれた状況をどのように捉えていくのか、問題点はどこにあるのか、そして、それが他の地域の人々とどのような関係があるのか。そして、そこにどのような政策、手だてを講じていくともっとよくなるのか、ということを考えていくだけ十分なのではないかという気もします。

先ほど川井先生が、地域研究が場合によってはなくなっていくということを私が申したということをおっしゃったのですが、まさに私はそのことを含意して申し上げたつもりです。以上です。

●—司会 はい。鈴木さん。

●—鈴木 質問のかたちで「学」の成り立ちについて2点ほどお尋ねしたいと思います。

先ほどから権根先生もおっしゃっていることですが、加々美先生の議論をそのまま発展させていきますと、現在、現代社会のなかで急速に進行浸透している「情報の外部化」、人間が脳内記憶しなくても人間の外部に情報を配置しておいて、それを組み合わせれば、その主体が知りたいことが構成できるという状態ですが、その問題をどのようにお考えに

なっているのかとても興味があります。

近代的な学問やオリエンタリズムは、サイドも言うように、ある意味では情報をある特定の権力的なところに集中して、その権力自体が思うようにその知を配分することによって、権力自体を存続させるという構造だったと思います。

そうだとすれば、まだ十分とは言えませんが、すべての情報が同時に共有可能な状況が出現しつつありますが、そうした状況自体を、先生はどのようにお考えになっているのでしょうか。「統合学」という言い方を先ほど榎根先生は問題提起なさいましたけれども、「学知」そのもののありようが変わるのが21世紀のさだめなのではないかと思うので、このようにお尋ねする次第です。

その学知におけるオリエンタリズムの問題として、端的に申しますと、グーグル(Google)が勝つのか、百度(Baidu)が勝つのかという問題も、今後出てくると思います。百度がグーグルを凌駕するような世界が現れますと、これはもう「中国学」ではなくて、世界知が中国化するだけであるわけで、そのようなこともどのようにお考えか興味があるのです。

2番目に、加々美先生がこのような提唱をなさる動機はすごくよくわかります。そこで、これは先ほどからいろいろな方から出されている問題ではありますが、人間にはいろいろな限界があるわけでして、その端的な真実としては、現在のところ、われわれは死んでしまうという現実があるわけです。ご存知のように近代知の基層を構築したホップズも、「自分は死とともに生まれた」と、生と死との境界をどのように考えるのか悩んでいたわけでして、そういうわれわれに予め敷かれた限界である「死」という問題、そして

「死後」の問題をこの「学」はどのように含み込んでいくのかということがとても気になっています。あとでまとめてお答えいただければ結構ですけれども、よろしく願いいたします。

●—楊棟梁 我想讲两个问题。一是对加加美教授提出的共同态度问题的看法加以补充。我觉得这是这次会议中最主要的收获之一。我的理解是，我们作为学者在谈国别研究、中国学研究的时候，要改变以前的那种信息不对称、态度不对称和立场不对称的状况，我们要有一个共同态度。当然，这个共同态度能够多大程度上实现是另一个问题，重要的是大家是不是向着这样一个共识的目标来努力。第二，我一直在大学工作，实际上也在学科建设方面的负些责任，在中国的大学，最近十年一直在围绕着学科建设问题进行改革。所以谈到中国学的时候，它的意义在于可能会在学科设置的方向上有所突破。现在我们中日，还有很多国家，聚集一堂来研究能否建立一个地域国别学的问题。中国学能不能成立呢？也许能成立，但是它不能成为一个学科。我们知道，学科是分成学科门类，分成一级二级学科的，如果从中国学是一个学科这样的角度来理解的话，他只能在大学科下的二级学科、三级学科甚至是一个学科方向的位置，但是有可能沿着这一方向来建设。我们讨论中国学的最大意义在于，如果这个方向是正确的，将来有可能建立一种地区国别学这样一种学科体系，这是有可能成立的。中国学成为一个单独学科困难在于，世界上有200左右个国家，是不是要建200个什么什么学？这显然是不能成立的。它应该有一个共性的标准，那就是地区国别学。所以我们从中国学开始讨论，对于建立这样一个学科就非常有价值。这样的学科有什么特点呢？毫无疑问，和法学、经济学等专门学科不同，它应该是综合性的、复合性的、交叉性的，这一点

恐怕没有什么争议。其中重要的一点是，它应该以实证、求真、求实、的研究为基础，而不应对策性的。

●—マドソン One issue in academic discipline, when it becomes an academic discipline, is how people in that discipline reach consensus about what is good or bad research or what is true or not. And often when disciplines are very immature, you have a hundred or a thousand flowers blooming, and no way to know which is the right one. The great American, scholar of American studies in China, Li Shengzhi, who was a friend of mine, before he died told me, “In China it’s not that we don’t have ideas. Everyone has plenty of ideas. The problem is nobody has the same ideas about anything.” And what academic disciplines try to do is to concentrate ideas so you get some consensus and some orderly way of going forward. So I think “Chinaology” if it gets formed as Professor Kagami wants it to be, will have the advantage of bringing into dialogue about China a greater variety of factors than before. Interaction between foreign and Chinese scholars and so forth. But one question I didn’t see answered clearly yet in his paper is, how will this discipline be able to generate consensus? Will there just be many, many different views of China? Will there be any way to determine, as time goes on, which are the best views, which are the ones that should be respected and so forth? How will that be done? And that is something that I would like to see some clarity on.

●—周長城 关于学科的建设，大家回头看一看社会科学发展的历史，就像华勒斯坦在《Open Sciences》这本书中谈到的，科学的发展包括三个阶段，实际上在二战以后学科的边

界是越来越模糊，而且呈现综合性的趋势。区域研究本来就很难说是哪一个传统学科的，在这种背景下来讨论是不是成立一个学科，我觉得为时过早，而且与现在社会科学发展的趋势也是不太合宜的。所以，我认为更重要的是要有问题意识，当然也许将来某一个时刻当T趋近无穷大或者T零的时候可能这个学科会成立，但在目前谈论我觉得还不太适宜，主要还是要有问题意识，我们要讨论什么样的问题，要确定一个共同的主题来研究，不一定非要建立一个学科。另外一点，对目前我们中国的八大学科、几大门类，我是不太赞成的，怎么来判断成不成为一个学科？容易僵化。人类社会的发展由简单到复杂，比如从古典经济学、经济学到现在的各种经济学门类的演变，很难讲是怎么回事，其发展的态势不一定要束缚，这个border（边界）越来越被冲破、被打破，越来越整合。所以我觉得能不能成为一个中国学，可能是将来某一个深刻的事情，现在还是要以问题意识为主，研究各种方法的整合。社会科学的复杂性，不能用一个简单的学科方法来解决，是由多方面的方法来解决，现在的很多问题都是这样。比如说性别研究是属于哪个学科，政治学、经济学、社会学都可以来研究，贫困问题由哪个学科来研究？这也很难讲。至于什么什么学的定义，我认为随着学科的发展也会重新构建或者重新来诠释这个问题，所以，争论能不能成为一个学科还为时过早，但是我们可以讨论，在这个问题意识下面思考在什么样的框架下去研究这些问题，可能是当务之急的，这是我的观点。

●—陳 我简单说两句。这个话题是我长期以来一直在思考的问题，因为我们也遇到这样一个现实问题。我来自中国社科院，中国社会科学院下面有经济所、法学所、哲学所、文学所，那么为什么又成立一个当代中国所呢？大家一直都在讨论当代中国所有没有必要成

立。恰恰像今天这个问题一样，就是说我们各个学科都有了，那么还要有一个现代中国学部，这个怎么整合呢？我比较同意杨栋梁先生的意见，分支的研究不能代表总体的提升。我们在这个问题上，打个比方说，我们在研究一座房子，可能有研究玻璃的，由研究水泥的，有研究木材的，但是各自得出的结论各个学科是不一样的，我们最后要回升到一个总体的对房子的评价上，也就是说我们研究环境的也好，研究其他的也好，最后我们的结论一定要落到现代中国是一个什么样的社会，这样一个大的目标上来。

●—宋 就中国学的发展，我讲一下中国国内的一般说法，我们国内经常讲学科的需求和国家的需要，也就是说要想发展中国学，国内也在争论是学科带动需求，还是需求带动学科，这就是说中国学研究带有很鲜明的目的性。爱知大学如果要建立中国学、尤其是现代中国学，必须要有很鲜明的目的，要有很鲜明的爱知大学的特点，如果没有这个特点，就很难可持续。我建议在讨论中国学时，就像加加美先生在论文中回顾的一样，中国区域研究也好，地域研究也好，都有很鲜明的目的性，没有目的性肯定不能发展，这是我的意见。

●—張 我就是根据物质和精神运动的不同形态来划分的，比如说自然科学研究自然物质的不同运动形态，而划分为物理学（包括力学）、化学、生物学，人文社会科学也是这样来划分的。每一种运动形态无非是表现为两个轴，一个是时间的纵轴，表现为历史的运行过程；一个是空间的轴，就是它的空间结构。所以我们既可以从纵向划分，也可以从横向划分，比如刚才陈先生讲的中国社科院的学科划分，几大学科，即原来的哲学、文学、经济学，这是从传统的人文社会科学分类，但是也可以从空间上分，如美国所，原苏联东欧所，现在是中亚所，南亚所、日本所，还有拉美所等，这是从

空间上来划的，在这个意义上讲，为什么不能划一个中国所呢？为什么不能有一个中国学呢？所以全球可以以全球的空间来划，更大一点，宇宙空间可以分为宇宙学，还可以分为东方、西方，再分成亚洲，现在区域发展的势头很猛，可以专门研究东南亚。在空间上，中国现在进行西部大开发，专门研究西部大开发，西部学，这个也有，就是中国的地域研究。所以我说这个问题，研究中国学并不排斥各个学科，比如说研究中国历史的，研究中国政治的，研究中国外交的，也可以聚焦于中国，它们并不排斥。不同学科以中国这个范围为聚焦点，来进行综合研究，这是一个很简单的科学方法论的科学划分问题，所以我认为叫中国学未尝不可，但是不要把这个东西理解死了，不要排他，而恰恰是相反，是聚焦于这一点上。我们在座的诸位，有哪一位是专门研究中国学的？我不就是因为是一个中国人，生于斯长于斯，知道一点情况，在某些方面知道一些一鳞半爪的知识，才参与这个研究。但我不能说我就是个专门从事中国学的，别的东西都不研究了，到了日本以后不去了解日本社会了，恰恰相反，我有了这面镜子，我就可以反思，可以更了解中国和日本的差异，在比较中更深刻地认识中国，所以我认为中国学是可以确立的，是有对象的，既然有中国，既然你研究它，怎么不能叫中国学呢？

●—藤田 愛知大学の藤田です。先ほど申しましたように、私は地理学をやっていますので、地理学では中国であろうが、どこであろうが、これまでもそれぞれの地域研究をしてきました。そこでの一番大きな特徴は、それぞれの地域の特性をどのように明らかにするかという点です。それは中国だけを研究しても基本的には明らかににはなりません。つまり、他の地域との比較研究のなかで初めて明らかになってきます。したがって、地域間の

比較など、もう少し大きなサイズの視点が必要だと思います。

しかし、それは同時に、先ほど高橋さんがおっしゃったように中国は広いです。これは日本でも小さいなりにそうですが、そのなかでのいろいろな地域の構成があります。これは基本的には、寒いか暑いか、それは田んぼができるか、畑しかできないかということで生産力が違ってきます。いろいろな基礎的なデータのうえに、どのような政治的なシステムや社会的なシステムが出来上がっていくのかという問題にも展開してくわけです。

そのようなものが統合的、整合的に理解されると、中国のなかでも地域差が出てきます。ただ地域差に、どこまで本質的な問題を見いだすのかということ、また次の課題になるかと思えます。

要するに、「中国学」を考えるとするならば、中国だけをやっていてもわからないということ。地域間の比較、国という単位でするならば、国の枠の問題もありますが、国家間の比較という視点がないと成立しないのではないかと思います。以上です。

●—司会 他にありますか。はい、どうぞ。

●—周晓虹 我是南京大学周晓虹，我刚才听了很多老师的发言，就想谈一下关于在什么情况下，一个研究它有价值成为一门学科。我认为刚才的讨论里有一个问题，这个问题就是说并不是一个对象存在，它就一定会成为一个什么学，研究和一门学科，也就是 studies 和 disipline 之间的一个很重要的区别，就是在于当它要成为一门什么学的时候，可能不仅要有研究对象的存在，而且很重要的应该还有相应的、独立的方法论和研究方法，而这种独立的方法论和研究方法有别于其他学科。如果说这个前提不存在，而仅仅有一个研究对象，就建

立什么学的话，那就可能导致刚才有的学者所谈到的，世界上有多少个国家，是不是就要建立多少个学科？我认为方法论究竟能否成立以及它的对象的意义时，取决于一些独特的因素，这些因素包括在某一个时期内，一个国家或者一个地区的发展，它对其他的国家和地区的发展所具有的一般意义是什么？那么从这个意义上讲，中国在很多年里一直提倡对自己民族文化的认同和宣扬民族文化，在这个过程中有一句常用的话，叫做“只有是民族的，才是世界的”，对这个观点我是持不同意见的。我曾经在1992年写了一篇文章，专门与这样的观点进行讨论。我认为这句话的前半段是对的，只有民族的才是世界的，但是后半段应该注意到，并不是所有的民族的都能成为世界的。那么，什么样的情况下民族的能够成为世界的呢？换句话说，民族的本身的这条道路它是独特的，并且这个独特的东西对其他的民族是有影响、有意义的，无论是正面的意义还是反面的意义。如果这个民族在某一个方面没有独特的价值和意义的话，那么它就不可能成为世界的，换句话说，它已经是世界的其他民族的仅仅是一种反应或者是一种以经被反应了的东西，它没有独立地被研究的价值。所以从这个角度来讲，加加美老师的观点的意义在于，他可能是希望能够在在中国研究中间形成自己不仅是中国研究独立的研究对象，因为中国本身是独特的，也希望能够在在这个研究中间形成一种独特的方法论和独特的研究方法。这样的话，中国的研究作为地区研究就可能成为一个什么学，所以从这个意义上讲，可能我们在探讨这个问题就会取得一种一致性。当然在这种意义上会不会也可能具有一种大国沙文主义的观点，我认为只要我们警惕，就是刚才讲到的，它不在于一个国家的大小，也不在于这个国家在某一个时期对世界的主宰，而在于这个国家所走的道路对其他国家能否具有影响或

者借鉴，如果有影响和借鉴意义的话，我想在一定时期它就可能成为一种研究，比如说蒙古，我们知道它在历史上也有一个蒙古学或者蒙古研究，但是如果没有这一点的话，它的价值和意义就会逐渐地衰减下去。谢谢大家！

●—張 周教授所讲的这个，前半部分是鲁迅讲的，“愈是民族的，才愈是世界的”，是在讲到文艺这个问题上的时候，你有民族的特点，共性寓于个性之中，主要讲的是一般寓于个别之中，是讲这个辩证法，反过来就走向唯心论了，所以后半段不对。但是，作为中国学者，方法论就应该是各个学科的聚焦，其方法论也就在各个学科中蕴含着，关键是如何将这些学科的方法整合到一起，把它的研究成果整合到一起，就是我刚才说的聚焦到这儿。那么这个方法是怎样形成的呢？我们无法先验地构成，还是我刚才说的，“草鞋没样，边打边像”，中国学这个学科在构建的过程中产生成果、产生人才，也概括出它的方法，探索出它的道路，还是那句话，“摸着石头过河”。

●—司会 あと7分ほどしかありません。ではこれまでの議論を踏まえて加々美先生から7分間でまとめていただきたいと思います。

●—加々美 頑張ってみます。最初に、腰痛をおして参加していただきました小林先生にお答えしたいと思います。

板垣の軍国主義者、愛国主義者の問題です。1943年に、多くの青年参謀には日本がほぼ負けるとわかっていたということを、戦後間もなくその世代の大人から子どものころ聞いたことがあります。しかし、あえてそのことを言うことができなかったというのです。なぜ、言えなかったのだらうかとずっと考えてきました。突然に2002年2月から4月にかけて、みずほ銀行の統合問題が起きたときに気がつきました。あのときに、キャッシュコーナーのATMシステムが麻痺をして、

巨額の損害を出しました。そのとき、統合前の旧第一勧業銀行の課長レベルの幹部は事前にそうなることがわかっていたというのです。それはあとから出てきた話ですが、事前にわかっていたそうです。しかし、言えなかったというのです。これはイデオロギーの問題でしょうか。イデオロギーの問題ではありません。どこに問題があったのかはやがて追求してわかりました。

4月1日から統合を開始することになれば巨額の損失が生じると。しかし、3カ月後の7月に統合した場合どうなるのか。何も起きなくて順調に進む可能性もありますが、3カ月統合を遅らせることによって、みずほ銀行は何億円もの損失を出します。つまり、統合延期によって確実に損失が出ます。そうなるのと、仮りに4月から始めても何も起きなかったのではないかと。われわれが何億円もの損失を抱える結果になったのは誰のせいかな？ そのため統合延期を主張した課長レベルの幹部は、場合によっては左遷されたり、懲戒を受けるという危険があるわけです。だから、言えなかったというのです。

同じように板垣の軍国主義の問題について言えば、1943年の時点で停戦をする、あるいは休戦すると言えば、当然、日本とアメリカとの間の講和条約は、日本にとっては大変不利な状態下になされることになる。日本の国益にとっては大きな損失を出すことになります。ところが、1945年8月15日まで終戦を延ばしてきたために、長崎と広島に原爆が投下され、戦死者300万人を超える犠牲を出した。特にアリューシャン列島のアッツ島をはじめとしてあい次ぐ玉砕が起きましたから。ですから、その損失は莫大なものとなりました。

仮に1943年12月の時点で停戦をしていた

としても、日本は支払わなければならなかった損失は、むろんかなり大きなものです。しかし、1945年8月15日の敗戦と比べれば、犠牲ははるかに小さなものであったかもしれません。しかし、もし日本の国家が1943年12月に停戦をしたときに受ける損失の責任は、それを主張した参謀たちにかかってくることになり「売国奴」としての汚名も着なくてはなりません。ですから、停戦や休戦の主張は容易にできないと。

簡単に言えば、イデオロギー的なものよりは、命をかけても、そのために「売国奴」と言われようと自分の信念を貫くという気概がなかったのです。いずれにしても、これは単なるイデオロギーの問題ではなく、自分の価値判断に対する、愛国主義に対する忠誠です。これがマックス・ヴェーバーの価値合理性と利害状況（*interessen lage*）にかかわる、利害状況の転換を呼び起こすような価値合理性が働くか否かを測る重要なメルクマール（*merkmal*：指標）になるわけです。この点をひとつ申し上げておきます。

先ほど、いろいろな方はお話になったなかで私が一番ダメージを受けたのが、マドソンさんの意見です。いいか、悪いか、より真実か、虚偽か、あるいは提起された新しい方法論が尊敬されるべきかどうかについて、考え方が一致しない、学問分野として、コンセンサス（*consensus*）を得ないものは、その限りでは、新しいディシプリンにはなり得ないという指摘です。いろいろな方の指摘のなかで、私は一番こたえました。

現に今、この場でなおコンセンサスは得られていません。いろいろな意味で努力の途中ですが、一番大きな問題は、私が「コ・ビヘイビオリズム」のなかで、実際には「中国学」についての具体的な枠組みを示していな

いことです。

つまり、別の言い方をすると、「コ・ビヘイビオリズム」は原理論であり、これをインドに適用すればインド学となり、中国に適用すれば中国学となるというものとして提起していますが、なお原理論にとどまっているということです。もちろん、私自身の努力も不足しています。実際に「コ・ビヘイビオリズム」を使って、中国を研究すると、いったいどのような具体的な枠組みが現れてくるのでしょうか。これはここ数年のうちにかならず実施するつもりです。中国学の枠組みも提起するつもりです。もちろん中国学の枠組みは次々に変化していきます。なぜかという状況は留まりませんから。当然、時代とともに、状況は変化していきます。

しかし、そこにある種の固有性が必ず生まれてきます。なぜかという、某県、某郷の環境の水質汚染を問題にしたときに、その水は伝統的にそこに住む農民によってどのように用いられてきたのか、過去、数百年の間にどのように用いられてきたか、その土地の農民は水に対してどのような意識を持ってきたのかという問題は、実は公害問題と切り離すことができません。

つまり、状況は歴史とともに、時間のタイムシリーズとともに連続性を帯びています。連続性を帯びている時間、そして空間も同じように連続性を帯びています。連続性を帯びているから、未来における連続性のなかで変化を起こすわけです。

そうすると、それらを組み込まない意識は状況に主体を埋め込んでいないことになります。なぜかと言うと、水俣市の公害問題を考えてください。100年以上の歴史のなかで、水俣市の不知火海が漁民とどのようにかかわってきたのか、そのような状況の連続性を

視界から除いては、水俣公害研究は水俣研究ではありません。「水俣学」とは言えないのです。

「水俣学」はその時間空間の連続性のうえで状況がどのように今日に至り、それがどのように解決可能なのかといった点までを解き明かすところに「水俣学」の根本的な在り方があるのです。「中国学」も同様です。

「国別学」は、国家を1つの単位にしているのかという問題については、既にお話したとおりです。これは連続性を問題にするときに、その連続性は、例えば、加々美という人間の具体的なありようを皆さんはご存じないわけです。私が小さい時に12人の兄弟の末っ子として大阪で生まれ、そのあとどのような遍歴を経て、ここに座って、皆さんに話をしているのか。これがなければ加々美学は成立しないわけです。それが加々美の「コ・ビヘイビオリズム」みたいなものを提起させているわけです。

その類のことが全体としてあるとすれば、それは当然、国家も越えていきます。越境性を持っています。現に、私は皆さんと話をするときには越境的意識をもって話をしています。そのように、果たして国家なのか、何なのかというときに、他には代えることのできない、代替することのできない状況の固有性があります。ですから、そこに固有な「学」も成立するのです。それだけのことです。

それでもとりあえずは、主体としての国家は抜かすことができないものですから、国家が状況にかかわる度合いはますます高くなっ

てきています。その意味で「国別学」が、暫定的に用意されているということに過ぎません。

「コ・ビヘイビオリズム」が必然的に「国別学」に留まるわけではありません。その「国別学」の外側に越境的な「学」というものが成立します。ただし、これを今までの一般的なディシプリンと同じように考えることはできません。なぜならば、加々美の固有性、中国という社会、某県、某郷の歴史は他に代替しがたいものだという、ある意味では哲学的に言えば「不条理」というものを、ここでは学問的に取り込もうとするからです。その点では、一般的なディシプリンとは違います。

しかし、その枠組みをまず一般原理論として提起しました。かつて宇野弘蔵学派の宇野理論というものがありませんでしたが、それは原理論から段階論に分かれるものでした。その言葉を借用して言えば、「中国学」「インド学」はすべて段階論であり、私の提起している「コ・ビヘイビオリズム」は原理論に留まるのです。以上です。

●一司会 午後1時から長い間議論をしてきました。必ずしもコンセンサスは得られませんでした。本日の議論を通してお互いの認識の範囲が多少なりとも広がったのではないかと思います。その意味では「コ・ビヘイビオリズム」の実践の場でもあったと言えるのではないのでしょうか。それが私の印象です。会場の皆さま、長時間ご協力どうもありがとうございました。